

中国横断自動車道尾道松江線建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(40)

殿平古墳・長畑山古墳

2015

公益財団法人 広島県教育事業団



a. 綾平古墳空中写真 南東から



b. 長畑山古墳空中写真 北から



長畑山古墳石室内遺物出土状況（床上面）



a. 長畑山古墳石室内
出土土器 (床上面)



b. 長畑山古墳石室内
出土土器 (床下面)



c. 長畑山古墳盛土内
出土土器 (土器群 c)

列 言

- 1 本書は、平成20(2008)年度に実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る殿平古墳及び長畑山古墳(広島県三次市吉舎町所在)の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所との委託契約により、財団法人広島県教育事業団(平成25(2013)年4月から公益財団法人に移行)が実施した。
- 3 発掘作業及び出土資料等整理作業の担当者は次のとおりである。
発掘作業(平成20年度)調査研究員 山田繁樹・新井真吾
整理作業
殿平古墳(平成26年度)調査研究員 川崎真二
賃金職員 下戸成葉子
長畑山古墳(平成24年度)主任調査研究員 曾根 猛(現広島県立廿日市西高等学校)
賃金職員 有原ひろみ
(平成25年度)主任調査研究員 曾根 猛
賃金職員 西山梨香
(平成26年度)主任調査研究員 山田繁樹
賃金職員 木村和美
- 4 本書は、川崎(第Ⅰ・Ⅳ-1とⅤ-1章)、曾根(第Ⅱ章)山田(第Ⅲ・Ⅳ-2とⅤ-2章)が執筆し、川崎・山田が編集した。
- 5 本書の執筆・編集に際しては、第Ⅰ章末尾に記載した各氏から指導や助言をいただいた。
- 6 遺物実測図の土器の断面は、須恵器は黒ヌリ、それ以外の土器は白ヌキである。
- 7 図版と挿図の遺物番号は同一である。
- 8 本書に使用した北方位は、旧日本測地系平面直角座標Ⅲ系北を使用している。
- 9 第2図は国土交通省国土地理院発行の1:25,000地形図「吉舎」を使用した。
- 10 出土品及び記録類は、広島県立埋蔵文化財センター(広島市西区観音新町四丁目8-49)において保管している。

目 次

I はじめに	(1)
II 位置と環境	(8)
III 調査の概要	(13)
IV 遺構と遺物	(15)
1. 殿平古墳	(15)
2. 長畑山古墳	(19)
V まとめ	(47)

巻頭図版目次

巻頭図版 1	a. 殿平古墳空中写真 南東から	b. 長畑山古墳空中写真 北から
巻頭図版 2	長畑山古墳石室内遺物出土状況 (床上面)	
巻頭図版 3	a. 長畑山古墳石室内出土土器 (床上面)	
	b. 長畑山古墳石室内出土土器 (床下面)	
	c. 長畑山古墳盛土内出土土器 (土器群 c)	

挿 図 目 次

第 1 図	中国横断自動車道尾道松江線路線図と調査した遺跡の位置図	(2)
第 2 図	周辺主要遺跡分布図 (1:25,000)	(10)
第 3 図	周辺地形図 (1:1,000)	(14)

殿平古墳

第 4 図	調査前地形測量図 (1:150)	(15)
第 5 図	墳丘測量図 (1:150)	(16)
第 6 図	墳丘土層断面図 (1:60)	(17)
第 7 図	箱式石棺実測図 (1:30)	(18)

長畑山古墳

第8図	調査前地形測量図(1:200)	(19)
第9図	墳丘測量図(1:200)	(20)
第10図	墳丘土層断面図(1:60)	(21)
第11図	石室実測図(1:40)	折込
第12図	石室内遺物出土状況実測図(1:40)	(25)
第13図	土器群a遺物出土状況実測図(1:40)	(26)
第14図	土器群b遺物出土状況実測図(1:40)	(26)
第15図	土器群c遺物出土状況実測図(1:40)	(27)
第16図	石室内出土遺物実測図1(1:3)	(29)
第17図	石室内出土遺物実測図2(1:3)	(30)
第18図	石室内出土遺物実測図3(1:3)	(31)
第19図	石室内出土遺物実測図4(1:2)	(33)
第20図	石室内出土遺物実測図5(1:1, 1:2)	(34)
第21図	土器群a・b出土遺物実測図(1:3, 1:6)	(35)
第22図	土器群c出土遺物実測図(1:2, 1:3)	(36)
第23図	土器群c盛土内出土遺物実測図(1:3)	(37)

表目次

第1表	中国横断自動車道尾道松江線建設事業等に伴う報告書一覧	(3)
第2表	長畑山古墳出土土器観察表	(37)
第3表	長畑山古墳出土鉄器観察表	(42)
第4表	長畑山古墳出土耳環観察表	(45)
第5表	長畑山古墳出土玉類観察表	(45)
第6表	三次盆地で箱式石棺が埋葬施設の調査された古墳の一覧表	(48)
第7表	長畑山古墳出土遺物の出土地点一覧表	(50)

図版目次

殿平古墳

図版1	a 調査区全景 垂直・やや東から	図版3	a 蓋石検出状況 北西から
	b 墳丘全景 南西から		b 石棺内土層 北西から
図版2	a 調査前 北東から		c 石棺検出状況 北西から
	b 墳丘土層 北東から		d 掘方完掘状況 北西から

c 周溝土層 西から

長畑山古墳

図版 4 a 調査区全景 空中写真 東から

b 調査区透景 北西から

c 調査前 北東から

図版 5 a 調査前 北西から

b 調査前墳頂部 東から

c 墳丘土層 北から

図版 6 a 周溝西側土層 北から

b 墳丘検出状況 北から

c 墳丘検出状況 南西から

図版 7 a 開口部上層遺物出土状況 北から

b 奥壁上層人骨出土状況 南から

c 上面土層 南から

図版 8 a 上面遺物出土状況 1 南から

b 上面遺物出土状況 2 南から

図版 9 a A区上面奥壁周辺

遺物出土状況 北から

b A区上面遺物出土状況 南から

c B区上面遺物出土状況 南から

図版 10 a B区上面遺物出土状況 東から

b 下面土層 南から

c 下面遺物出土状況 南から

図版 11 a A区下面遺物出土状況 南から

b A区下面遺物出土状況 東から

c B・C区下面遺物出土状況 東から

図版 12 a 棺台石検出状況 1 南から

b 棺台石検出状況 2 南から

c 土器群 a (周溝内) 出土状況

北東から

図版 13 a 土器群 b (盛土内) 出土状況 1

左 135 南西から

右 136・137 西から

b 土器群 b (盛土内) 出土状況 2

136・137 南東から

c 土器群 c (盛土内) 出土状況

南東から

図版 14 a 盛土土層 南から

b 盛土土層北側 東から

c 盛土土層西側 南から

図版 15 a 盛土土層東側 南から

b 床整地土層 南から

c 基底石検出状況 南から

図版 16 a 掘方完掘状況 南から

b 完掘全景 西から

c 空中写真 西から

図版 17 長畑山古墳出土遺物 1

図版 18 長畑山古墳出土遺物 2

図版 19 長畑山古墳出土遺物 3

図版 20 長畑山古墳出土遺物 4

図版 21 長畑山古墳出土遺物 5

図版 22 長畑山古墳出土遺物 6

図版 23 長畑山古墳出土遺物 7

図版 24 長畑山古墳出土遺物 8

図版 25 長畑山古墳出土遺物 9

図版 26 長畑山古墳出土遺物 10

図版 27 長畑山古墳出土遺物 11

図版 28 長畑山古墳出土遺物 12

I はじめに

中国横断自動車道尾道松江線は、広島県尾道市を起点とし、三次市で中国自動車道に接続し、さらに中国山地を横断して島根県松江市を終点とする延長137kmの路線である。瀬戸内しまなみ街道（西瀬戸自動車道）と一体となり、山陰～山陽～四国の連携を強化し、沿線地域の社会経済・生活文化の発展に大きく寄与することが期待されている。平成26年度の世羅IC～吉舎IC間の開通で、全線供用開始となる。

建設事業に先だち、日本道路公団中国支社広島工事事務所（以下、「道路公団」という。）は、平成13（2001）年2月7日に仮称・甲山IC（現・世羅IC・世羅郡世羅町）～仮称・吉舎IC（現・三次市吉舎町）間の文化財等の有無及び取扱いについて、広島県教育委員会（以下、「県教委」という。）と協議を行った。県教委はこれを受けて現地踏査を行った結果、平成14年9月24日に、協議対象地内に試掘調査が必要な箇所と長畑山古墳（400m）を確認した旨を道路公団に回答した。

当該事業は平成17年10月1日から西日本高速道路株式会社に引き継がれ、さらに、平成18年4月1日から国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所（以下、「国土交通省」という。）が事業者となった。

県教委は、協議対象地内の分布調査及び試掘調査を順次実施した。そのうち、平成14年9月24日に回答した「要試掘地点吉舎No.2」とした地点については、平成18年12月12・13日に試掘調査し、殿平古墳（200m）を確認した旨を平成19年1月23日に国土交通省に回答した。長畑山古墳は平成19年9月25・26日に試掘調査を実施し、範囲を変更する（400㎡→520㎡）旨を平成19年10月16日に回答した。これらの遺跡の取扱いについて県教委と国土交通省は協議を行い、設計変更などによる現状保存は困難という結論になった。

国土交通省は、両遺跡について平成20年2月1日付けで、文化財保護法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の通知）を三次市教育委員会（以下、「市教委」という。）に提出し、市教委は同年2月27日付けで国土交通省に工事に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。これを受けて、国土交通省は同年3月3日、財団法人広島県教育事業団（以下、「教育事業団」という。）に調査依頼を行った。教育事業団は、国土交通省と同年4月1日付けで委託契約を締結し、市教委宛てに同年8月25日付けで、文化財保護法第92条第1項に基づく発掘調査届を提出した。教育事業団は、同年9月1日に市教委から発掘調査報告書を作成・提出すること及び出土品については遺失物法等の規定に基づいて取扱うことに留意し慎重に発掘調査を実施するよう指示を受けたため、同年9月24日から12月26日まで発掘調査を実施した。

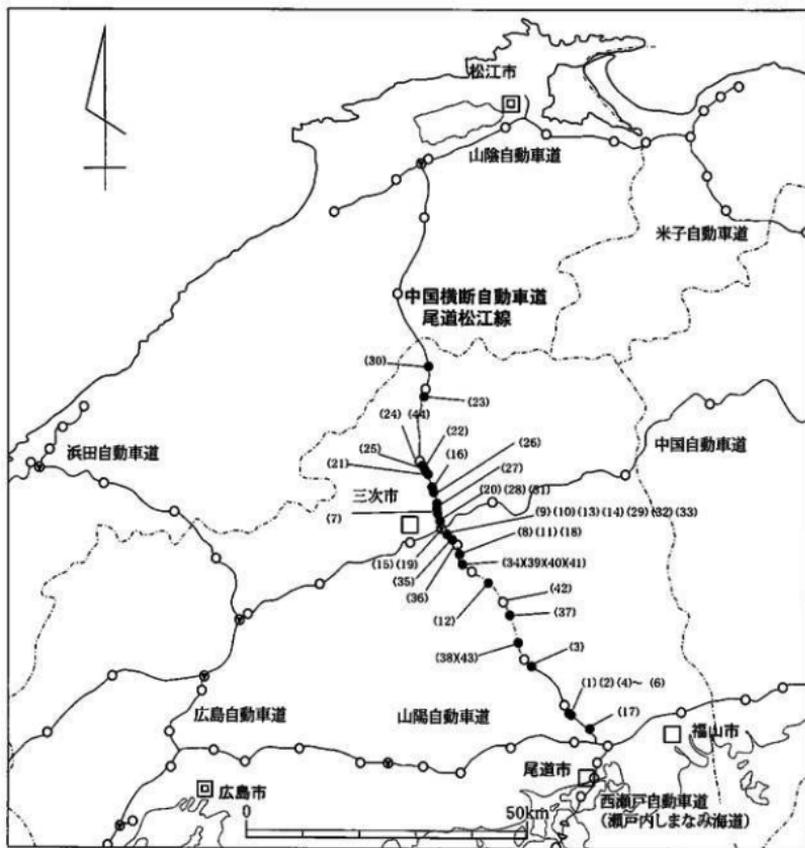
また、調査終了後の平成21年2月28日に県立歴史民俗資料館において開催した備北地域等埋蔵文化財発掘調査報告会の中で報告を行い、140名の参加があった。

本報告書は、以上のような経緯のもとに実施した発掘調査の成果をとりまとめたものであり、本県の歴史及び文化を知るための資料として広く活用されることを願っている。

なお、発掘調査の実施にあたっては、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所、西日本

高速道路株式会社中国支社三次工事事務所、三次市教育委員会及び周辺住民の皆様や地元関係者の皆様に多大な協力をいただいた。また、発掘期間中には、次の各氏から発掘調査方法や遺跡の評価などに関する貴重な指導・助言をいただいた。記して感謝の意を表します。

加藤光臣、新祖隆太郎(故人)、脇坂光彦(氏名は五十音順、敬称略)



第1図 中国横断自動車道尾道松江線路線図と調査した遺跡の位置図

第1表 中国横断自動車道尾道松江線建設事業等に伴う報告書一覧

* 報告書番号は第1図の遺跡の番号と一致する

報告書	遺跡名		地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(1)	牛の皮城跡 (北郡群)	第1次	畝状整地群	平成15年1月20日 ～3月14日	尾道市御調町大町字二の丸	中世	城跡
		第2次	1～4郭	平成15年7月7日 ～10月31日			
		第3次	西塹堀	平成15年11月1日 ～11月28日			
	曾川2号遺跡			平成15年1月20日 ～3月7日	尾道市御調町大町字西川	古代末～中世	集落跡
(2)	曾川1号遺跡	A地区	旧・平成14年度調査区	平成14年10月21日 ～平成15年1月17日	尾道市御調町大町字曾川	弥生時代～中世	集落跡
		B地区	旧・P2第一調査区	平成15年4月7日 ～5月23日			
		C地区	旧・P2第二調査区	平成16年1月6日 ～2月5日			
		D地区	旧・P1				
(3)	池ノ奥古墳			平成16年8月23日 ～10月28日	世羅郡世羅町宇津津天神	古墳時代後期	古墳
(4)	城横遺跡			平成15年1月27日 ～3月7日	尾道市御調町大町字城横	古墳時代か	箱式石棺
	牛の皮城跡 (北郡群)	第4次	5郭	平成18年1月30日 ～2月24日	尾道市御調町大町字二の丸	中世	城跡
		曾川1号遺跡	E地区	旧・P4	平成15年12月1日 ～12月19日	尾道市御調町大町字米田	縄文時代後期～中世
(5)	曾川1号遺跡	G地区	旧・P3	平成16年6月7日 ～8月6日	尾道市御調町大町字曾川・米田	弥生時代～中世	集落跡
		H地区	旧・P3側道				
		I地区	旧・P4側道	平成17年1月11日 ～3月4日			
		J地区	旧・P2				
(6)	曾川1号遺跡		K地区	平成17年4月11日 ～7月1日	尾道市御調町大町字曾川・米田	弥生時代～中世	集落跡
(7)	礼場古墳			平成17年11月21日 ～平成18年1月27日	三次市後山町字礼場	古墳時代後期	古墳
	大平遺跡			平成19年6月25日 ～10月5日	三次市後山町字大平	弥生時代後期～古代	集落跡
	後山大平古墳					古墳時代後期	古墳
(8)	北野山遺跡			平成18年7月3日 ～8月4日	三次市吉舎町敷地字北野山	平安時代	仏教関連の施設跡
(9)	向江田中山遺跡			平成18年4月17日 ～6月23日	三次市向江田町字中山	古墳時代末～古代	集落跡
(10)	榎原第1～3号古墳			平成17年7月11日 ～11月11日	三次市向江田町榎原	古墳時代中期	古墳
(11)	大番奥池第1～3・7号古墳			平成18年4月17日 ～8月4日	三次市吉舎町敷地字中山	古墳時代後期	古墳
(12)	茶臼古墳			平成20年7月7日 ～9月5日	三次市甲奴町字賀字茶臼	古墳時代中期	古墳
(13)	瀬戸越南古墳			平成19年6月25日 ～8月10日	三次市向江田町字瀬戸越	古墳時代中期	古墳
(14)	上陣遺跡			平成19年7月9日 ～8月31日	三次市向江田町字上陣	古墳時代中期	集落跡
(15)	和知白鳥遺跡(第2次)			平成19年9月25日 ～12月21日	三次市和知町字白鳥	後期旧石器時代	集落跡
(16)	曲第2～5号古墳			平成19年7月2日 ～9月21日	庄原市口和町金田字本谷	古墳時代中期	古墳
				平成19年12月3日 ～12月7日			

報告書	遺跡名	地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(17)	家ノ城跡	第1次	南東郭群 平成15年9月16日 ～10月31日	尾道市木之庄町木梨字 家城東平	中世	城跡
		第2次	南東郭群 平成16年5月17日 ～6月11日			
		第3次	1郭周辺 平成17年10月17日 ～11月11日			
		第4次	1郭・北尾根 平成18年4月17日 ～7月21日			
		第5次	1郭・北西尾根 平成19年4月16日 ～6月15日			
(18)	片野中山第9～12号古墳		平成19年4月16日 ～8月8日	三次市吉舎町敷地字中山	古墳時代中期	古墳
	右谷遺跡		平成19年4月16日 ～8月8日	三次市吉舎町敷地字中山	古墳時代後期 ～古代	集落跡
(19)	和知白鳥遺跡(第1次)		平成18年4月17日 ～12月22日	三次市和知町字白鳥・ 四拾貫町字三重	古墳時代中期 ～古墳	集落跡・ 古墳
(20)	段遺跡	第1次	平成18年9月19日 ～12月15日	三次市四拾貫町字段	古墳時代中期 ～後期	集落跡
		第2次	平成19年9月25日 ～12月21日		後期旧石器時代	集落跡
(21)	川平第1号古墳		平成20年4月21日 ～6月20日	庄原市口和町常定字川平	古墳時代後期	古墳
	常定川平1号遺跡				古墳時代後期	集落跡
	常定川平2号遺跡				縄文時代	陥穴
(22)	鶴干場第2～4・9号古墳		平成19年10月9日 ～12月21日	庄原市口和町大月字鶴干場	古墳時代後期	古墳
(23)	只野原1号遺跡		平成20年9月8日 ～9月26日	庄原市高野町下門田字 只野原	古墳時代	箱式石槨
	只野原2号遺跡		平成22年4月19日 ～11月19日	庄原市高野町下門田字 登立	—	自然流路
	只野原3号遺跡	第1次	平成21年5月18日 ～8月28日		旧石器時代 ～古墳時代	包含地 集落跡
		第2次	平成22年4月19日 ～11月19日			
(24)	番久遺跡		平成20年7月28日 ～12月25日	庄原市口和町大月字番久 庄原市口和町大月字原畑	縄文時代～ 古墳時代	集落跡 陥穴
	原畑遺跡(第1次調査)				弥生時代～ 古墳時代	集落跡
(25)	向泉川平1号遺跡		平成20年4月21日 ～7月11日	庄原市口和町向泉字川平	旧石器時代 ～縄文時代	包含地
	向泉川平2号遺跡				弥生時代～ 古墳時代	集落跡
(26)	石谷2号遺跡	第1次	平成21年4月13日 ～6月12日	庄原市口和町金田字植谷	縄文時代	陥穴
		第2次	平成22年4月12日 ～6月23日			
	石谷3号遺跡		平成21年4月13日 ～6月12日	古墳時代後期	集落跡	
(27)	馬ヶ段遺跡		平成20年4月21日 ～7月11日	庄原市水越町字馬ヶ段 庄原市水越町字皇塩	古墳時代後期～ 奈良時代前期	集落跡 横穴墓
	馬ヶ段第1号横穴墓				平安時代	炭窯跡
	皇塩遺跡					
(28)	三重1号遺跡	第1次	平成20年11月4日 ～12月19日	三次市四拾貫町字三重	古墳時代～古代	集落跡
		第2次	平成21年4月13日 ～9月25日		古墳時代中期	集落跡

報告書	遺跡名	地区名	調査期間	所在地	時期	内容	
(29)	宮の本第20～26・31・32号古墳		平成19年4月16日 ～12月21日	三次市向江田町 字宮本・天神	古墳時代前期 ～後期	古墳	
(30)	岡東第1～7号古墳		平成20年5月7日 ～9月26日	庄原市高野町岡大内 字岡	古墳時代中期	古墳	
	岡1号遺跡				時代不詳	陥穴	
	岡2号遺跡		平成21年4月13日 ～5月15日		古墳時代後期	集落跡	
	半戸1号遺跡		平成22年4月12日 ～5月14日		庄原市高野町岡大内 字半戸	縄文時代か	陥穴
	岡東第1号横穴墓		平成24年9月3日 ～9月21日		庄原市高野町岡大内 字岡	古墳時代後期	横穴墓
(31)	風呂谷遺跡		平成21年4月13日 ～11月20日	三次市四拾貫町	後期旧石器時代 縄文時代早期 古墳時代～古代	包含地 集落跡	
	風呂谷古墳				古墳時代後期	古墳	
(32)	宮の本遺跡		平成20年4月21日 ～10月31日	三次市向江田町字宮本	古代	集落跡	
	宮の本第11・33～35号古墳				古墳時代後期 ～古代	古墳	
(33)	箱山第3～6号古墳		平成18年8月21日 ～12月8日	三次市向江田町字箱山	古墳時代前期 ～後期	古墳	
(34)	下矢井南第3～5号古墳		平成19年10月9日 ～12月21日	三次市吉倉町矢井 字西見山・敷地北野山	古墳時代前 ～中期	古墳	
(35)	若見追遺跡	第1次	平成19年4月16日 ～5月25日	三次市三良坂町岡田字 若見追	古代	集落跡	
		第2次	平成19年10月18日 ～10月19日				
	畑虎遺跡		平成21年4月13日 ～6月5日	三次市三良坂町岡田字 畑虎	旧石器時代 縄文時代 近世	集落跡	
(36)	三隅山遺跡		平成24年4月9日 ～8月10日	三次市三良坂町長田字 三隅山・堂面	中世～近世	墳墓	
(37)	頼藤城跡		平成20年4月21日 ～7月31日	三次市甲奴町小倉 字塚ヶ道・小豆山	中世	城跡	
(38)	杉谷遺跡		平成21年9月7日 ～10月16日	世羅郡世羅町東上原 字杉谷	古墳時代 中世～近世	集落跡	
(39)	海田原第24～27号古墳		平成22年9月27日 ～12月26日	三次市吉倉町海田原 字殿平	古墳時代中期 ～後期	古墳	
(40)	殿平古墳		平成20年9月24日 ～12月26日	三次市吉倉町海田原 字殿平	古墳時代中期	古墳	
	長畑山古墳		平成24年9月24日 ～12月26日	三次市吉倉町海田原 字長畑山	古墳時代後期	古墳	
(41)	長畑山北第1～6号古墳		平成21年6月29日 ～12月22日	三次市吉倉町海田原 字長畑山	古墳時代後期	古墳	
(42)	善正平1号遺跡・善正平2号遺跡		平成21年4月13日 ～9月25日	三次市甲奴町字賀 字善正平	古墳時代後期 ～古代	集落跡	
(43)	大柳遺跡(大柳第1～5号墓)		平成23年5月9日 ～8月26日	世羅郡世羅町大字川尻 字大柳山	中世	寺院 関連遺構	
(44)	原畑遺跡		平成26年4月7日 ～5月23日	庄原市口和町大月 字原畑	古墳時代か	集落跡	

第1表の報告書

- (1) 財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曾川2号遺跡 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』2005年
- (2) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2) 曾川1号遺跡(A~D地区)』2006年
- (3) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3) 池ノ奥古墳』2007年
- (4) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(4) 城根遺跡 曾川1号遺跡(E地区) 牛の皮城跡(第4次)』2008年
- (5) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(5) 曾川1号遺跡(G~J地区)』2008年
- (6) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(6) 曾川1号遺跡(K地区)』2008年
- (7) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(7) 礼場古墳・大平遺跡・後山大平古墳』2009年
- (8) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(8) 北野山遺跡』2009年
- (9) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(9) 向江田中山遺跡』2010年
- (10) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(10) 権現第1~3号古墳』2010年
- (11) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(11) 大番奥池第1~3・7号古墳』2010年
- (12) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(12) 茶臼古墳』2011年
- (13) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(13) 瀬戸越南古墳』2011年
- (14) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(14) 上陣遺跡』2011年
- (15) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(15) 和知白鳥遺跡 1 (旧石器時代の調査)』2011年
- (16) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(16) 曲第2~5号古墳』2011年
- (17) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(17) 家ノ城跡(第1~5次)』2012年
- (18) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(18) 片野中山第9~12号古墳・右谷遺跡』2012年
- (19) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(19) 和知白鳥遺跡 2 (古墳時代の調査)』2012年
- (20) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(20) 段遺跡(第1・2次)』2012年
- (21) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(21) 川平第1号古墳・常定川平1号遺跡・常定川平2号遺跡』2012年
- (22) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(22) 稲干場第2~4・9号古墳』2012年
- (23) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(23) 只野原1号遺跡・只野原2号遺跡・只野原3号遺跡』2013年

- (24) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (24) 番久遺跡・原畑遺跡』 2013 年
- (25) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (25) 向泉川平 1 号遺跡・向泉川平 2 号遺跡』 2013 年
- (26) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (26) 石谷 2 号遺跡・石谷 3 号遺跡』 2013 年
- (27) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (27) 馬ヶ段遺跡・皇塩遺跡』 2013 年
- (28) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (28) 三重 1 号遺跡』 2013 年
- (29) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (29) 宮の本第 20～26・31・32 古墳』 2013 年
- (30) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (30) 岡東第 1 号横穴墓・岡東第 1～7 号古墳・岡 1 号遺跡・岡 2 号遺跡・只野原 1 号遺跡・半戸 1 号遺跡』 2014 年
- (31) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (31) 風呂谷遺跡・風呂谷古墳』 2014 年
- (32) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (32) 宮の本遺跡・宮の本第 11・33～35 号古墳』 2014 年
- (33) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (33) 箱山第 3～6 号古墳』 2014 年
- (34) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (34) 下矢井南第 3～5 号古墳』 2014 年
- (35) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (35) 若見追遺跡・畑尻遺跡』 2014 年
- (36) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (36) 三隅山遺跡』 2014 年
- (37) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (37) 頼藤城跡』 2014 年
- (38) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (38) 杉谷遺跡』 2014 年
- (39) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (39) 海田原第 24～27 号古墳』 2015 年
- (40) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (40) 殿平古墳・長畑山古墳』 2015 年
- (41) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (41) 長畑山北第 1～6 号古墳』 2015 年
- (42) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (42) 善正平 1 号遺跡・善正平 2 号遺跡』 2015 年
- (43) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (43) 大柳遺跡 (大柳第 1～5 号墓)』 2015 年
- (44) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (44) 原畑遺跡』 2015 年

Ⅱ 位置と環境

殿平古墳・長畑山古墳は、広島県三次市吉舎町海田原字殿平・長畑山に所在する。

三次市は平成16（2004）年4月に旧三次市・双三郡（君田村、布野村、作木村、吉舎町、三良坂町、三和町）及び甲奴郡甲奴町の1市4町3村が合併して新・三次市（面積約778.19km²）となり、南は東広島市、北は島根県に接する。

吉舎町は三次市の南東部に位置し、東は甲奴町及び庄原市総領町、西は上田町、南は世羅郡世羅町、北は三良坂町に接する。町城の80％は山林で、耕地は10％ほどである。西の撫白山（標高522.8m）、南東の水香山（標高557.2m）を最高所とした標高約250m～500mの丘陵地帯となっており、世羅台地や甲奴高原に接する南東部の標高が高く南高北低の地勢である。町を東西に二分するように馬洗川は北に流下し、町の北東を流れる上下川と三良坂町で合流して西に流れ、三次市街地で江の川となり、日本海に注ぐ。馬洗川と上下川の支流沿いには狭長な谷底平野が形成され、耕地や宅地に利用されている。

古くから、吉舎町は備後北部と南部を結ぶ交通の要衝で、県史跡三玉大塚古墳などの古墳を中心とする文化財が数多く残されている。ここでは、三次市吉舎町内で発掘調査が行われた遺跡を中心に歴史的環境を述べていきたい。

旧石器時代

徳市遺跡で、二側縁加工の小型ナイフ形石器2点（安山岩・流紋岩製）が確認されている。

縄文時代

内容の明確な遺跡はなく、敷地・矢野地で石斧が、徳市で石匙が出土したと伝えられている。

弥生時代

集落跡としては、徳市遺跡・敷地本郷遺跡が確認されているが、ともに工事中の発見で住居跡などの遺構は確認されていない。前者からは、弥生土器・土師器・石鏃・石包丁・石斧などが出土しており、弥生時代中期後半～古墳時代にかけての集落跡とみられている。

古墳時代

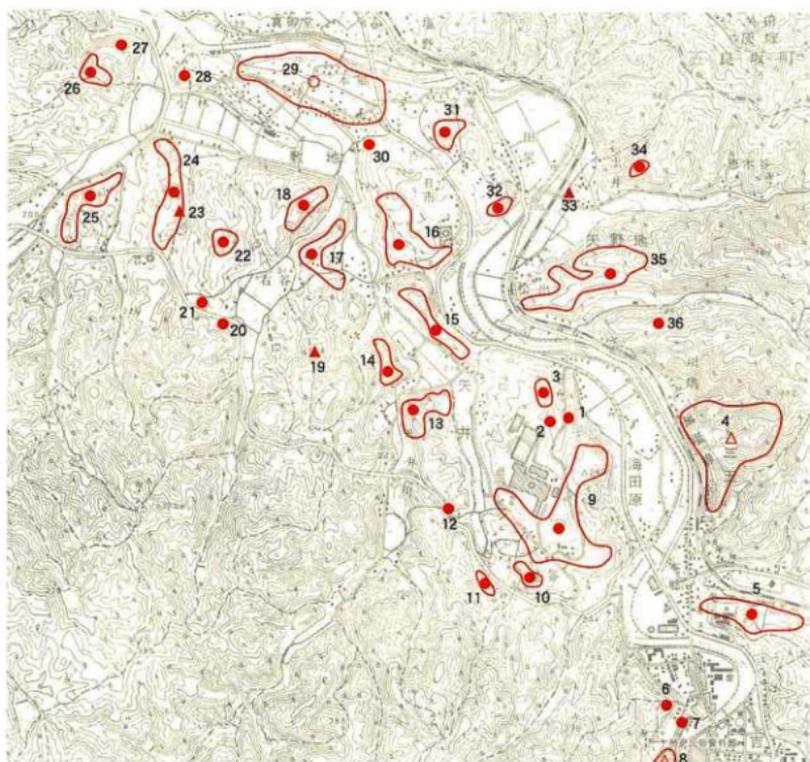
吉舎町には350基を超える古墳がみられ、特に町城北西部の敷地・矢井・海田原・矢野池や北東部の上下川流域の上安田・安田地区などの標高200～300mの小丘陵上には多くの古墳が営まれている。その多くは直径10m前後の円墳で、古墳群を構成している。

そのうち馬洗川流域には全長30～40m以上の大型の帆立貝形古墳がみられる。特に、三玉の県史跡三玉大塚古墳⁽¹⁾（三玉第1号古墳）は全長41mと町内最大規模を有する帆立貝形古墳で、明治期に竪穴式石室から筒形銅器・仿製鏡（珠文鏡・変形文鏡）・武器類（短甲・刀剣・矛等）・装身具（玉類）など多量の遺物が出土している。その後、昭和55（1980）～昭和57（1982）年度に史跡整備に伴う調査が行われ、三段の墳丘には葺石が廻り円筒埴輪や形象埴輪が立ち並んでいたことが明らかとなった。5世紀後半の築造と考えられている。調査が行われていないが、敷地の八幡山第24号古墳（旧八幡山第1号古墳⁽²⁾）や矢井の海田原第20号古墳（旧海田原第4号古墳）・海田原

第29号古墳(旧海田原第24号古墳)などがみられる。これらの大型帆立貝形古墳は、町域を統括する広域連合体の盟主の古墳とみられ、八幡山第24号古墳→三玉大塚古墳→海田原第20号古墳→海田原第29号古墳への推移が想定されている。

調査が行われた古墳としては、矢井の下矢井南第3～5号古墳⁽³⁾・燎東古墳⁽⁴⁾、知和の寺津第1～3号古墳⁽⁵⁾、敷地の片野中山第9～12号古墳⁽⁶⁾・大番奥池第1～3・7号古墳⁽⁷⁾、海田原の海田原第24～27号古墳⁽⁸⁾・長畑山北古墳第1～6号古墳⁽⁹⁾などがある。

下矢井南第3～5号古墳は比高約60mの丘陵上に築かれた円墳で、そのうち直径約18m前後の第4号古墳が最大で、墳頂部に粘土櫛3基・土坑1基の埋葬施設がほぼ並列し、鉄剣・鉄刀・鉄斧・鉄鎌などの鉄器類や堅櫛とともに類例の少ない筒形石製品が出土し、4世紀末～5世紀初頭の築造とみられている。燎東古墳は比高20mの丘陵先端に築かれた直径8mの円墳で、墳丘上に木棺墓2基と石蓋土坑墓がみつかった。須恵器や鉄刀・刀子片などが出土し、6世紀前半の築造とみられる。寺津第1～3号古墳は丘陵先端の尾根上に連なる6基の古墳群のうちの3基である。第1・2号古墳は直径約11～12mの円墳で木棺墓を埋葬施設としている。埋葬施設からは杯蓋・杯身のセットをはじめとする須恵器の他、第2号古墳では玉類(勾玉・管玉)や刀子も出土した。また、墳丘及びその周辺からも破砕された大甕など多くの須恵器が出土した。6世紀前葉～中葉の築造と考えられている。第3号古墳は全長35～40mの前方後方墳で、現状保存されたため後方部の詳細は不明であるが、前方部の墳頂で粘土櫛・箱式石棺・石蓋土坑各1基の埋葬施設が検出された。5世紀後半～6世紀初頭の築造と考えられている。片野中山第9～12号古墳は、比高約50mの丘陵上に立地する直径10m前後の円墳である。土坑を埋葬施設としており、第9号古墳で有孔石製品、第10号古墳で刀子が出土した。墳丘や周溝でも須恵器などの土器や鉄器が出土しており、5世紀末～6世紀初頭の築造と考えられている。大番奥池第1～3・7号古墳は、片野中山第9～11号古墳の東側に谷を隔てた比高約50mの丘陵尾根頂部に立地し、第7号古墳が直径2.9×4.6mの楕円形の古墳で、その他は直径8～11mの円墳である。埋葬施設は、第2号古墳では南北に並列する木棺墓2基、第3号古墳は木棺墓3基と土坑墓1基、第7号古墳は土坑墓である。須恵器の杯蓋・杯身や鉄鎌・鉄刀などの武器や鉄鎌・刀子の農具、管玉などが出土しており、古墳群は6世紀前半に築造されたと考えられる。海田原第24～27号古墳の比高は、最高所の第26号で約85mである。これらの古墳は直径9～17mの円墳で、埋葬施設は、残存状況が良好ではなく第25号古墳で土坑を確認したのみである。いずれも表土や整地土、周溝などから土師器・須恵器などの土器片が出土したほか、第26号古墳では周溝内から鉄剣や刀子の破片が、第27号古墳の周溝内で確認された土坑からは滑石製の玉類(勾玉1点・白玉5点)、土師器・高杯などが出土している。5世紀後半～6世紀代の築造と考えられる。長畑山北第1～6号古墳は、長畑山古墳の立地する丘陵から北西に谷を隔てた比高約40mの丘陵上に立地する直径5～10mの円墳で、埋葬施設は、第1・2・5・6号古墳が木棺墓、第3号古墳が小型の壜六式石室で、第4号古墳が吉舎町内では数少ない横六式石室である。出土遺物は、埋葬施設や周溝から須恵器や土師器が出土しており、第4号古墳では埋葬施設から杯蓋・杯身・提瓶・甕などの須恵器の他に、



●古墳・墳墓 ▲集落跡・居館・寺院跡 △中世山城跡 ○包含地

- 1 殿平古墳 2 長畑山古墳 3 長畑山北古墳群(6) 4 平松山城跡 5 三玉古墳群(9)
 6 善逝寺山古墳 7 尾崎山墳墓 8 南天山城跡 9 海田原古墳群(33) 10 後口山古墳群(4)
 11 宮前古墳群(2) 12 岡ノ采古墳 13 矢井中山古墳群(12) 14 下矢井南古墳群(5)
 15 中山古墳群(19) 16 八幡山古墳群(30) 17 下矢井北古墳群(7) 18 明神山古墳群(17)
 19 北野山遺跡 20 燎東古墳 21 燎古墳 22 大番奥池古墳群(7) 23 右谷遺跡
 24 片野中山古墳群(15) 25 一本堂古墳群(12) 26 鷺尾古墳群(9) 27 コウズミ西古墳
 28 小林古墳 29 敷地本郷遺跡 30 八幡山北古墳 31 一之瀬古墳群(3) 32 田尻古墳群(4)
 33 矢野地土井遺跡 34 土井古墳群(2) 35 矢野地古墳群(45) 36 日暮目古墳
 ※古墳群の()内の数字は古墳数を示す。

第2図 周辺主要遺跡分布図(1:25,000)

直刀・鉄鏃・鉄鎌・鉄斧、耳環、玉類、砥石なども出土している。出土遺物から、6世紀中頃～後半頃を中心とする時期の築造と考えられ、第1・2・5・6号古墳が先行し、第4号古墳、次いで第3号古墳が築造されたと考えられる。とくに、第4号古墳は当地域でも最も古い時期の横六式石室とみられ、横六式石室が導入されていく様相を示す貴重な調査例と考えられる。

古代

古代には、吉舎町の大半は三谷郡に含まれるが、上安田・知和地区は甲努(奴)郡に、徳市は世羅郡に属する。『和名類聚抄』によると、平安時代初期三谷郡には三谷・松部(私部の誤記とされる)江田・額田・刑部の5郷があり、吉舎町は松部郷に比定されている。郷名から皇后のために設けられた部民(私有民)である「私部(きさいべ)」に関わる地域といわれ、延喜式や平城京跡出土木簡に三谷郡を始め備後国北部の諸郡が庸・調として鉄や鍬を納めたこととあることから、古くから当地域で鉄を産出したことが分かる。

この時代の遺跡として、右谷遺跡や北野山遺跡が調査されている。前者は竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、葦骨器を埋納した土坑等を検出し、古墳時代末～奈良時代の集落跡とされる。後者は掘立柱建物跡2棟や柱穴列を検出し、鉄鉢形の須恵器や転用硯、灯明用らしき土師器杯等の出土遺物から9世紀後半～10世紀初頭の仏教関連施設跡とされる。このほか、平安時代末～鎌倉時代初頭の寺院跡である上安田鹿寺跡(上安田)が知られている。

中世以降

建久3(1192)年、武蔵国から下向した広沢氏が三谷郡の大半を所領としたが、13世紀後半に広沢氏は和智・江田の両氏に分かれた。このうち、和智氏が三谷郡北部を領有し、吉舎の南天山城を本拠とした。戦国期には尼子氏の配下となるが、その後毛利氏に転じ、この時に和智氏の城下に町人が定着して集落が発展した。

中世以降の遺跡としては、連続した郭群や井戸を有する南天山城跡(吉舎)、3条の堀切を持つ池尻城跡(知和)、郭群や土塁・竪堀群で構成される平松山城跡(三玉)、5つの郭が並ぶ堂元山城跡(辻)、矢野地土井館跡(矢野地)など城館跡の存在が目立つ。また、16個の礎石が残る県史跡吉寺鹿寺跡(檜)のほか、積石方形基壇を設けた和智実勝之墓(清綱)や宝篋印塔が建つ和智誠春之墓(丸田)などの古墓も多く、かつての交通路を偲ばせる県史跡の中山一里塚(吉舎)・下菜畑屋一里塚(吉舎)などもある。

註

- (1) 広島県双三郡吉舎町教育委員会『三玉大塚—調査と整備—』1983年
- (2) 広島県教育委員会が実施した『広島県遺跡地図』作成時に、遺跡名や古墳番号が新たに整理された。遺跡地図作成以前に旧古墳番号で報告があることから()内に旧古墳番号を併記した。
- (3) 公益団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(34) 下矢井南第3～5号古墳』2014年
- (4) 吉舎町教育委員会『燎東古墳』1995年

- (5) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「1. 寺津古墳群」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』1994年
- (6) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(18) 片野中山第9～12号古墳 右谷遺跡』2012年
- (7) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(11) 大番奥池第1～3・7号古墳』2010年
- (8) 財団法人広島県教育事業団 広島県立歴史民俗資料館「中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る備北地域埋蔵文化財発掘調査報告会-資料-」2011年
- (9) 財団法人広島県教育事業団 広島県立歴史民俗資料館「中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る備北地域埋蔵文化財発掘調査報告会-資料-」2010年
- (10) 註(6)と同じ
- (11) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(8) 北野山遺跡』2009年

参考文献

- 吉舎町史編集委員会『吉舎町史(上巻)』1988年
- 三次市史編集委員会『三次市史I』2004年
- 広島県教育委員会『広島県遺跡地図XI(三次市・庄原市)』2006年
- 広島県教育委員会『広島県遺跡地図VII(甲奴郡・双三郡)』2002年
- 平凡社『日本歴史地名大系第35巻 広島県の地名』1982年
- 角川書店『角川日本地名大辞典34 広島県』1987年
- 広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第4集1996年

Ⅲ 調査の概要

殿平古墳と長畑山古墳は三次市吉舎町海田原に所在する。殿平古墳は箱式石棺を埋葬施設とする古墳で、吉舎町の中心地を北西に流れる馬洗川の南側の丘陵頂部に立地する。長畑山古墳は横穴式石室を埋葬施設とする古墳で、殿平古墳とは谷を挟んで南西側の丘陵斜面に立地している。

古墳が存在する海田原地区は、吉舎町内でも古墳が密集する地域のひとつで、殿平古墳・長畑山古墳が立地する丘陵上には海田原古墳群と長畑山北古墳群も立地している。海田原古墳群は前方後円墳を含む33基の古墳群で、第24～27号古墳の発掘調査が行われている。調査では明確な埋葬施設は流失か攪乱のため確認できていないが、第27号古墳の周溝内の土坑から出土した土師器高杯が5世紀代と推定できることから、築造時期も同時代と考えられている。長畑山北古墳群は6世紀代の6基の古墳で構成され、埋葬施設が木棺墓・小型の竪穴式石室・横穴式石室と多様で、木棺墓から横穴式石室への変遷を窺える。

発掘調査は長畑山古墳から開始し、長畑山古墳と並行して殿平古墳の調査を進めていった。殿平古墳は、調査前に箱式石棺が確認でき蓋石が露出していたので箱式石棺を中心に土層観察用の畦を残して掘り下げを行なった。調査の結果、直径7.5m程度の円墳で、墳丘の南側で周溝を確認した。墳丘の高さは、現状で東側の墳裾から約0.5m、西側の墳裾から約0.6mである。盛土は、北側裾部でわずかに確認できるのみで、墳丘は削り出しによって成形した後に土を盛ったと思われる。遺物は石棺内や周溝内も含めて出土していない。築造時期は周辺地域の調査成果を踏まえて古墳時代中期頃と推定できる。

長畑山古墳は西から東へ傾斜している斜面に立地し、南側を開口部とする横穴式石室を埋葬施設とする直径約11mの円墳で、調査前に樹木の伐採・搬出用の作業道設営によって部分的な石材の移動と開口部付近に攪乱を受けていた。

調査は墳丘の中心から東西・南北方向の畦を設定し、墳裾と石室の検出作業を進めた。石室の開口部は基底石から2段程度の石材が残り、奥壁側は天井石を除き両側壁も石材が残っていた。石室の規模は、現存長約6m、幅は奥壁側0.8m、開口部側が約1.2mで、奥壁側から南側へ1.7m付近で縦長に使用した基底石があり、玄室と羨道の境と考えられる。

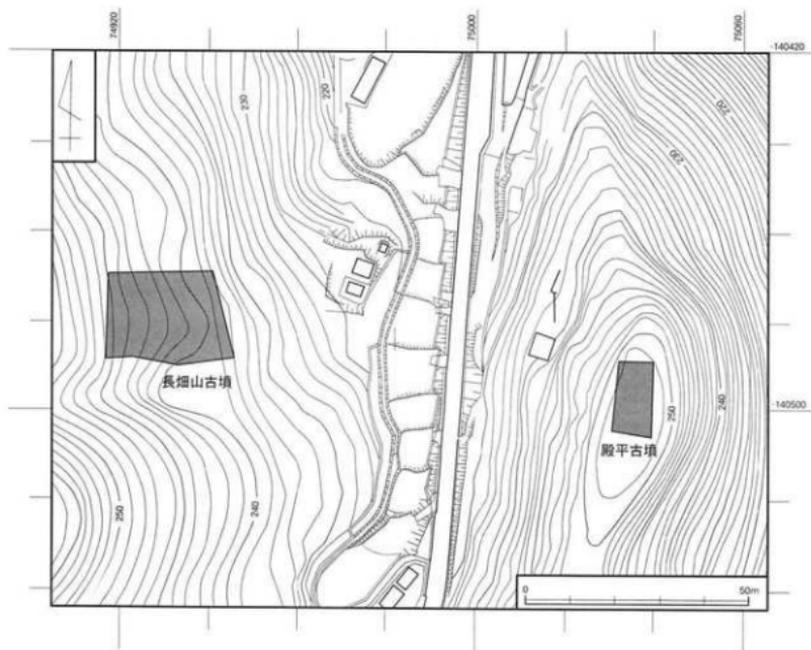
床面を掘り下げていく過程で、奥壁側で奥壁から幅0.5mの範囲に骨片が集中して出土した。開口部付近でも、骨片が出土した同じ高さで奈良時代の須恵器杯身が2点出土していることから骨片と須恵器は同時期のものと思われ、石室の再利用によるものと考えられた。床面は遺物の出土状況から上下2面と判断して、それぞれの面で写真撮影と実測作業を行った。

周溝は石室の西側を幅2.5m、長さ約11mの溝を掘り込んでいる。溝内から須恵器の甕と大形の横瓶片が集中して出土した。

墳丘盛土の除去中に石室の東・西両側から遺物が配置された状態で出土している。東側は須恵器高杯・蓋・杯・柄・提瓶などを円形に配置した状態、西側は土師器甕と須恵器の杯身・平瓶を並べた状態であった。特に平瓶は底の接合部を丁寧に取り外し、平瓶と杯身の間に掘えた状況で

出土している。いずれも土を盛る前に、何らかの意図を持ったうえで配置されたと思われる。

出土した遺物は、須恵器が中心で石室内から杯身・杯蓋・高杯・椀・甕・長頸壺・短頸壺・提瓶、土師器の高杯・椀、鉄鏃・刀子、耳環、管玉、ガラス玉、土玉が出土し、盛土内から須恵器の杯身・杯蓋・椀・高杯・提瓶、鉄鏃が出土した。遺物の出土量から盗掘を受けていないことが考えられる。須恵器は形態に時期的に大きな差はみられず、概ね6世紀後半から7世紀を中心に築造・追葬が行われたと考えられる。



第3図 周辺地形図 (1:1,000)

Ⅳ 遺構と遺物

1. 殿平古墳

1) 立地と調査前の状況 (第3・4図, 巻頭図版1a, 図版1a・2a)

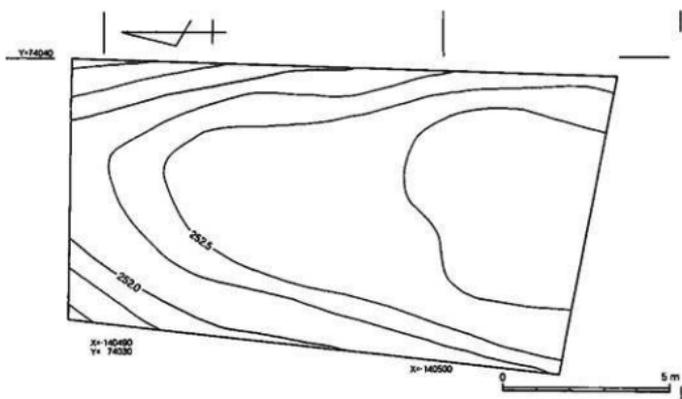
殿平古墳は、海田原古墳群が立地する丘陵の中央付近から馬洗川に向かって、単独で北西へ派生する丘陵上に立地している。谷を挟んだ西側には長畑山古墳がある。箱式石棺のある地点（標高約252.6m）と東側の水田との比高は約47mである。

調査前の周辺の状況は、急斜面に杉やヒノキが植林されていたが、丘陵頂部は東西幅約6mの平坦地で、この平坦地から北へ向って緩斜面となっていた。この地形から墳墓などの遺跡の存在が予想されたため、試掘調査が行われた。その結果、埋葬施設である箱式石棺1基が確認され、その南側に墳丘の背面カット部の残存と考えられるわずかな落ち込みを確認したことから古墳と判断された。

2) 墳丘 (第5・6図, 図版1b・2b・c)

墳丘の範囲は、平坦地の北側が鞍部となる傾斜の変換点、南側は長さ約6.9m、最大幅約1.5mの溝を円弧状に掘り込んで区画している。東西の裾は傾斜変換点付近と考えられる。現状から築造時の墳丘の形状や規模は明確ではないが、南側の周溝と箱式石棺の位置関係から考えると、直径7.5m程度（南北方向）のやや不整の円墳と推測することができる。墳丘の高さは、現状で東側の墳裾から48cm、西側の墳裾から57cmである。盛土は、北側裾部でわずかに確認できるのみで、墳丘は墳裾に至るまで削り出しによって成形している。

遺物は出土していない。



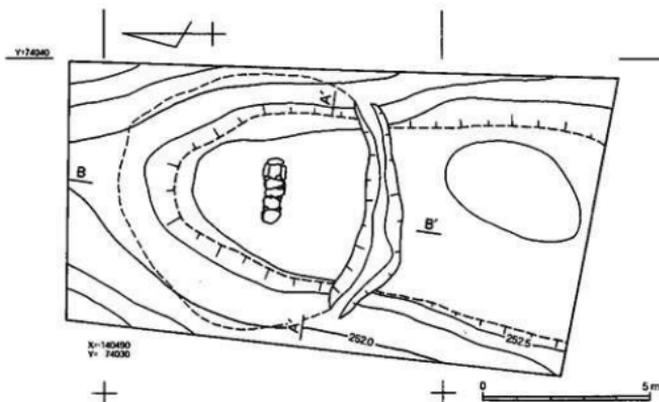
第4図 調査前地形測量図 (1:150)

3) 埋葬施設 (第7図, 図版3)

埋葬施設は、墳丘平坦面の中央に造られた箱式石棺1基である。石棺の主軸方位はN-96°-Eとほぼ東西方向を指し、丘陵尾根に直交している。掘方の平面形は不整形長方形で、長さ2.04m、東端幅0.73m、西端幅0.5m、最大幅0.78m、中央付近で深さ0.36mの規模である。石棺は掘方のほぼ中央に構築している。

蓋石は、東小口側の1枚ないし2枚が抜き取られ、4枚を確認した。それら石材の大きさは中央部に長辺55cm、短辺32cm、厚さ11cmと長辺56cm、短辺27cm、厚さ13cmの不整形な石材を2枚置き、東小口側に長辺50cm、短辺37cm、厚さ16cmと長辺50cm、短辺39cm、厚さ19cmの不整形円形の石材を2枚置いている。石棺の内法は、長さ165cm、幅は東小口側が最大で36cm、そこから西に向かって徐々に狭くなり、西小口側が最少で14cm、深さ18cmである。頭位は内法の広い東小口側と考えられる。

小口石・側石は、東小口の北側は小口石の角と側石の角を合わせ、南側は小口石と側石の間が3cm空いている。この隙間には、発掘調査時に木の根が入り込んでいたのを確認した。西小口は両側石の西側側面を小口石の内側にあてがう形態の組み方をしている。その平面形状は東小口から西小口に向けて徐々に狭まる長台形である。小口石は、東小口に長辺47cm、短辺37cm、厚さ18cmの五角形状の石材を横長に用い、西小口にはやや小ぶりの長辺34cm、短辺27cm、厚さ10cmの長方形の板石を横長に用いている。側石は北側が5枚、南側が4枚の石材で構成され、全て横長に立てられている。北側石は東小口側から順に、不整形長方形で長辺37cm、短辺32cm、厚さ15cmと長辺41cm、短辺21cm、厚さ15cmの大きめの石材を2枚立て、3番目には正方形で長辺26cm、短辺25cm、厚さ14cmの石材を立て、4番目には不整形長円形で長辺38cm、短辺17cm、厚さ15cmの石材を立て、5番目には不整形長方形で長辺28cm、短辺16cm、厚さ18cmの石材を立

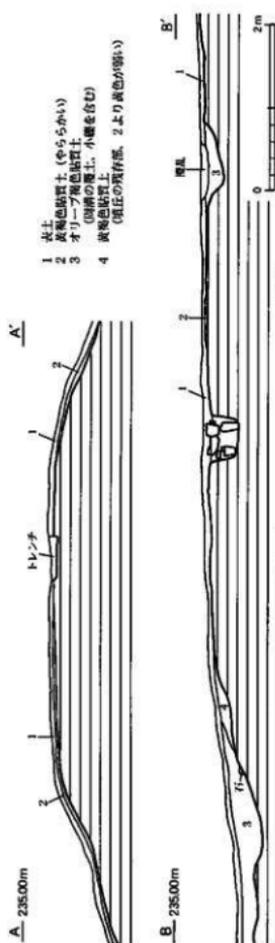


第5図 墳丘測量図 (1:150)

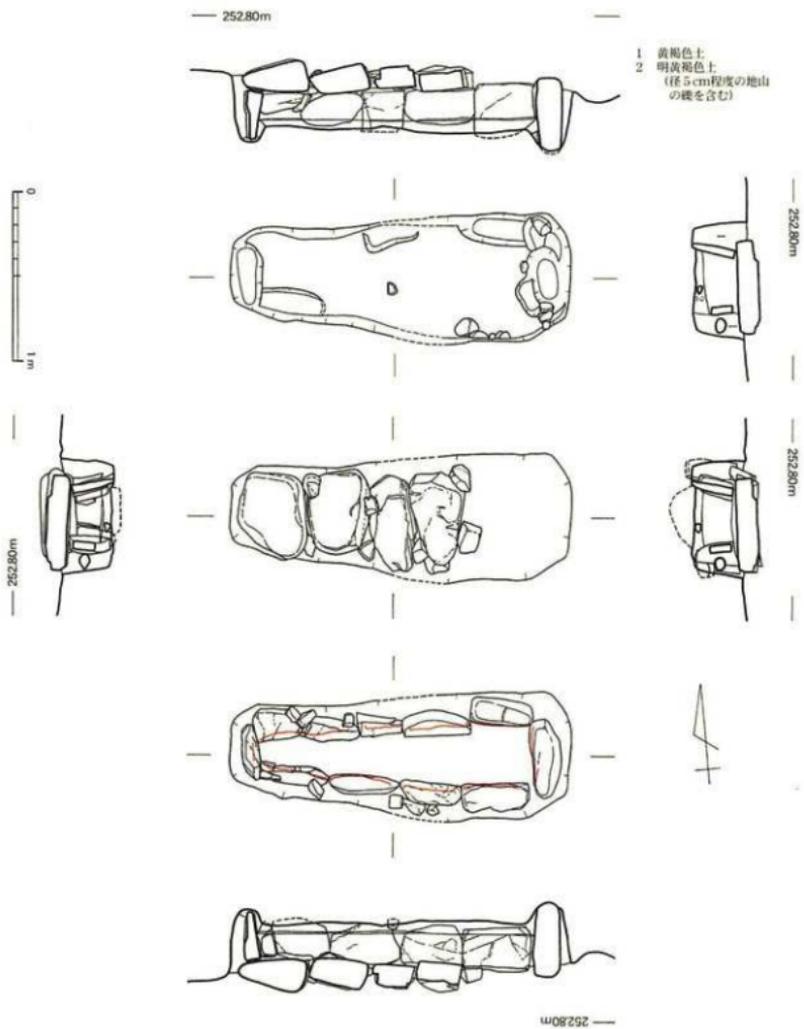
ている。この石棺の側石の中で5番目だけ、墓坑底面に接していない。南側石は東小口側から順に、1番目には長方形で長辺40 cm、短辺26 cm、厚さ14 cmの石材を立て、2～4番目には不整形長方形で長辺35～42 cm、22～短辺26 cm、厚さ10～13 cmの石材を立てている。4番目と西側の小口石の間には、北側石との長さを揃えるために長辺15 cm、短辺9 cm、厚さ6 cmと長辺21 cm、短辺12 cm、厚さ5 cmの小ぶりの石を2個詰めている。このことから側石は北側を先に据え、その長さに合わせるように南側を据えたと考えられる。また、側石は上面に直線的な面を、底に不整形な面がくるように配置している。側石の上面のレベルや傾斜を合わせるために、小ぶりの石を使用して調整を行い、側石の上面が東小口から西小口に向けてやや下り傾斜している。両小口石は墓坑底面を10 cm程度とやや深く掘り込んで立てている。側石は北側の1・3番目と南側の4番目が2～5 cm程度掘り込んで立てている。その他の側石は墓坑底面をほとんど掘り込むことなく、墓坑底面に置いただけである。側石の裏込めに黄褐色土を使用している。

棺床面は明黄褐色土により整地され、東側が2 cm高く、中央に向かって僅かに窪んでいる。

遺物は出土していない。



第6図 墳丘土層断面図 (1:60)



第7図 箱式石棺実測図 (1:30)

2. 長畑山古墳

1) 立地と調査前の状況 (第3・8図, 巻頭図版1b, 図版4, 5a・b)

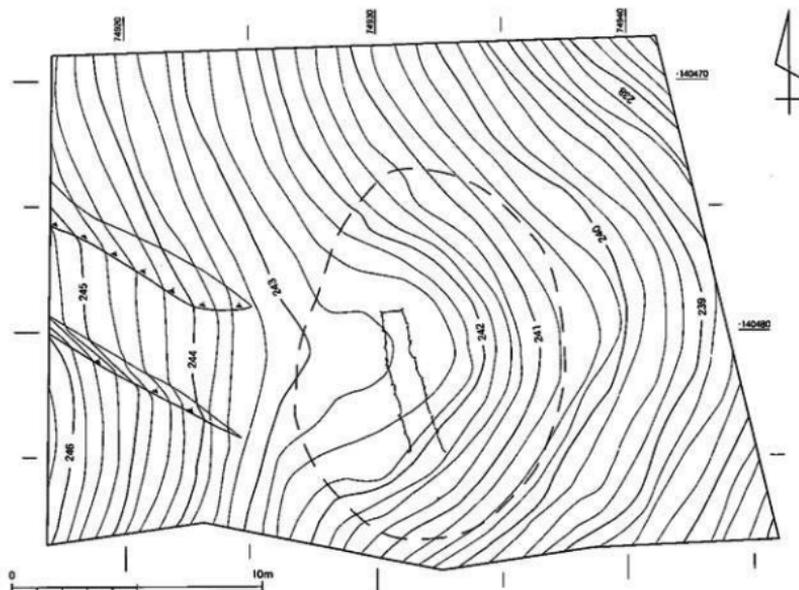
長畑山古墳は、三次市吉舎町中央部を北西方向へ流れる馬洗川南岸の丘陵の一角に位置する横六式石室を埋葬施設とする古墳である。古墳は馬洗川に向かって開けた狭長な谷部から西側の丘陵東側斜面に立地し、東西方向の小谷に並行する僅かな丘陵上の傾斜変換点を利用してつくられている。古墳周辺の地目は山林で、調査前の樹木の伐採・搬出時の作業道により石材が散乱した状態であったことから、ある程度の攪乱や削平を受けている可能性が考えられた。

調査前は、斜面地に僅かな平坦面が認められる程度で墳丘裾も不明瞭な状況であったことから、古墳として周知されていなかったが、試掘調査の結果、古墳と確認された。

2) 周溝・墳丘 (第9・10図, 図版5c, 図版6, 14, 15a)

墳丘の形状は、南北方向12m、東西方向10mの楕円形で北側と東側の墳裾は明確ではない。西側の周溝の底からの墳頂部までの高さは約0.3mで、北側の裾から約2.5mである。

墳丘の西側で南北方向の溝を確認した。溝は斜面上側を尾根に直交させ、最大幅2.5m、西側の上端から深さ0.5m程度掘り下げ、長さは11mで僅かに弧状となる。溝底部の最高位から南北西側が約0.5m低くなり、規模は墳丘全体からみると墳丘の西側を中心に墳丘全体の1/3程度である。



第8図 調査前地形測量図 (1:200)

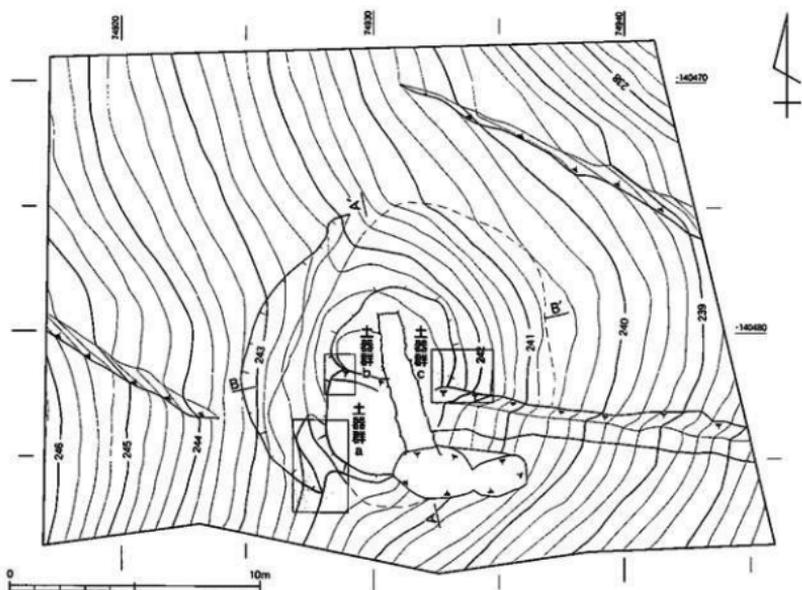
遺物は周溝の南側底付近から、須恵器・甕 (133)、横瓶 (134) が割れた状態で混在して出土している (土器群 a)。

古墳は石室掘方を掘削する前にある程度の平坦面を造成した後に石室を構築したと考えられる。墳丘の盛土は流失のためほとんど残っていないが、東西方向の土層図で第7・10・18層、北側で第8・25層から下層が盛土及び掘方の裏込め土で、第23層は黒褐色粘質土 (クロボク) の基盤土で礫を含んでいる。第1層は表土、第2層は攪乱土、第3層は斜面上方からの流入土である。盛土は黄褐色系の粘質土が大半で、掘方や溝を掘削した際の土を利用し、石材を積み上げながら裏込め土を版築状に固めたと考えられる。東側墳丘の盛土内と裾付近、北側の盛土内に土の流失を防ぐために置いたと思われる石材を検出した。また、奥壁に向かって西側で石室構築前の掘方上面で、東側は石室構築後の土を盛る前の裾に置かれたと考えられる土器群 b・c を確認した。

天井石と天井石から上位の盛土は現存していなかったが、奥壁付近西側石の持ち送り状況から、天井石は現存のこの高さに存在していたと思われる。

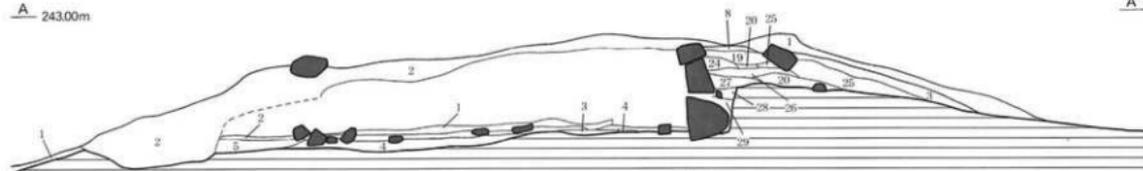
3) 石室 (第11図, 図版12a・b, 14a, 15b・c, 16)

古墳は無袖の横穴式石室を埋葬施設としている。石室の主軸はN-13°-Wで南側に開口し、開口部周辺は攪乱を受けていた。



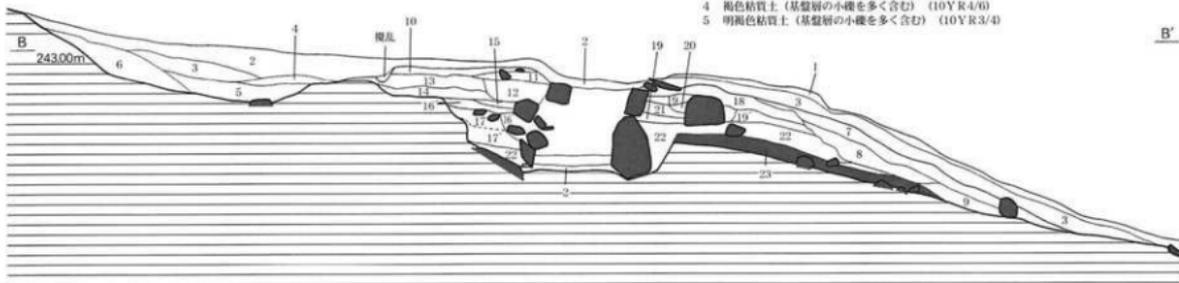
第9図 墳丘測量図 (1:200)

A 243.00m



床面

- 1 褐色粘質土（基盤層の小礫を多く含む）（10Y R4/6）流入土
- 2 褐色粘質土（基盤層の小礫を含む、部分的に炭化物・骨片を含む）（10Y R4/4）
- 3 褐色粘質土（基盤層の小礫を稀かに含む、部分的に炭化物・骨片を含む）（10Y R4/4）+
- 明褐色粘質土（5Y 5/8）をブロック基に含む
- 4 褐色粘質土（基盤層の小礫を多く含む）（10Y R4/6）
- 5 明褐色粘質土（基盤層の小礫を多く含む）（10Y R3/4）



- 1 表土
- 2 黄褐色粘土（10Y R8/8）+ 灰褐色粘土（10Y R5/1）
（腐乱帯による型地）
- 3 灰色粘質土（2.5Y R6/1）
- 4 暗灰黄色粘質土（2.5Y 5/2）
- 5 暗褐色粘質土（10Y R3/4）
- 6 明黄褐色粘土（10Y R7/6）
- 7 明黄褐色土（粘性あり）（10Y R6/6）
- 8 暗灰色土（粘性あり）（10Y R4/1）
- 9 明黄褐色土（粘性あり）（10Y R7/6）
- 10 にじい黄褐色粘質土（10Y R7/4）
- 11 黄褐色土（10Y R7/6）

- 12 明黄褐色土（10Y R6/6）
- 13 黄褐色土（基盤層の小礫を多く含む）（10Y R8/8）
- 14 黄褐色土（基盤層の小礫を多く含む）（10Y R7/6）
- 15 明黄褐色土（2.5Y 7/6）
- 16 黄色土（基盤層の小礫を多く含む、粘性あり、水分含む）（2.5Y 8/6）
- 16 16より水分が多く、粘性が強い。
- 17 明黄褐色粘質土（10Y R6/6）+ 暗灰色粘質土（10Y R5/1）の混入土
- 17 17より暗灰色粘質土が多い。
- 18 灰黄色粘質土（基盤層の礫を含む）（2.5Y 6/2）
- 19 浅黄色粘質土（2.5Y 7/3）
- 19 19に基盤層の小礫を含む
- 20 暗灰色粘質土（10Y R6/1）

- 21 浅黄色粘質土（基盤層の小礫を含む）（2.5Y 7/4）
- 22 黄褐色土（基盤層の小礫を多く含む）（2.5Y 8/8）
- 23 灰黄色粘質土（7.0Y 5/1）（2.5Y 3/1）
- 24 明黄褐色土（基盤層の小礫をわずかに含む）（2.5Y 7/6）
- 25 明褐色土（2.5Y 7/6）
- 26 黄色粘質土（基盤層の小礫をわずかに含む）（2.5Y 8/6）
- 27 暗灰色粘質土（10Y R6/1）+ 明黄褐色粘質土（2.5Y 7/6）の混入土
- 28 黄褐色粘質土（2.5Y 5/1）
- 29 黄褐色土（基盤層の小礫を多く含む）



第10図 填土层断面図（1：60）

石室の規模は、現存長で西側壁が6.05m、東側壁が5.74m、幅は奥壁側が0.8m、開口部が1.24mで、開口部に向かって徐々に広がっている。高さは、東壁側の奥壁から1.6mの個所が石積みの残りが良好で、この地点の高さが床上面から1.2mであることから、石室の高さは、概ね1.2m程度であったと推定できる。西側壁で奥壁から1.85m、東側壁で奥壁から1.7mの場所に規模の差はあるものの立石がある。東側の立石は石室内に張り出しているが、西側は張り出していない。また、この場所で幅が0.9mと一旦、狭くなることから、玄室と羨道を意識していると思われる。

基底石は掘方内の壁に沿って構築され、床面中央から奥壁側は基底石を安定させるためと思われる深さ10cm程度の不定形の窪みが残る。掘方の規模は奥壁側の上端が幅2.0m、西側の長さが7.3m、東側の長さが約6.5mである。深さは奥壁側が0.6m、西側が最深部で約1m、東側が0.5m、床は奥壁側から開口部へ向かって0.2m程度低くなっている。石材は自然石を使用しており、加工した面はみられない。

閉塞石 奥壁から開口部側へ約4mの個所に幅20～40cm、高さ8～20cmの角礫が8個ある。攪乱時に転落した石材が土圧により沈み込んだ可能性も考えられるが、周辺の遺物の遺存状況が良好であることから、閉塞石の基底部の可能性は高いと考えられる。

羨道 羨道の規模は東西の立石の南端から側壁石の端までの長さが、西壁側で4.05m、東側壁側で3.7mである。石材の積み方を西側からみると、現状で基底石を6個使用し、最大5段の石積みが見られる。基底石は幅40～80cm、高さ30～50cm、奥行き40～70cm程度の石材を横積みにして、基底石の上部に幅30～50cm、高さ20～30cm、奥行き30cm程度の石材を積み上げている。石材同士の間隙には隙間に合わせた小礫を詰めて、石室内面を揃えている。東側は開口部から3個目の基底石から奥壁側に小型の石材を4個使用している以外は、西側と同規模の石材を使用し基底石としている。基底石から上位の壁に使用している石材は、西側の石材に対して板状の薄い石材も含まれるなど概して小さく、最大6段に積み上げられている。羨道部の基底石の掘え方や基底石から上部の石材の積み方は、玄室と比べると全体的に石材が小型なことからか丁寧でない。

玄室 玄室の規模は、奥壁から立石南端までの長さは西壁側が2.05m、東側壁側が1.95mで、西側壁が東側壁より0.1m長く、床面の長軸に対してやや西側へ振れている。玄室部分の石積みは西側壁が立石を含め4個の基底石の上に、幅50～70cm、高さ13～35cm、幅35～45cmの石材を3～4段積んでいる。石室内面は持ち送り気味に積まれ内傾している。石材間には隙間も少なく整然としている。東側は立石を含め3個の基底石で、奥壁から2個目と立石との間に小礫を詰めている。基底石と立石の規模が西側に対して大きいため、基底石より上側は西側の石材より小さい石材を使用し、高さを調整していると思われる。

また、立石までの長さを調整するため西側の立石に小さい縦長の石材を使用したとも考えられることから、石室は東側の壁を基準に積まれた可能性がある。

奥壁 奥壁は幅80cm、高さ55cm、奥行き50cmの大型の石材を基底石として、その上にやや小ぶりの石材を横長に2個積んでいる。奥壁はこの3個の石材のみで構成され、基底石と2段目の

石材の間隙に小礫が詰められている。

床面 床面は、玄室・羨道ともにほぼ水平である。床面までの流入土は、水分を含む軟らかい黄褐色粘質土であった。掘り下げていく段階で、床面第1層(第10図)上面が硬く締まった状態であった。この面の奥壁側で人骨片が密集した状態で出土した。(図版7b)東西両壁の立石から奥壁までの床に幅10～15cm、厚さ5cmの扁平な石が散在していることから、本来これらの石が床に敷かれていたと推定できる。奥壁側から約50cm付近まで、これらの石を寄せ集めることで奥壁との間に空閑地を設けて、この空閑地に遺体を埋葬した可能性は高い。人骨片が出土した同じ高さで、開口部周辺から須恵器杯身が2点(42・43)出土しており(図版7a)、この面が最終(再利用)作業面と考えられる。最終作業面から下層で棺台石と敷石の一部を検出した。石室内の埋葬に伴う床面は、遺物が上下に重なっていたことと土層観察から第2層上面と第3・4層上面の2面の可能性が考えられた。このため、個別に写真撮影と遺物の実測・取り上げを行った。

棺台石は、奥壁側に2個・西側壁の立石の東側に2個並んでいる。東側壁の立石から0.7mに縦20cm、横30cm、厚さ10cmの石があり、この地点から南へ1.3mの個所に対応している石がみられる。これらは、それぞれの石材の中心間の距離が約1.6mで等しく棺台石と思われる。

4) 遺物出土状況

石室内(第12図、巻頭図版2、図版7～11)

遺物は、石室内(玄室・羨道)、墳丘盛土内、周溝内から出土している。石室内から出土した遺物は、須恵器40点(杯身10・杯蓋10・壺蓋1・高杯蓋1・高杯5・椀2・甕2・壺4・平瓶2・提瓶3)、土師器2点(高杯1・椀1)、鉄器44点(鉄鏃34「茎片含」・刀子9「茎片含」・筒状鉄製品1)、玉39点(管玉1・ガラス小玉1・土製小玉37)、耳環6点である。土師器は高杯(13)と椀(39)の2点のみである。これらの遺物の出土地点は3個所に集中しているが、原位置を保っているものは少ないと思われる。この3個所を東西両壁の立石から奥壁側をA区、西側壁の立石から南側の壁側をB区、東側壁の立石から南側へ2m付近までをC区とした。遺物が集中するA～Cの各区に遺体が安置されていたと思われる。また、出土した鉄器の中に釘が1点も含まれていないことから、釘を使用しない組合式の箱式木棺を採用していた可能性が考えられる。

遺物は上下に重なっていたことや石材の下部からも遺物が出土したことから、第12図で左側を床上面、右側を床下面として図示している。

A区は、上面が石敷きの床で棺台石と奥壁の間から須恵器高杯(9)と杯蓋(1・2)が、棺台石の上面と同じ高さで出土している。杯蓋(3・4)、台付壺(16)、提瓶(22・23)、甕(15)は、敷石が奥壁側へ移動された際に敷石と同時に移動したと思われる(図版9a・b)。原位置を保っていると思われるのは、2点で長頸壺(17)が壁際、鉄鏃(44)が敷石際で出土している。下面は敷石を除去後に、奥壁の東側で杯蓋(24・25)、西壁側で杯身(32)、杯蓋(26)が、奥壁側棺台石の南側で高杯(10)、鉄鏃(50・53・55・62・63・66・67・68・69・74)、刀子(81・82・85)、耳環(89)が、棺台石間の中央から南側の棺台石までの間に鉄鏃(51・54・58・61)が、ほぼ床に密

着した状況で出土している。(図版11a・b)

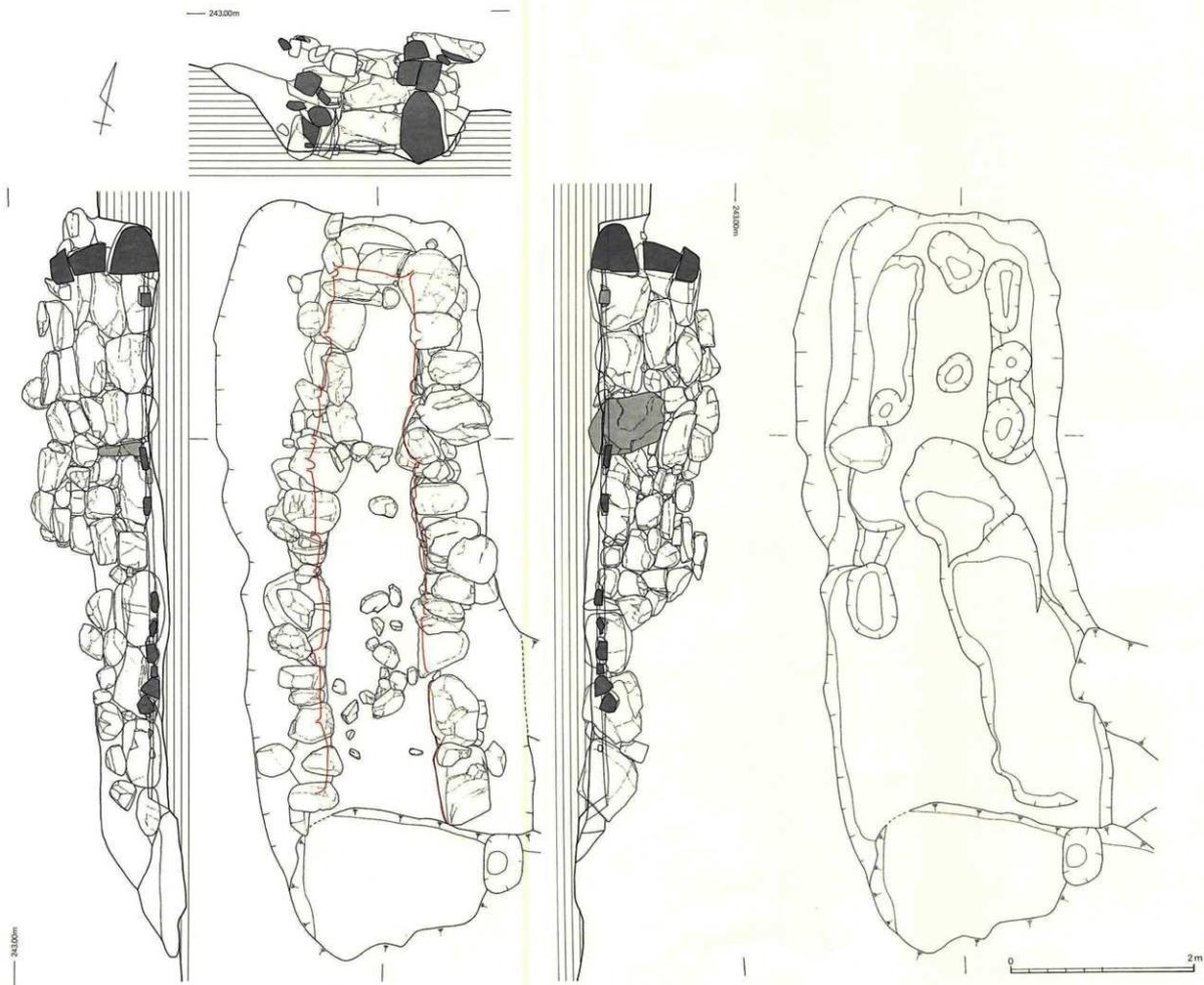
床のやや東側で上面に骨片が含まれる範囲が確認できた。

B区は上面で須恵器杯身(8)、杯蓋(6)、高杯(11)、平瓶(20)が割れた状態で直径70cmの範囲で出土している(図版9c・10a)。椀(14)は完形であった。これらの遺物取り上げ後、杯身(30・31・33)、高杯(37)、土師器椀(39)が口縁部を下に伏せた状態、杯蓋(27・28)が天井部を上にした状態で並んだ状態で出土していることから(図版11c)、B区は土器床であった可能性が高い。杯身・杯蓋と棺台石の間から、鉄鏃(49)と耳環(88・90・91)、土製小玉が1点、杯身杯蓋の南側に接した状態で土製小玉が8点とさらに南側で鉄鏃(70)が出土している。短頸壺(18)、高杯(13)が先の口縁部を下にした杯身・杯蓋から1m程度離れており、この辺りまでが土器床の範囲であったと思われる。壁際で提瓶(41)、高杯(37)が出土している。南側で平瓶(21)が東側の壁際で杯身(7)が出土しているが、移動した可能性がありB区に伴うと思われる。C区北側の棺台石の西側で骨片が含まれる範囲が認められた。

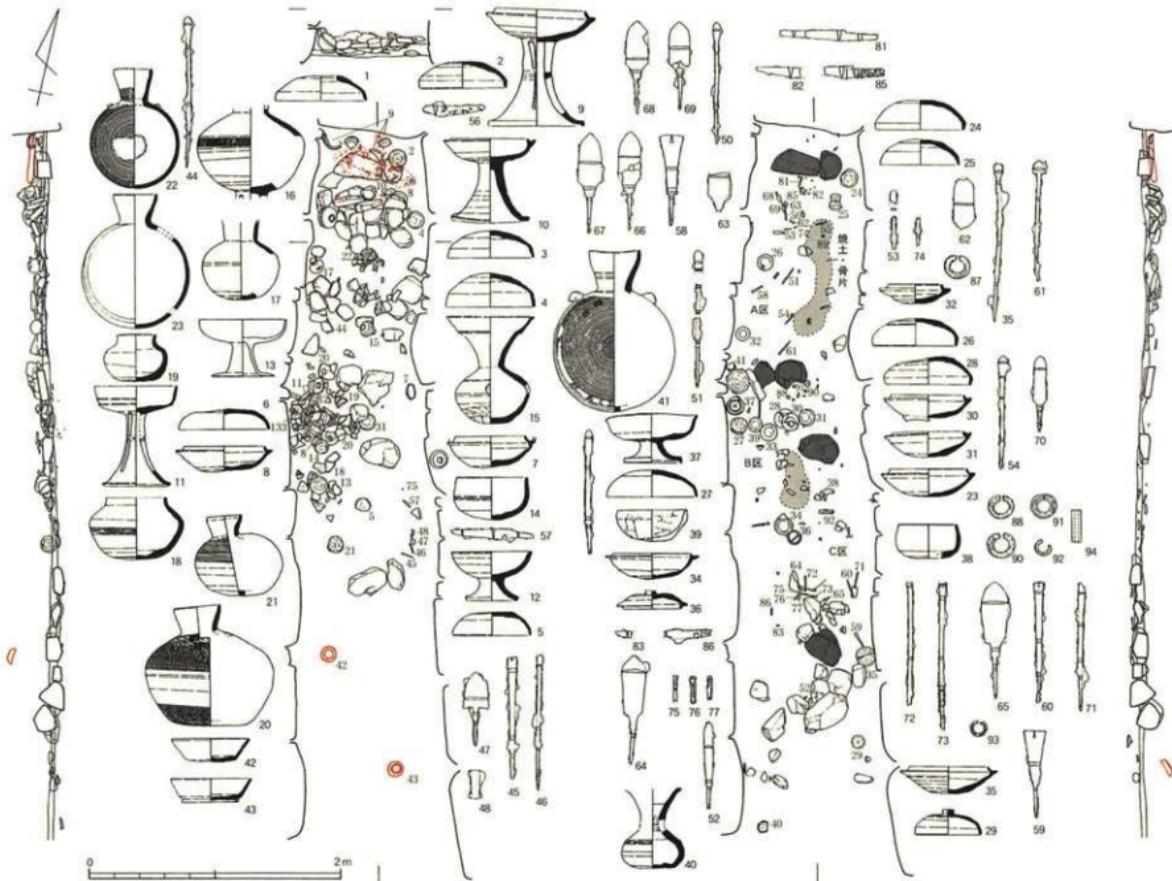
土製小玉の内28点は下面から掘方上面までの整地土中からの出土である。下面から掘方までを掘り下げる際に、床面に区画を設定し整地土を取り上げ、整地土内の遺物の有無を確認するために水洗を行い確認した。平面図で図化していない土製の小玉の28点は、B区に相当する区画の整地土内からの出土である。

C区内の遺物は棺台石との間から須恵器杯身(5)、東側壁付近からガラス小玉(95)、刀子(86)、鉄鏃(45～47)、筒型の用途不明鉄製品(48)、下面からは杯身(35)、椀(38・B区上面の破片と接合)、鉄鏃(59・60・64・65・71・72・73)、鉄鏃の茎(75～77)、刀子片(83・86)、管玉(94)が出土している。特に鉄鏃は南側の棺台石付近に集中している。C区南側の棺台石から南側の石材下から鉄鏃(52)が出土している。杯蓋(29)と甕(40)は、土製小玉と同様に下面の整地土中からの出土である。

石室内から出土した須恵器・鉄器は、完形に近い形状のものが多く、接合関係も上・下面で接合、区間をまたがって接合している遺物もあるものの、A・B・C区それぞれの区内で接合しているものが多数であることから追葬時に移動された影響は多くないと思われる。また、下面確認面でA区が棺台石間、B区がC区北側の棺台石の西側で、僅かであるが人骨片が含まれる範囲が確認できた。これらのことから、床面を上・下の2面として調査を進めたが、埋葬に伴う床は1面で羨道部でも同一面で埋葬を行ったと考えられる。



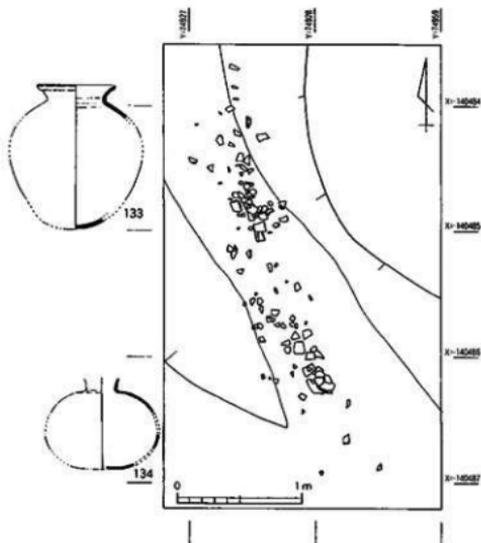
第11圖 石室実測図 (1:40)



第12圖 石室内遺物出土状況実測圖 (1:40, 土器1:8, 鉄器 耳環1:6, 管玉1:3)

周溝（土器群 a）（第 9・13 図，図版 12 c）

周溝からは、須恵器甕（133）と横瓶（134）が底面付近から出土している。遺物は周溝の南側で甕片と横瓶片が混在した状況である。甕は、床面 B 区内と C 区北側棺台石下から出土した破片と接合していることから、C 区での埋葬時に溝あるいは墳丘上へ廃棄されたと考えられる。横瓶の接合状況は周溝内で限られているので、本来は墳丘上に掘えられていたが転落したものと思われる。また、甕と横瓶は接合時に土器片が不足した状況であったが、これらの土器片は溝の南側斜面下に流失したと思われる。

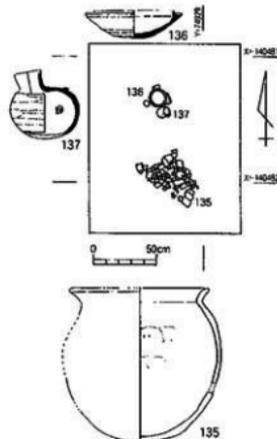


第 13 図 土器群 a 遺物出土状況実測図（1：40，土器 1：16）

盛土内（土器群 b）（第 9・14 図，図版 13 a・b）

墳丘盛土の除去作業を行っている際に、開口部から約 3.5m の地点で、掘方西側上端から 0.4m 西側で土師器甕（135）の破片が土圧により確認面に密着した状態で出土した。

その後、東西方向の土層観察用の畔を除去時に甕から 0.2m 北側で、須恵器杯身（136）、平瓶（137）が出土した。平瓶は底部底を故意に外し、底部の断面を磨いた状況にした底部片と杯身が並んだ状態で出土している（図版 13 b）。土師器甕片の北側と平瓶は 30 cm 程度しか離れておらず、本来は土師器甕・平瓶・杯身が並んでいた可能性も考えられる。平瓶の底部底を故意に外し、加工を加えていることから、東側の「土器群 c」と併せて石室を構築する際に何らかの祭祀（儀式）が行われたと思われる。



第 14 図 土器群 b 遺物出土状況実測図（1：40，土器 1：8）

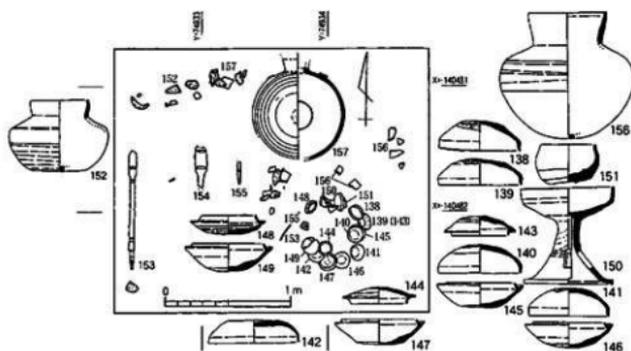
盛土内（土器群 c）（第 9・15 図，図版 13 c）

土器群 b と同様に墳丘盛土の除去作業時に掘方の東側で出土した。土器群は東西方向の畦の南側、掘方上端から東へ 1.0m の地点と石室の東側端から北へ 2.5m。この

地点の掘方上端から東へ1.4mの地点で須恵器杯身・杯蓋などを円形に配置したもの2か所に分かれる。北側からは短頸壺(152)と提瓶(157)が割れた状態で出土している。これらは、掘方の掘削面ではなく第19'層(第10図)の下面からの出土で、基底石の裏込め土より上層(石室の構築中の盛土)中の出土となる。

南側の土器群の内、北側の短頸壺(156)が割れて散在しているが、他の土器は内径で約30cmの空間に沿って並んだ状態で出土している。これらの遺物は石室構築後の僅かな平坦面(第10図8層下面)に配置している。北から高杯(150)の杯部に碗(151)が入った状態で東へ転倒している。150の東側に杯蓋(138)が口縁部を上、以下、時計回りに杯蓋(139)が口縁部を下に、139の内部に口縁部を下にした杯蓋(143)が、杯蓋(140)が口縁部を下にした杯身(145)と重なった状態で、杯蓋(141)、杯身(146)が口縁部を下に、杯身(147)が口縁部を上、杯蓋(142)、杯身(149)が、いずれも口縁部が下の状態で出土している。147と142の北側の蓋(144)は、口縁部を上にした状態である。高杯(150)西側の杯身(148)は傾斜に沿うように立った状態で出土している。杯身(148)と杯身(149)の間に、短頸壺(156)破片と鉄鏃(153・155)が出土している短頸壺(156)と鉄鏃(153・155)は、北側の短頸壺(152)・提瓶(157)と同一層からの出土で斜面上から転落と思われる。他の遺物は人為的に配置した状況と考えられる。

土器群b・cの内、土器群bと土器群cの北側の152・157と南側の短頸壺(156)、鉄鏃(153・155)は、構築途中(基底石を据えた後の段階)に、土器群cの南側の一群は石室構築後に、古墳全体の盛土を施す前の段階で何らかの祭祀(儀式)が行われたと思われる。



第15図 土器群c遺物出土状況実測図(1:40, 土器1:8, 鉄器1:6)

5) 出土遺物 (第16～23図, 図版17～28)

遺物の内容は、須恵器66点(杯身・杯蓋・高杯・椀・台付壺・長頸壺・短頸壺・甕・甗・提瓶・平瓶), 土師器4(高杯・甕・椀), 鉄製品47点(鉄鎌・刀子), 装身具45点(耳環6, 管玉1, ガラス小玉1, 土製小玉37点)である。これらの遺物の出土地点は, 石室内・周溝内・盛土内で寸法や特徴は観察表に詳しいので省略する。

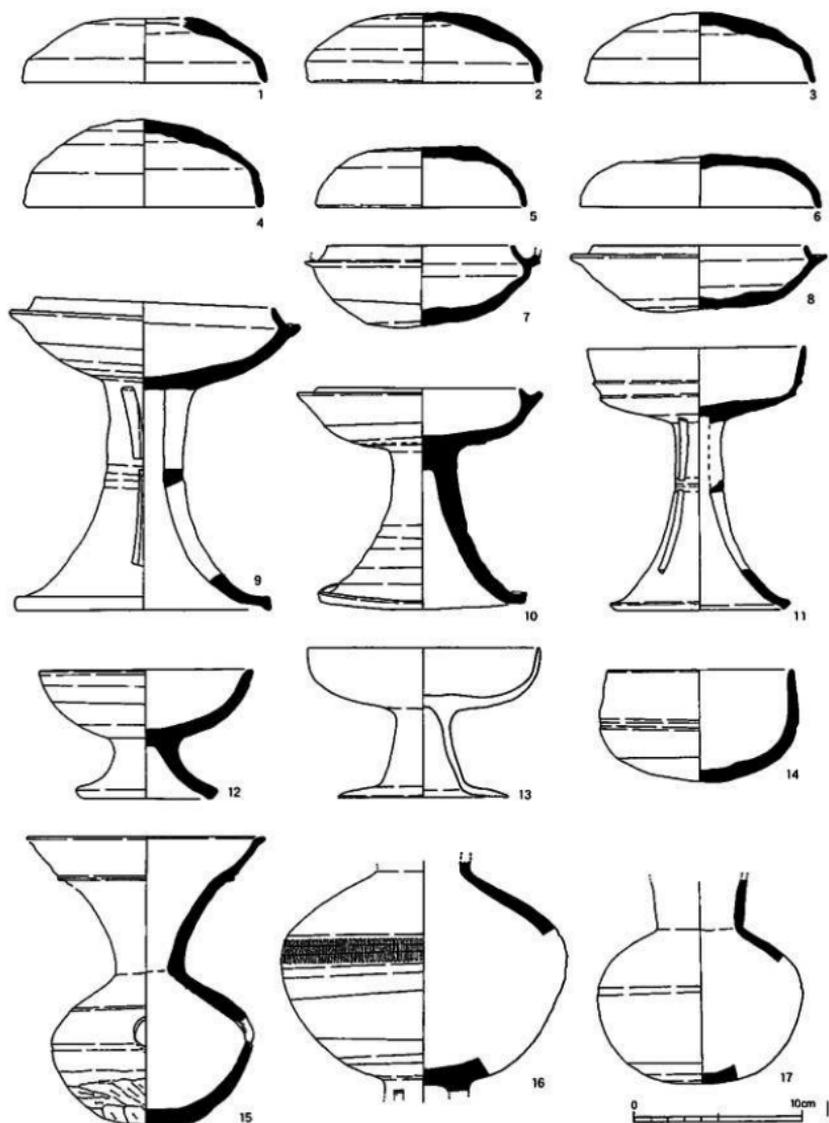
須恵器 蓋杯は口径の法量の違いが認められ, 分類すると杯身の口径が11.0～11.6 cmまでをⅠ類, 12～12.6 cmまでがⅡ類, 杯蓋は12.1～13.1 cmまでがⅠ類, 13.5～14.2 cmまでがⅡ類となる。杯身Ⅰ類の出土場所は, 床上面(7), 同下面(30・31), 土器群c(145～147・149)の7点で, 形態に大差は無く, 立ち上がりは短く内傾している。7の器高が4.9 cmと高く, 立ち上がり部が長い。146・149の底部は静止ヘラ削りで, 他の杯身と違いがみられる。杯身Ⅱ類の出土場所は, 床上面(8), 同下面(33・34・35), 土器群b(136), 盛土内(160)の6点である。杯身Ⅱ類もⅠ類と同様, 形態には大差がみられず, 34の立ち上がりが短く, 受部が外方に延びていること8・145の底部が平坦気味であることに違いがみられる。床下面から出土した(32)と土器群cから出土した(148)は杯身としているが, 蓋の可能性も考えられる。杯身(42・43)は石室内掘り下げ中に出土した遺物で, 奥壁付近で出土した人骨に伴うと考えられる遺物である。42の底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。43は42の形態に高台が付くタイプで, 高台はやや外方に開き接地面は窪んでいる。

杯蓋Ⅰ類の出土場所は, 138～141の4点が土器群c, 25・26が床面下面, 5が床上面である。土器群cから出土した4点は, いずれも天井部に不定方向の静止ヘラ削りが残り, 杯身Ⅰ類146・149と共通した手法による成形である。Ⅱ類の出土場所は142が土器群cで, 1～4・6が床上面, 27・28が床下面, 158・159が盛土内である。6・142の器高が低い, 142の口縁端の厚さが細く, 端部が尖り気味であるほかは, 差はみられない。

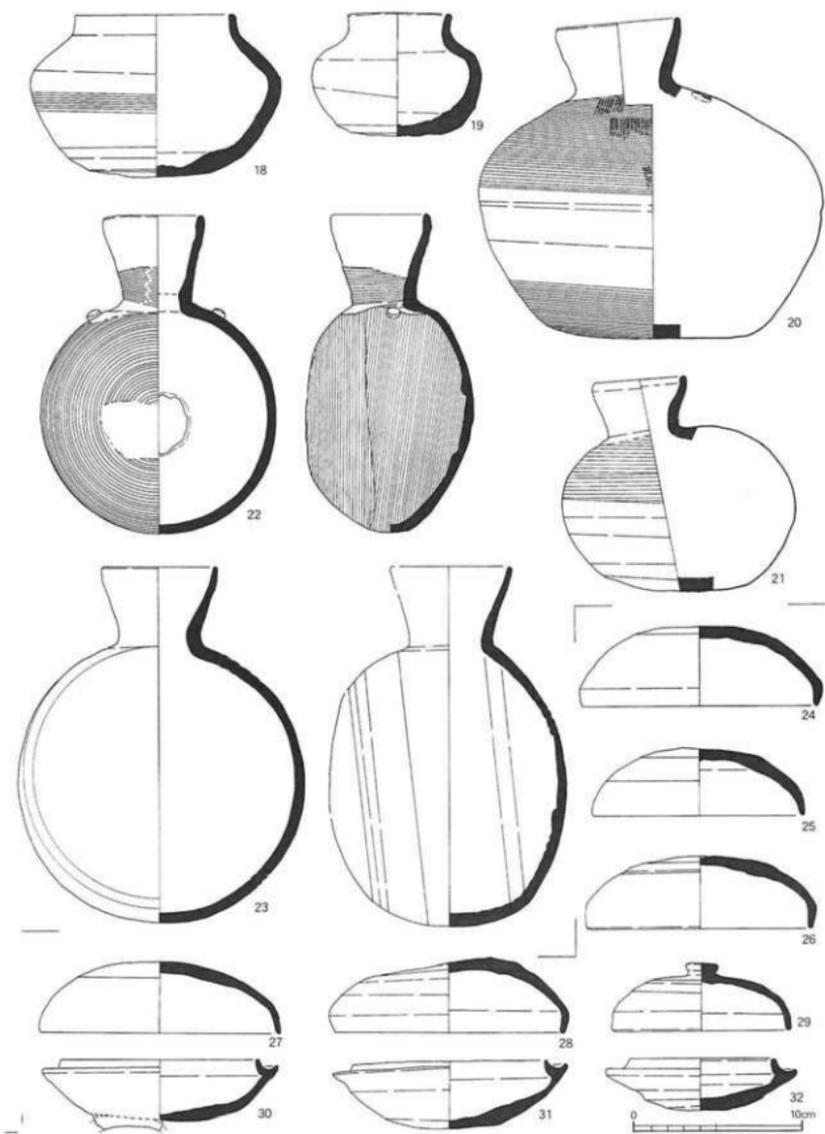
高杯は無蓋低脚(12・37), 無蓋長脚一段透かし(150), 無蓋二段透かし(11), 有蓋(10), 有蓋長脚二段透かし(9)の6点で, 形態が4種に分かれる。出土場所は, 37が床面下面, 150が土器群cで他は床面上面である。無蓋低脚の12の脚裾は外傾し, 僅かに面が残る。37は口縁が僅かに外反し, 脚裾面が内傾し明瞭な面が認められる。無蓋高杯の内, 150の透かしは二方で, 杯部からヘラ状の工具で透かし部分までアタリを付けている。11の杯体部は外面に削りによって段を2箇所削り出している。有蓋高杯の9は杯身Ⅱ類33と有蓋10は杯身Ⅰ類30と同形態の杯である。

椀は14・38・151の3点が, 床上面・床下面・土器群cから出土している。14の体部は直立し2条の凹線文が施されている。38の体部は内傾し, 151は口縁端部付近で直立している。151は焼け壺が大きく, 底部ヘラの切り離し後の調整が行われず器壁が厚くなっている。

甗は床の上面から15が下面から40が出土している。15の底部は不定方向のヘラ削りが残り, 孔の上下に凹線状の窪みが廻っている。40は頸部上位と体部の約半分が残り, 底部が平坦で肩部に2条の削り出しによる突帯が廻っている。

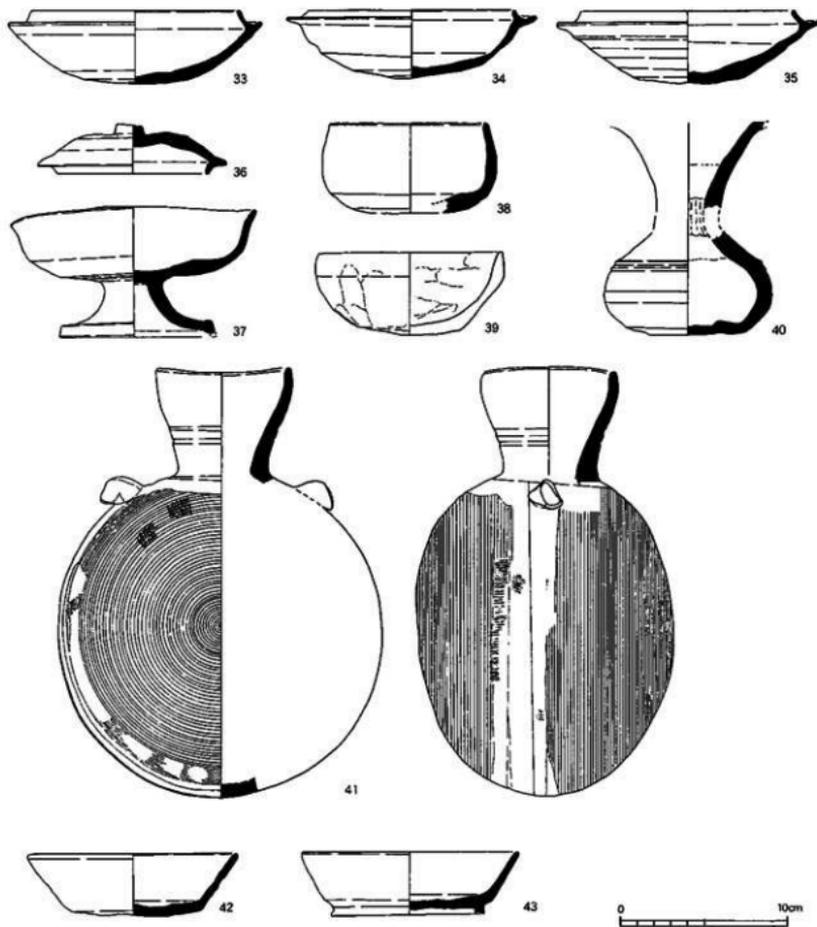


第 16 图 石室内出土遺物実測図 1 (1 : 3)



第 17 图 石室内出土遗物实测图 2 (1 : 3)

壺の6点は短頸壺(18・19・152・156)、台付壺(16)、長頸壺(17)で16～19が床上面、152・156が土器群cから出土している。19・152の底部は平底に近く、152の口縁端部は面が認められ内傾している。156は丸底で、胴部最大径下半にカキ目の条痕が僅かに残っている。16は脚付の壺で、脚柱に三方の透かし孔の痕跡が残る。胴部最大径付近で、2条の凹線により区画した幅1.4cmの空間に、幅1.5mmの長方形の板状の工具を垂直にあてた刺突文を全体に施している。平瓶は20・21が床上面、137が土器群bからの出土である。20は底部が平底で胴部最大径から



第18図 石室内出土遺物実測図3 (1:3)

肩部間と底部周辺にカキ目が明瞭に残っている。肩部には部分的に平行タタキ目が僅かにみられ、直径1.2 cmの円形浮文が2か所に貼り付けられている。137は胴部最大径の内面に穿孔を外面から焼成前に粘土で塞いだ痕跡が残っていることから、本来「甗」として製作していた途中で平瓶に転換したと思われる。底部は、元々口縁部の接合部にあたり、直径5.5 cmの円板で塞いで底にしている。この円板は内面から叩いて外されている。出土状況から墳丘構築時の何らかの祭祀に使用したと考えられる。肩部には直径8mmの円形浮文が3か所に貼り付けられている。134の横板は周溝内、133の甕は周溝内と床面からの出土で復元による実測である。甕内面の同心円文は肩部が擦り消され、胴部下半には明瞭に残る。底部は丸底で口縁部の内側に2条のヘラ記号が施されている。

土師器 高杯(13)・椀(39・161)と甕(135)で、13は床上面B区、39は床下面B区、161は盛土内下層、135は土器群bから出土している。須恵器に比べ出土量が少ない。13は脚裾の半分を欠いている。脚台部は端部と水平に近く、杯部の口縁は底部から緩やかに内湾し端部が尖り気味で終わる。全体的に器表面の残りが良くない。39・161とも手捏ねによる椀で、39は指頭によるナデの痕跡が明瞭に残る。135は口縁内面の頸部から外面の底部まで煤が付着している。器壁が全体的に厚く口縁端部が丸く終わっている。

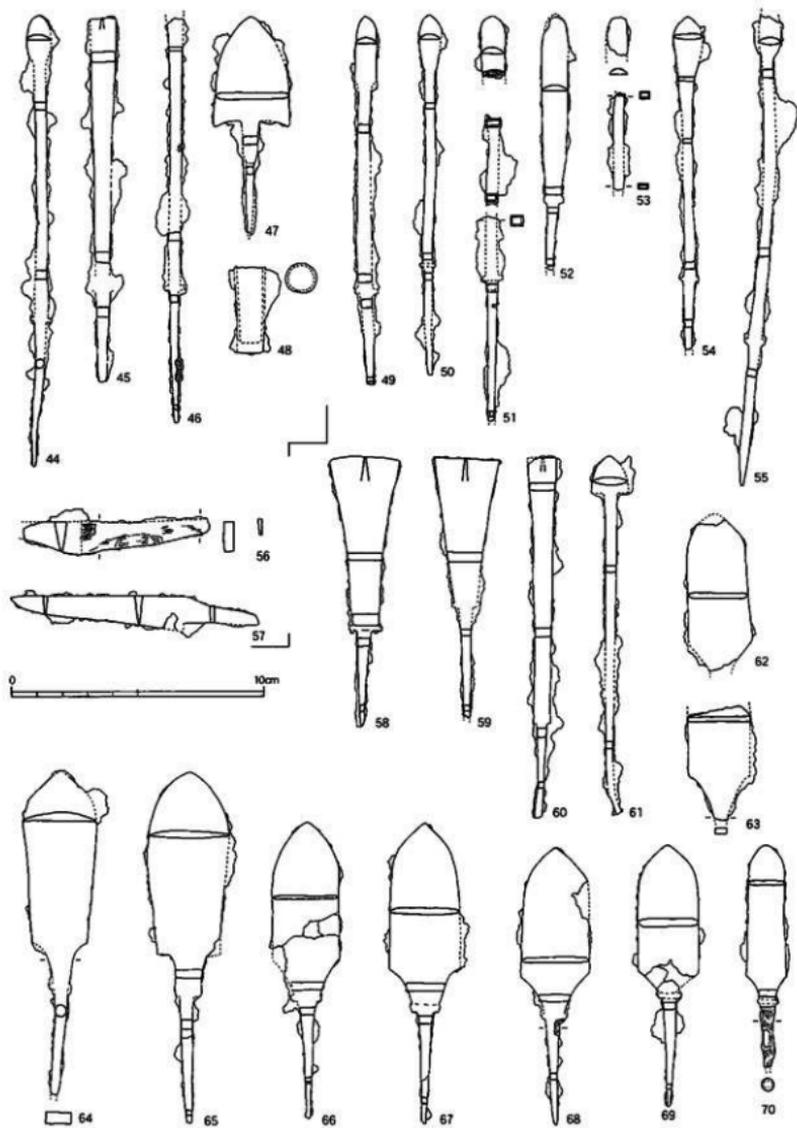
鉄器 出土した47点の内、鉄鏃(茎8点含)が37点が刀子(切先含)が9点、筒状不明鉄器が1点である。鉄鏃の内訳は、長頸鏃が17点(鏃身部の形態が三角形1点「61」・片刃1点「71」方頭形2点「45・60」・長三角形10点「44・49～55・153・154」、不明3点「46・72・73」、三角形鏃2点(47・64)、長三角形鏃8点(62・63・65～70)、方頭形2点(58・59)、茎片が8点(74～80・155)である。長頸鏃は関の形態が棘状のものが多数を占める。関が確認できる26点中、47が斜関、60・65・71が角関、153が台形関で、残りの21点は棘状関と特徴的である。棘状関以外の鉄鏃は床面C区(47・60・65・71)と土器群c(153)で、限定された場所から出土している。

刀子は56・81・82・85が床A区から57・83・86が床C区から出土している。84はA区、87はC区の掘り下げ土の洗浄により確認した。83と86は出土地点が近く同一個体の可能性がある。

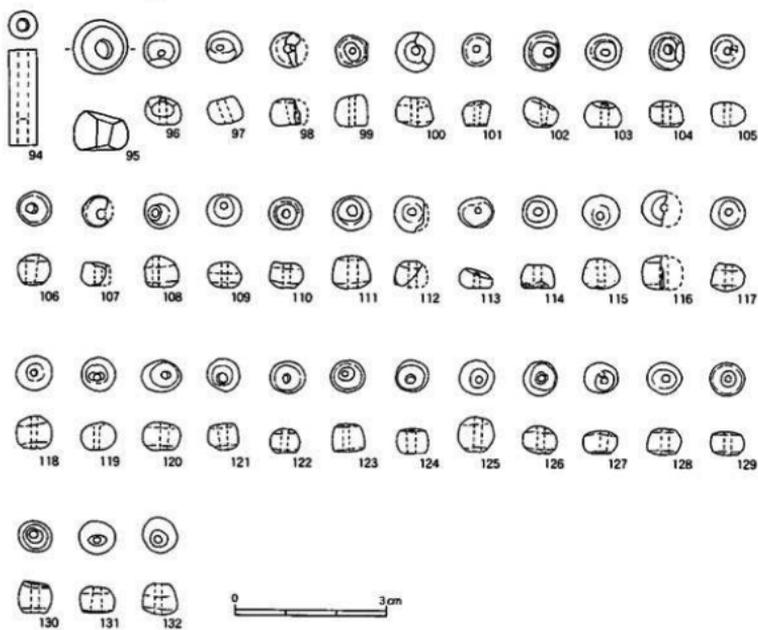
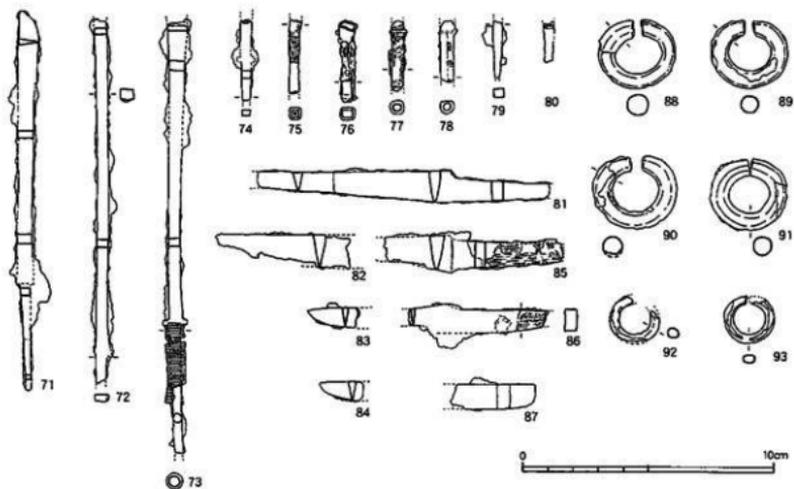
48の筒状の製品は、C区から出土している。上部が欠損していないことから完形と考えられ、高さは3.4 cm、上部の外径に対して底の径が2 mm程度小さくなっている。厚さは1 mmで底は4 mmと厚くなり、用途は不明である。

(鉄鏃の分類及び部分名称は、杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第8集1989年を参考にした。)

耳環・玉類 耳環はA区から(89)、B区から(88・90・91)、C区から(92・93)が出土している。いずれも銅芯に鍍金を施したものであるが、腐食が進み表面の鍍金部が僅かに残る。断面は92・93が楕円形で他はほぼ円形である。92・93は外径が2 cmと他の耳環より小さく、ともにC区から出土している事から、対になると思われるが他の耳環の対応関係は不明である。管玉94は床下C区から出土している。石材は暗灰緑色で碧玉製と思われ、両側から穿孔を行っている。ガラス小玉95は長さが1.1 cmと大きく、穿孔面は孔を中心に窪んでいる。土製小玉は37点の内、96

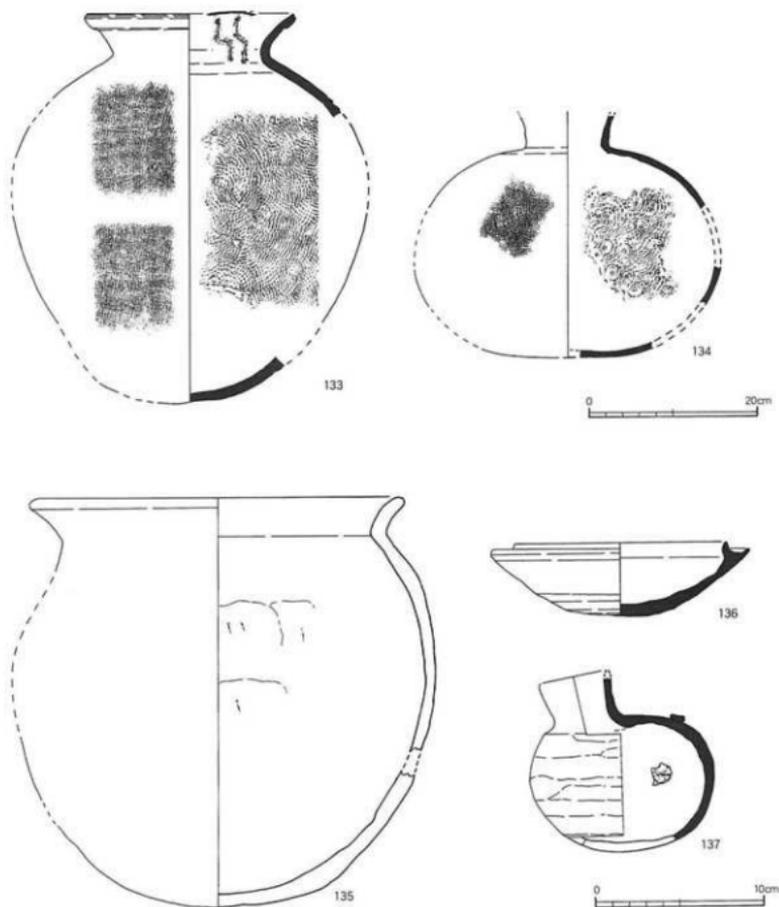


第 19 圖 石室內出土遺物実測圖 4 (1 : 2)

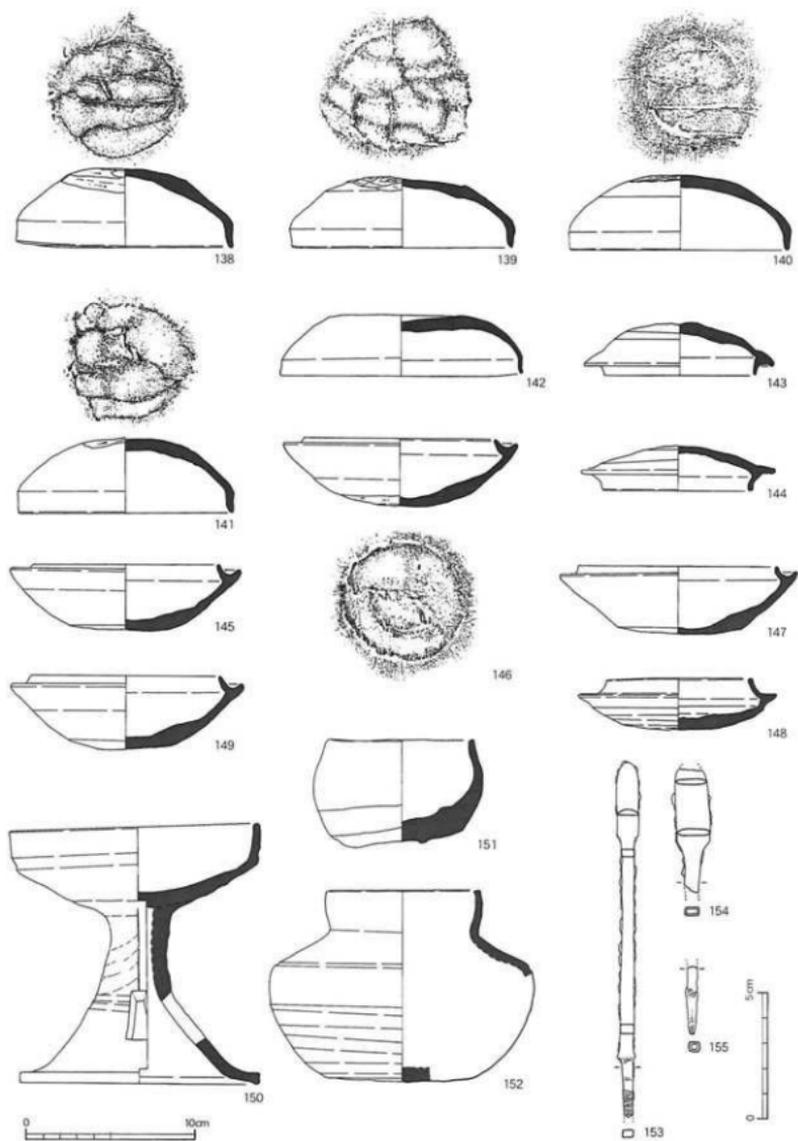


第20圖 石室内出土遺物実測図5 (1:1, 1:2)

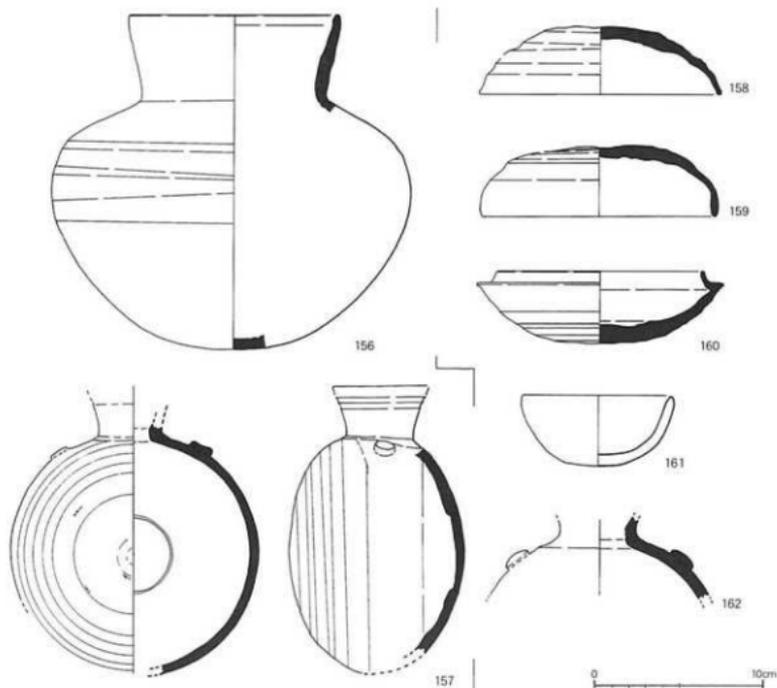
～104までの9点が床下B区の床面整地土内から出土している。他の土玉は、整地土掘り下土の洗浄により確認したが、整地土中の土製小玉の出土地点はB区内とB区より南側で出土している。これらの土製小玉は規模・形態が、ほぼ同一で穿孔面に接合の剝離面が観察できることから、数個単位で連珠状に繋がっていたと考えられる。B区内の埋葬時ではなく、整地土内から出土していることから、土製小玉が被葬者に装着していなかったと考えられ、土製小玉の性格を考える上で重要な出土例と思われる。



第21図 土器群a・b出土遺物実測図(1:3, 1:6)



第 22 图 土器群 c 出土遺物実測図 (1 : 2, 1 : 3)



第23図 土器群c・盛土内出土遺物実測図(1:3)

第2表 長畑山古墳出土土器観察表

遺物番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm) ※					調整・文様※	胎土	焼成	色調
				口径	かぶり受部径	体部最大径	高台脚径	器高				
1	A区上面・下面, 奥壁側上面	須恵器	杯蓋	13.6 ~ 14.2	—	—	—	3.9	内外面: 回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	不良・軟質	内外面とも灰白色
2	奥壁側上面	須恵器	杯蓋	13.5	—	—	—	4.2	内面: 一定方向のナデ 外面: 不調整・回転ヘラ削り・未調整・回転ナデ 回転: 時計の逆回り	1~2mm以下の砂粒を含む	良好	内面: 淡明灰色。 外面: 暗灰色~淡明灰色
3	A区上面	須恵器	杯蓋	13.6	—	—	—	4.2	内面: 回転ナデ 外面: ヘラ削り・回転ナデ 回転: 時計の逆回り	1mm近い砂粒を含む	良好 内面やや軟質	内面: 明瞭灰色。 外面: 暗青灰色
4	A区上面	須恵器	杯蓋	14.2	—	—	—	5.3	内面: 回転ナデ 外面: ヘラ削り+ナデ・ヘラ削り・回転ナデ	細かい砂粒を含む	良好・やや軟質	内・外面とも明青灰色(内面の方がやや白っぽい)
5	C区上面・下面	須恵器	杯蓋	12.2	—	—	—	3.3 ~ 3.65	内面: 回転ナデ 外面: 回転ヘラ削り(未調整)・不明瞭・回転ナデ	5mm以下の石英・長石などの砂粒を多く含む	良好	内面: 青灰色。 外面: 暗青灰色~黒色~茶褐色
6	B区上面・下面	須恵器	杯蓋	14.0	—	—	—	3.2	内面: 回転ナデ 外面: 回転ヘラ削り+回転ナデ・回転ナデ 回転: 時計廻り	1~2mm程度の砂粒を多く含む	良好	内外面とも暗青灰色

遺物番号	出土位置	種別	器種	法量 (c.m) 量					調整・文様※	胎土	焼成	色調
				口径	かえり 発部径	体部 最大径	高台 脚径	器高				
7	B区上面・ 下面	須恵器	杯形	11.0	13.8	—	—	4.9	内面：未調整・回転ナデ・ 一定方向のナデ 外面：未調整・回転ヘラ削り・ 底部切り離し不明 回転：時計廻り 蓋口縁 が輪着	2mm以下の 砂粒を含む	良好	内面：明灰色。 外面：暗灰色～灰 色
8	B区上面・ 下面	須恵器	杯形	12.6	15.1	—	—	3.5 ～4.0	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ・・・回転ナ デ・回転ヘラ切り未調整 回転：時計廻り	2mm程度の 砂粒を含む	良好	内外面とも暗灰色
9	B区上面・ 下面	須恵器	高杯 (有蓋)	14.1	17.1	—	14.8	17.8 ～ 18.5	杯部 内面：回転ナデ（一 定方向のナデ） 外面：回転ナデ・回転 ヘラ削り・回転ヘラ削り ＋ナデ 脚部 内外面とも回転ナ デ、上下二段の長方形透かし （2カ所）	2～3mm以下 の長石・ 石英などの 砂粒を比較 的多く含む	良好	内外面とも暗灰色
10	B区上面・ 下面、C区 上面	須恵器	高杯	11.9	14.4	—	12.0	13.1	杯部 内面：回転ナデ 外面：回転ナデ・回 転ヘラ削り＋ナデ 脚部 外面とも回転ナデ	2mm以下の 砂粒を比較 的多く含む	良好	内外面とも暗青灰 色（杯部～脚部上半 外面は黒褐色の自然 胎）
11	B区上面	須恵器	高杯	12.3	10.0	—	—	15.5	杯部 内面：回転ナデ・一 定方向のナデ・未調整 外面：回転ナデ・回 転ヘラ削り＋回転ナデ 脚部 内面：回転ナデ、上 下に二段の長方形透かし （3カ所）	2mm以下の 長石・石英 などの砂粒 を含む	良好	内外面とも青灰色 （一部灰褐色）
12	B区上面	須恵器	高杯	12.5	—	—	7.6	7.6	杯部 内面：調整不明 外面：回転ナデ・回 転ヘラ削り 脚部 内面：回転ナデ 外面：回転ナデ・回 転ヘラ削り・調整不明 回転：時計廻り	3mm以下の 石英・長石 等の砂粒を 比較的多く 含む	不良	内外面とも灰白色
13	B区上面	須恵器	高杯	13.6	10.0	—	—	8.9	杯部 内面：横ナデ。 外面：調整不明 脚部 内面：縦方向のケズ リか 外面：部分的にミガ キ痕跡・調整不明	2mm以下の 砂粒を含む	良好	内外面とも茶褐色
14	B区上面	須恵器	輪	10.9	—	—	—	6.7	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ・回転ヘラ 削り、体部に幅の広い凹線 1条をめぐらす 回転：時計廻り	1～2mmの 砂粒を多く 含む	良好	内外面とも青灰 色、断面は灰白色
15	A区上面・ 下面、B区 下面	須恵器	壺	(13.9)	—	12.0	—	17.1	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ・回転ヘラ 削り＋ナデ、微い指環に よる縦方向のナデ。 体部に1.7×1.5cmの縦長 楕円形の穿孔	2mm以下の 長石・石英 等の砂粒を 比較的多く 含むが堅ね 程度	良好	内外面とも炭灰色 ～灰色
16	A区上面	須恵器	台付壺	—	—	16.8	—	(13.8)	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ・凹線・縦 方向の刺突文・回転ナデ・ 回転ヘラ削り・回転ナデ。 脚部に透孔（3カ所）	3mm以下の 砂粒を多く 含む	良好	内外面：暗青灰色 ～灰褐色
17	A区上面	須恵器	壺	須部径 5.0	—	12.1	—	(12.0)	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ・回転ヘラ 削り 回転：時計廻り	2mm以下の 砂粒を比較 的多く含む	良好	内外面とも灰色～ 灰褐色
18	B区上面	須恵器	短頸壺	(9.2)	—	14.80	—	9.7	内面：回転ナデ・不明 外面：回転ナデ・カキ目・ 回転ヘラ削り 回転：時計廻り	2mm以下の 砂粒を比較 的多く含む	良好	内外面とも暗灰色

遺物番号	出土位置	種類	器種	法量 (cm) 系					調査・文様系	胎土	焼成	色調
				口径	かえり 発部径	体部 最大径	高台 径	高さ				
19	B区上面・ 下面	須恵器	短頸産	6.0	—	10.1	—	7.4	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ・未調整・ 回転ヘラ削り・回転ヘラ切り か 底部：丹塗充填か	3mm以下の 砂粒を比較 的多く含む	良好	内外面：暗灰色～ 灰黒色 胎土：灰色～暗茶 色
20	B区上面・ 下面	須恵器	平瓶	7.1	—	20.35	—	18.6 ～ 19.2	内面：回転ナデ・(底部) 調整不明 外面：回転ナデ・カキ目・ 円形浮文(2箇所)・腹方 向の平行タタキ+カキ目・ 未調整・浅い凹線・未調整・ カキ目	2～3mm程 度の石英等 の砂粒を含 む	良好	内外面とも淡灰色
21	B区上面	須恵器	平瓶	5.2～ 5.0	—	14.9	—	12.4 ～ 12.8	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ・カキ目・ 回転ヘラ削り 回転：時計廻り	2mm以下の 長石粒主体 に比較的多 くの砂粒を 含む	良好	内外面とも淡灰色 (一部灰色)
22	A区上面、 B区下面	須恵器	甌瓶	5.8	—	13.9	—	19.0	内面：回転ナデ・横ナデ・ 回転ナデ 外面：回転ナデ・カキ目・ 円形浮文(2カ所)・カキ目 体部中央に凹線充填	2mm以下の 長石・石英 等の砂粒を 比較的多く 含む	不良	内外面とも暗灰色 ～淡灰黒色
23	A区上面・ 下面、C区 下面	須恵器	甌瓶	(6.6～ 7.0)	—	17.0	—	21.2	内面：調整不明 外面：回転ナデ・回転ヘラ 削り・回転ナデ・回転ナ デ、体部中央に凹線充填	3mm以下の 長石・石英 などの砂粒 を比較的多 く含む	良好	内外面とも灰黒～ 黒褐色
24	A区下面	須恵器	杯蓋	13.9	—	—	—	4.8	内面：回転ナデ 外面：回転ヘラ削り・回転 ナデ 回転：時計廻り	1mm以下の 砂粒を多く 含む、2～3 mm大の砂粒 を若干含む	良好	内外面とも青灰色
25	A区下面、 B区上面	須恵器	杯蓋	12.4	—	—	—	4.1	内面：回転ナデ 外面：回転ヘラ削り+ナデ・ 回転ナデ・自然輪付着 回転：時計廻り	1mm程度の 砂粒を多く 含む	良好	内面：灰色、 外面：灰色～暗青 灰色
26	A区下面	須恵器	杯蓋	13.1	—	—	—	4.3	内面：一定方向のナデ・回 転ナデ 外面：自然輪付着+調整不 明+回転ヘラ削り・回転ナ デ 回転：時計廻り	2mm以下の 砂粒を含む	良好	内面：淡灰色、 外面：暗灰色～暗 灰白色
27	B区下面	須恵器	杯蓋	14.1	—	—	—	4.2	内面：回転ナデ 外面：回転ヘラ削り・回転 ナデ 回転：時計廻り	1～3mm程 度の砂粒を 多く含む	良好	内・外面とも青灰 色
28	B区下面	須恵器	杯蓋	13.4 ～ 13.7	—	—	—	3.7～ 4.4	内面：回転ナデ 外面：回転ヘラ削り・回転 ナデ 回転：時計廻り	3mm以下の 砂粒を多く 含む	良好	内面：明灰色、 外面：暗灰色(口 縁は明灰色)
29	C区南側壁 地土	須恵器	蓋 (高杯)	10.4	—	—	—	4.05	内面：回転ナデ 外面：ツマミ貼付・回転ナ デ・回転ヘラ削り・回転ナ デ 回転：時計廻り	2mm以下の 長石・石英 等を比較 的多く含む	良好	内外面とも暗灰青 色
30	B区下面	須恵器	杯身	11.3 ～ 11.8	13.6 ～ 13.9	—	—	3.7	内面：回転ナデ・一定方向 のナデ 外面：底部に破片が輪付、 全体に自然輪が付着	1mm程度の 砂粒を含む	良好	内面：淡灰色、 外面：黄灰色・暗 緑色の自然輪(2 /3程度厚く付着)
31	B区下面	須恵器	杯身	11.4	13.9	—	—	4.0	内面：回転ナデ・一定方向 のナデ 外面：回転ナデ・未調整・ 回転ヘラ削りか 輪が付着	2mm以下の 砂粒を含む	良好	内面：灰色、 外面：淡灰色

遺物番号	出土位置	種別	経緯	法量 (cm) ※				調整・文様※※	胎土	焼成	色調	
				口径	かえり 裏部径	体部 最大径	高台 脚幅径					高さ
32	A区下面	須恵器	杯身 重?	8.6	10.8	—	—	3.05	内面: 回転ナデ 外面: 回転ナデ・回転ヘラ 削り 回転: 時計逆まわり	比較的精良	良好	内面: 淡灰色. 外面: 青灰色
33	B区下面	須恵器	杯身	12.3	15.0	—	—	4.4	内面: 回転ナデ 外面: 回転ナデ・未調整・ 回転ヘラ削り 回転: 時計逆まわり	5mm以下の 砂粒を含む	良好	内外面とも淡青色
34	B区下面	須恵器	杯身	12.2	14.8	—	—	4.1	内面: 回転ナデ・一定方向 のナデ 外面: 回転ナデ・回転ヘラ 削り 回転: 時計逆まわり	2mm以下の 砂粒を比較 的多く含む	良好	内外面とも灰色
35	C区下面	須恵器	杯身	12.5	15.4	—	—	4.4	内面: 未調整・ 回転ナデ 外面: 回転ナデ・回転ヘラ 削り未調整	2mm以下の 砂粒を含む が比較的粗 良	かなり良好	内外面: 淡灰色～ 灰白色
36	B区下面	須恵器	壺蓋	11.2	9.0	—	—	3.2	内面: 回転ナデ 外面: 回転ヘラ削り・ 回転 ナデ 回転: 時計逆まわり	1mm大の砂 粒を含む	良好	内面: 明灰色. 外面: 暗灰色
37	B区下面	須恵器	高杯	12.9 ～ 14.5	—	—	9.0	6.6～ 7.7	杯部 内面: 一定方向のナ デ、蓋が多い 外面: 回転ナデ・未 調整・ 回転ヘラ削り 脚部 内外面とも回転ナデ 削り: 時計逆まわり	3mm以下の 石英・長石 等の砂粒を 比較的多く 含む	良好	内外面とも暗灰色
38	B区上面, C区下面	須恵器	椀	9.1	—	—	—	(5.3)	内面: 回転ナデ 外面: 回転ナデ・回転ヘラ 削り・ 回転ヘラ削り 回転: 時計逆まわり	1mm以下の 砂粒を含む	良好	内外面とも淡灰色 (一部暗灰色)
39	B区下面	土師器	椀	10.6	—	—	—	4.9	内面: 横ナデ・一定方向の ナデ 外面: 横ナデ 手捏ねによる成形	1mm以下の 砂粒を含む	良好	内面: 暗灰色. 外 面: 暗灰色～淡黄 色. 胎土: 淡黄色
40	西側基成石 南端地 土、南東填 掘下出土	須恵器	甌	—	—	(9.9)	—	(12.6)	内面: 横ナデ・横方向のケ ズリ・シボリ・横ナデ 外面: 横ナデ・ 回転ヘラ削 り + 回転ナデ・ 回転ナデ 肩部に尖唇2条 1/2 残	2mm以下の 砂粒を多く 含む	良好	内面: 灰色 外面: 暗灰色 (自 然暗あり)
41	B区下面	須恵器	提瓶	7.6～ 7.8	—	19.3	—	25.1	内面: 調整不明 (回転ナデ か) 外面: 回転ナデ・ 凹輪2条・ 力キ目・ 体部側面: 平行タ タキ・ 力キ目 + 回転ヘラ削 り. 体部中央に封鎖痕あり 角状の把手を貼付けてい る。	3mm以下の 砂粒を比較 的多く含む	良好	内外面とも灰色～ 暗灰色
42	開口部上層	須恵器	杯	12.2	7.6	—	—	3.7	内面: 回転ナデ 外面: 回転ナデ・ 回転ヘラ 削り・ 中央に一定方向のナ デ	1mm程度の 砂粒を比較 的多く含む	良好	内・外面とも灰白 色
43	開口部上層	須恵器	杯 (高台付)	12.8	—	—	8.9	3.7～ 4.3	内面: 回転ナデ 外面: 回転ナデ・ 貼付高台・ 回転ヘラ削り未調整 回転: 時計逆まわり	3mm以下の 砂粒を含む	良好	内面: 淡明灰色. 外面: 明灰色 (一 部暗灰色)
133	土師器 a 周溝・ B区 上面・ C区 横台石下	須恵器	甕	24.3	(42.2)	—	—	46.5	内面: 横ナデ (ヘラ記号あ り)・ケズリ + ナデ・ 同心 円タタキ 外面: 横ナデ・ 横方向の力 キ目・ 椀子目タタキ + 横 方向の力キ目・ 椀子目タ タキ + 横方向の力キ目 + ナ デ	2mm以下の 砂粒を含む	良好	内外面とも暗灰色 ～灰黒色

遺物番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm) 系				調査・文書採※	胎土	焼成	色調	
				口徑	かえり 突起径	体部 最大径	高台 脚底径					高さ
134	土器群 a 周溝	須恵器	横瓶	—	—	(26.0 ～ 36.4)	—	(28.8)	内面：回転ナデ・同心円タ タキ 外面：回転ナデ・格子目タ タキ + 回転ナデ (横方向) ・格子目タタキ + 回転ナデ (縦方向)	2～3mm程 度の砂粒を 比較的多く 含む	良好 (部分的に中 や不良)	内面：暗灰色 外面：灰色～灰黒 色
135	土器群 b	土師器	甕	21.3	—	(25.0)	—	29.2	内面：横ナデ・縦方向のヘ ラ削り 外面：底が村岩・磨痕不明	2mm以下の 砂粒を比較 的多く含む	良好	内外面とも暗灰黄 色
136	土器群 b	須恵器	杯身	12.5	15.2	—	—	4.4	内面：回転ナデ・回転ナデ 外面：回転ナデ・回転ヘラ 削り・ヘラ切りか 回転・時計廻り	3mm以下の 砂粒を比較 的多く含む	良好	内面：暗灰色 外面：暗灰色～灰 色
137	土器群 b	須恵器	平瓶	(4.1)	—	10.9	—	10.1	内面：回転ナデ・指環ナデ (底部に内嵌光頭一燒成後 に内嵌を外す) 外面：回転ナデ・円形押文(3 箇)・回転ヘラ削り + カキ 目 + 回転ナデ + 横方向の 指環凹痕状のやせ削りナデ 指環成形途中に平瓶へ転用	精良	良好	内外面ともに灰黒 色～灰色(肩部か ら体部上半にかけて し黄灰色の自然 釉)。胎土：黄灰 色
138	土器群 c	須恵器	杯蓋	13.7 ～ 12.3	—	—	—	4.7	内面：回転ナデ 外面：一定方向の静止ヘラ 削り・回転ナデ	5mm以下の 砂粒を比較 的多く含む	良好	内面：淡灰色。外 面：淡灰黄色。灰 色～灰黒色。胎土： 淡灰色
139	土器群 c	須恵器	杯蓋	12.9	—	—	—	4.2	内面：回転ナデ 外面：やや弱な一定方向の 静止ヘラ削り・回転ナデ	3mm以下の 砂粒を比較 的多く含む	良好	内外面とも暗灰青 色
140	土器群 c	須恵器	杯蓋	12.9	—	—	—	4.5	内面：回転ナデ 外面：一定方向の静止ヘラ 削り・回転ナデ	2mm以下の 砂粒を比較 的多く含む	良好	内面：淡灰色。 外面：灰色(肩部 及び口縁は灰黒～ 灰褐色)
141	土器群 c	須恵器	杯蓋	12.7	—	—	—	4.5	内面：回転ナデ 外面：一定方向の静止ヘラ削 り・回転ナデ・丁寧なナデ	2～3mm以 下の砂粒を 含む	良好	内面：淡灰色。暗 灰色。灰黒色。 外面：淡灰黄色
142	土器群 c	須恵器	杯蓋	14.2	—	—	—	3.6	内面：回転ナデ 外面：未調査・回転ナデ	1～3mm以 下の砂粒を 含む	良好	内外面：灰色(口 縁外面は1/3周 度灰黒色)
143	土器群 c	須恵器	蓋	9.0	11.2	—	—	3.1	内面：回転ナデ 外面：回転ヘラ削り・回転 ナデ	2mm以下の 砂粒を含む	良好	内面：淡灰色。 外面：灰色～淡灰 色(受部)
144	土器群 c	須恵器	蓋	(11.6)	8.8	—	—	2.65	内面：回転ナデ 外面：回転ヘラ削り・回転 ナデ 回転・時計廻り	1・2mm程 度の砂粒を 比較的多く 含む	良好	内面：暗灰黄色。 外面(口縁) 灰色
145	土器群 c	須恵器	杯身	11.0	13.7	—	—	3.6～ 3.9	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ・回転ヘラ 削り 回転・時計廻り	2mm以下の 砂粒を含む	良好	内面：淡灰色 外面：灰黄色(自 然釉)
146	土器群 c	須恵器	杯身	11.3	13.8	—	—	4.05	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ・回転ヘラ削 り・一定方向の静止ヘラ削り	3mm以下の 砂粒を含む	良好	内面：暗灰色 外面：暗灰色
147	土器群 c	須恵器	杯身	11.6	14.1	—	—	4.0	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ・回転ヘラ 削り + 一定方向のナデ	2mm以下の 砂粒を比較 的多く含む	良好	内面：淡灰色 外面：灰色
148	土器群 c	須恵器	杯身 蓋?	8.6	11.7	—	—	3.10	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ・回転ヘラ 削り + 回転ナデ 回転・時計廻り	2mm以下の 長石・石英 などの砂粒 を比較的 多く含む	良好	内外面とも暗灰青 色
149	土器群 c	須恵器	杯身	11.1	13.7	—	—	4.4	内面：回転ナデ・一定方向 のナデ 外面：回転ナデ・一定方向 の静止ヘラ削り	2mm以下の 砂粒を含む	良好	内面：明灰色 外面：灰色

遺物番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm) ※				調整・文様※※	胎土	焼成	色調	
				口径	かぶり 奥部径	体部 最大径	高台 脚端径					器高
150	土器群 c	須恵器	高杯	14.5 ～ 15.3	—	—	14.0 ～ 14.3	14.3 ～ 15.5	杯部 内面: 回転ナデ・未調整 外面: 回転ナデ・未調整 脚部 内面: シボ目・回転ナデ 外面: 斜め方向のナデ・ 回転ナデ 長方形通かし (2ヶ所)、脚部 上端から通かしにかけて長さ 2 ～ 3mm・幅 1mm程度の縦方 向の割線 2条 (通かし上部)	2mm以下の 長石を含む	不良・軟質	内外面とも灰灰色
151	土器群 c	須恵器	椀	8.5 (蓋み 大きい)	—	—	—	6.3	内面: 回転ヘラ削り + 回転 ナデ 外面: 回転ナデ・回転ナデ・ ヘラ削り残ナデ 内外面とも自然釉が付着	1mm程度の 砂粒を若干 含む	良好	内外面とも灰白色 (オリーブ灰色の 自然釉が広がる)
152	土器群 c	須恵器	短頸壺	9.1	—	15.7	—	11.3	内面: 回転ナデ・一定方向 のナデ 外面: 回転ナデ・浅い凹輪 1条・回転ナデ・回転ヘラ 削り・回転ヘラ削り 回転・時計廻り	3mm以下の 長石・石英 などの砂粒 を非常に多く 含む	良好	内外面とも灰黒色 ～暗灰色
156	土器群 c	須恵器	短頸壺	12.3	—	21.2	—	20.0	内面: 回転ナデ・同心円タ タキ 外面: 回転ナデ・回転ヘラ 削り + カキ目・縦方向の 平行タタキ + カキ目	2mm以下の 砂粒を含む	良好	内外面とも灰灰色 ～褐色 (外 面体部下半)
157	土器群 c	須恵器	提瓶	—	—	14.2	—	(16.2)	内面: 回転ナデ・指頭ナデ・ 回転ナデ 外面: 凹輪 2条・横ナデ・ 回転ナデ (中央を円板充 填)・回転ヘラ削り	2mm以下の 砂粒を含む	良好	内面・胎土: 灰色 外面: 灰色～灰黒 色
158	盛土内	須恵器	杯蓋	(13.8)	—	—	—	(4.1)	内面: 一定方向のナデ・回 転ナデ 外面: 回転ヘラ削り・回転 ナデ	3mm以下の 砂粒を多く 含む	良好	内外面とも灰黒色 ～暗灰色
159	開口部から 北 1.5 m (中 部)、盛土 内	須恵器	杯蓋	(13.8)	—	—	—	4.25	内面: 一定方向ナデ・回転 ナデ 外面: 回転ヘラ削り・回転 ヘラ削り・回転ナデ 回転・時計廻り	3mm以下の 石英・長石 等の砂粒を 多く含む	良好	内面: 明灰色 外面: 暗灰色
160	盛土内	須恵器	杯身	(12.0)	(14.6)	—	—	4.3	内面: 回転ナデ・一定方向 のナデ 外面: 回転ナデ・回転ヘラ 削り 回転・時計廻り	3mm以下の 長石・石英 などの砂粒 を比較的多く 含む	良好	内面: 淡青灰色 外面: 暗青灰色
161	盛土内	土師器	椀	8.8	—	—	—	4.2	内面: 横ナデか・調整不明 外面: 調整不明 手履ねか	1～2mmの 砂粒を若干 含む	不良	内外面ともぶい 黄褐色
162	盛土内	須恵器	提瓶	頸部径 4.4	—	—	—	4.4	内面: 回転ナデ 外面: 回転ナデ・円形浮文 (径 1.6)・縦方向のカキ目・ 縦方向の回転ナデ	1mm程度の 砂粒を含む	不良	内外面とも暗灰色

※「法量」欄の () は、器高が現存値、その他は復元値を示す。以下の表における () は現存値を表す。

※※調整については、坯蓋は天井部→口縁、その他は口縁→底部の順に、また調整手法に先後関係がある場合は「先+後」と表記した。

第3表 長畑山古墳出土鉄器観察表

() 現存値

遺物番号	出土位置	種類	頸	脚身	脚	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g
44	A区上面	鉄鍔	長頸	長三角	棘状	全長 18.0 頸身部 2.0 頸部 10.3 基部 6.7	幅身部 1.0 頸部 0.4～0.6 基部径 0.5	幅身部 0.2 頸部 0.3～0.4 基部径 0.5	11.59
45	C区上面	鉄鍔	長頸	方頸	棘状	全長 14.5 頸身部約 1.5 頸部約 8.4 基部約 4.6	幅身部 1.0 頸部 0.6～1.0 基部 0.3～0.6	幅身部 0.45 頸部 0.4～0.45 基部 0.4	18.37

遺物番号	出土位置	種類	頸	頸身	開	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g
46	C区上面	鉄鍍	長頸	不明	轉状	全長 (16.2) 頸身部 (1.0) 頸部 10.0 茎部 5.2	頸身部 0.7 頸部 0.6 茎部 0.2 ~ 0.4	頸身部 - 不明 頸部 0.2 ~ 0.3 茎部 0.2 ~ 0.3	8.94
47	C区上面	鉄鍍	—	三角	斜め	全長 (8.7) 頸身部 4.5 頸部 1.7 茎部 (2.8)	頸身部 3.1 頸部 0.35 ~ 0.7 茎部 0.15 ~ 0.35	頸身部 0.25 頸部 0.35 茎部 0.25 ~ 0.3	12.92
48	C区上面	用途不明 筒状鉄製品	—	—	—	3.4	上部径 1.2 下部径 1.0	0.1 下部 0.4	8.77
49	B区下面	鉄鍍	長頸	長三角	轉状	全長 (14.7) 頸身部 2.6 頸部 8.4 茎部約 (3.7)	頸身部 0.9 頸部 0.5 ~ 0.6 茎部 0.3 ~ 0.5	頸身部 0.25 頸部 0.3 ~ 0.4 茎部 0.2 ~ 0.35	11.19
50	A区下面	鉄鍍	長頸	長三角	轉状	全長 14.3 頸身部 2.2 頸部 7.8 茎部 4.3	頸身部 0.9 頸部 0.4 茎部 0.35	頸身部 0.2 頸部 0.25 ~ 0.3 茎部 0.3	7.27
51	A区下面	鉄鍍	長頸	長三角	轉状	全長 (14.2) 頸身部 2.5 頸部 5.6 茎部 5.6	頸身部 1.0 頸部 0.5 茎部 0.25 ~ 0.5	頸身部 0.25 頸部 0.3 ~ 0.4 茎部 0.2 ~ 0.3	(14.23)
52	庫下C	鉄鍍	長頸	長三角	轉状	全長 (10.15) 頸身部 (4.55 办) 頸部 2.9 办 茎部 (2.7)	頸身部 1.1 頸部 0.7 ~ 1.0 茎部 0.3 ~ 0.55	頸身部 0.3 頸部 0.3 茎部 0.25	(6.14)
53	A区下面	鉄鍍	長頸	長三角	不明	全長 (5.5) 頸身部 (1.5) 頸部 (茎部) (4.0)	頸身部 0.8 頸部 (茎部) 0.4	頸身部 0.25 頸部 (茎部) 0.2 ~ 0.3	2.98
54	A区下面	鉄鍍	長頸	長三角	轉状	全長 (13.3) 頸身部 2.3 頸部 8.3 茎部 2.7	頸身部 0.5 頸部 0.4 ~ 0.7 茎部 0.3 ~ 0.5	頸身部 0.2 頸部 0.2 ~ 0.3 茎部 0.3	7.49
55	A区下面	鉄鍍	長頸	長三角	轉状	全長 18.6 頸身部 1.7 頸部 11.3 茎部 5.6	頸身部 0.9 頸部 0.4 ~ 0.5 茎部 0.5	頸身部 0.35 頸部 0.35 茎部 0.3	15.22
56	A区上面	刀子	—	—	—	全長 (7.4) 刀部 (2.3) 茎部 5.1	刀部 1.35 茎部 0.6 ~ 1.35	刀部 0.4 茎部 0.15 ~ 0.3	(10.32)
57	C区上面	刀子	—	—	—	全長 9.8 刀部 6.9 ~ 7.1 茎部 2.7 ~ 2.9	頸身部 1.4 茎部 0.4 ~ 1.05	頸身部 0.15 ~ 0.3 茎部 0.15 ~ 0.2	(5.99)
58	A区下面	鉄鍍	—	方頸	轉状	全長 10.7 頸身部 6.9 茎部 3.8	頸身部 1.1 ~ 2.8 茎部 0.2 ~ 0.6	頸身部 0.3 ~ 0.4 茎部 0.3	13.24
59	C区上面	鉄鍍	—	方頸	轉状	全長 (10.4) 頸身部 6.0 茎部 (4.4)	頸身部 0.9 ~ 0.26 茎部 0.3 ~ 0.55	頸身部 - 頸部 0.2 ~ 0.3 茎部 0.2 ~ 0.15	12.34
60	C区上面	鉄鍍	長頸	方頸	角	全長 14.3 頸身部 10.5 頸部 - 茎部 3.8	頸身部 1.2 頸部 0.7 ~ 0.8 茎部 0.2 ~ 0.5	頸身部 0.25 頸部 0.3 茎部 0.2 ~ 0.4	15.51
61	A区下面	鉄鍍	長頸	三角	轉状	全長 (14.1) 頸身部 1.5 頸部 8.0 茎部 (4.6)	頸身部 1.5 頸部 0.4 ~ 0.5 茎部 0.3	頸身部 0.35 頸部 0.3 茎部 0.3	8.89
62	A区下面	鉄鍍	—	長三角	不明	全長 (6.0) 頸身部 (1.48) 頸部 (1.2)	頸身部 2.6 頸部 -	頸身部 0.2 頸部 -	12.10
63	A区下面	鉄鍍	—	長三角形 斜め办	不明	頸身部 (4.5)	頸身部 2.5	頸身部 0.2 ~ 0.25	8.06
64	C区上面	鉄鍍	—	三角	轉状	全長 (12.8) 頸身部 7.3 頸部 1.3 茎部 (4.2)	頸身部 2.9 頸部 0.7 ~ 1.1 茎部径 0.6	頸身部 0.35 頸部 0.45	20.92
65	C区上面	鉄鍍	—	長三角	角	全長 13.9 頸身部 7.3 頸部 1.6 茎部 5.0	頸身部 2.6 ~ 3.3 頸部 1.1 茎部 0.3 ~ 0.6	頸身部 0.3 頸部 0.3 茎部 0.2 ~ 0.4	31.59
66	A区下面	鉄鍍	—	長三角	轉状	全長 11.7 頸身部 5.5 頸部 1.6 茎部 4.6	頸身部 2.6 頸部 1.0 ~ 2.6 茎部 0.3 ~ 0.8	頸身部 0.2 頸部 0.3 茎部 0.2 ~ 0.3	11.18

透物 番号	出土位置	種類	型	鎌身	間	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g
67	A区下面	鉄鏃	—	長三角	鎌状	全長 11.9 鎌身部 5.8 頸部 1.7 基部 4.4	鎌身部 2.8 頸部 1.0 ~ 2.8 基部 0.2 ~ 0.8	鎌身部 0.25 頸部 0.35 基部 0.2 ~ 0.35	15.76
68	A区下面	鉄鏃	—	長三角	鎌状	全長 11.0 鎌身部 5.0 頸部 1.85 基部 4.15	鎌身部 2.7 頸部 0.85 ~ 2.7 基部 0.2 ~ 0.5	鎌身部 0.2 頸部 0.25 基部 0.25	10.46
69	A区下面	鉄鏃	—	長三角	鎌状	全長 10.3 鎌身部 5.0 頸部 1.0 基部 4.3	鎌身部 2.3 頸部 0.7 ~ 2.3 基部 0.2 ~ 0.6	鎌身部 0.3 頸部 0.25 基部 0.2 ~ 0.3	(10.43)
70	B区下面	鉄鏃	—	長三角	鎌状	全長 (8.8) 鎌身部 5.2 頸部 1.1 基部 (2.5)	鎌身部 1.6 頸部 0.7 ~ 1.6 基部 0.25 ~ 0.4 (木質を含む)	鎌身部 0.2 頸部 0.3 基部 —	7.13
71	C区上面	鉄鏃	長頸	片刃	角	全長 15.2 鎌身部 2.9 小 頸部 9.1 小 基部 3.2	鎌身部 0.8 頸部 0.6 基部 0.25 ~ 0.4	鎌身部 0.25 頸部 0.3 ~ 0.4 基部 0.2 ~ 0.3	10.88
72	C区上面	鉄鏃	長頸	不明	鎌状	全長 14.6 鎌身部 — 頸部 13.55 基部 1.05	鎌身部 — 頸部 0.5 基部 0.5	鎌身部 — 頸部 0.35 ~ 0.4 基部 0.25	8.97
73	C区上面	鉄鏃	長頸	不明	鎌状	全長 (17.2) 鎌身部 (1.4 小) 頸部 10.7 小 基部 (5.1)	鎌身部 0.8 頸部 0.4 ~ 0.7 基部 0.4 ~ 0.5 (樹皮表面径 0.8)	鎌身部 0.2 頸部 0.3 ~ 0.4	13.62
74	A区下面	鉄鏃 (茎)	—	—	鎌状	全長 (3.25) 頸部 (1.7) 基部 (1.55)	頸部 0.45 ~ 0.5 基部 0.3 ~ 0.4	頸部 0.25 基部 0.25	1.61
75	C区上面	鉄鏃 (茎)	—	—	—	(3.00)	0.4 ~ 0.5(木質を含む) 0.3 (木質を除く)	0.5 (木質を含む) 0.3 (木質を除く)	(1.00)
76	C区上面	鉄鏃 (茎)	—	—	—	全長 (3.3) 頸部 (0.8) 基部 (2.5)	頸部 0.5 基部 0.4	頸部 0.3 基部 0.3	(1.81)
77	C区上面	鉄鏃 (茎)	—	—	—	(2.85)	0.55	0.55	(2.04)
78	A区下面	鉄鏃 (茎)	—	—	—	(2.5)	0.5	0.55	(2.02)
79	排土	鉄鏃 (茎)	—	—	—	(2.35)	0.4	0.35	(1.28)
80	排土	鉄鏃 (茎)	—	—	—	(1.65)	0.35 ~ 0.45	0.1 ~ 0.15	0.28
81	A区下面	刀子	—	—	—	全長 (11.6) 刃部 (7.7) 基部 (3.9)	刃部 0.7 ~ 1.3 基部 0.6 ~ 1.0	刃部 0.4 ~ 0.45 基部 0.4	(14.23)
82	A区下面	刀子	刃部片	—	—	(5.3)	1.3	0.5	5.29
83	C区上面	刀子	刃部片	—	—	(2.05)	0.8	0.25	(1.03)
84	排土	刀子	刃部片	—	—	(1.75)	(0.8)	(0.3)	(0.63)
85	A区下面	刀子	—	—	—	全長 (7.1) 刃部 (2.7) 基部 (4.4)	刃部 0.95 ~ 1.5 基部 0.7 ~ 1.0	刃部 0.6 基部 0.4 ~ 0.5	10.72
86	C区上面	刀子	刃部~茎 部片	—	—	全長 (5.6) 刃部 (2.0) 基部 (3.6)	刃部 (1.2) 基部 0.6 ~ 0.9	刃部 (0.15) 基部 0.3 ~ 0.5	(7.33)
87	排土	刀子	茎部片	—	—	(3.4)	1.0	0.5	(4.22)
153	土器群C	鉄鏃	長頸	長三角	台形	全長 19.0 鎌身部 3.0 頸部 13.7 基部 (2.3)	鎌身部 0.85 頸部 0.5 ~ 0.6 基部 0.3 ~ 0.4	鎌身部 0.25 頸部 0.35 ~ 0.4 基部 0.3	7.70
154	土器群C	鉄鏃	長頸	長三角	不明	全長 (4.9) 鎌身部 (3.2) 頸部 (1.7)	鎌身部 1.35 頸部 0.55 ~ 0.8	鎌身部 0.2 ~ 0.25 頸部 0.3	(4.43)
155	土器群C	鉄鏃 (茎)	—	—	—	(2.7)	0.5 (木質を含む)	0.4	(0.81)

第4表 長畑山古墳出土土耳環観察表

遺物番号	出土場所	断面間隔 mm	外径 cm	内径 cm	断面 cm	重量 g	備考
89	A区下面	3~4.5	縦2.7×横3.05	縦1.45×横1.7	縦0.7×横0.65~0.7 (ほぼ正円形)	14.74	割製磁金
88	B区下面	3~4	縦2.8×横3.0	縦1.5×横1.9	径0.8 (ほぼ正円形)	14.80	割製磁金
91	B区下面	0~1.5	縦2.9×横3.1	縦1.5×横1.65	径0.7 (ほぼ正円形)	16.18	割製磁金
90	B区下面	4~5	縦2.9×横3.3	縦1.6×横1.85	径0.8 (推定値、ほぼ正円形)	17.23	割製磁金
92	C区下面	欠失	2.0	1.2	(0.4) (縦長の楕円形)	1.83	割製磁金
93	C区下面	欠失	縦1.8×横2.0	縦1.2×横1.3	縦0.45×横0.3 (縦長の楕円形)	2.35	割製磁金

第5表 長畑山古墳出土土玉類観察表

遺物番号	出土場所	種類	長さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	色調
95	C区上面	ガラス小玉	0.6~0.75	1.05~1.1	0.3×0.4	1.36	黒褐色
94	C区下面	管玉	1.9	0.55	0.2	0.96	暗灰褐色
96	B区下面(整地土)	土製小玉	0.45~0.55	0.7×0.65	0.15	0.24	黒褐色
97	B区下面(整地土)	土製小玉	0.5	0.7×0.6	0.1	0.22	黒褐色
98	B区下面(整地土)	土製小玉	0.5	(0.7)	—	(0.18)	黒褐色
99	B区下面(整地土)	土製小玉	0.55~0.6	0.6~0.65	0.15	0.23	黒褐色 (胎土は淡褐色)
100	B区下面(整地土)	土製小玉	0.6	0.7×0.75	0.15	0.33	黒褐色
101	B区下面(整地土)	土製小玉	0.4~0.5	0.7 (0.55)	0.15	0.22	黒褐色
102	B区下面(整地土)	土製小玉	0.4~0.6	0.8×0.7	0.1 (~0.15)×0.2	0.31	黒褐色
103	B区下面(整地土)	土製小玉	0.4~0.5	0.65~0.7	0.15	0.22	暗茶褐色
104	B区下面(整地土)	土製小玉	0.4~0.5	0.7×0.5	0.1×0.15	0.26	暗褐色 (胎土は茶褐色)
105	B区内整地土	土製小玉	0.45	0.65	0.15	0.19	黒褐色
106	B区内整地土	土製小玉	0.5~0.6	0.65	0.15~0.2	0.25	黒褐色
107	B区内整地土	土製小玉	0.45	0.6	0.15~0.2	(0.14)	褐色
108	B区内整地土	土製小玉	0.6	0.65	0.15	0.27	暗褐色
109	B区内整地土	土製小玉	0.5	0.65×0.7	0.15	0.2	黒褐色
110	B区内整地土	土製小玉	0.5	0.6~0.65	0.15×0.2	0.21	黒褐色 (上下面に淡褐色面)
111	B区内整地土	土製小玉	0.65	0.7×0.75	0.2	0.33	黒褐色 (上下面に割がれた痕 暗褐色)
112	B区内整地土	土製小玉	(0.5)	(0.7)	0.2	(0.1)	暗褐色(胎土とも)
113	B区内整地土	土製小玉	0.2~0.4	0.6×0.7	0.1	0.13	黒褐色
114	B区内整地土	土製小玉	0.45	0.6~0.65	0.15	0.19	黒褐色
115	B区内整地土	土製小玉	0.6	0.65×0.7	0.15	0.33	黒褐色

試料番号	出土場所	種類	長さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	色調
116	B区内整地土	土製小玉	0.6 ~ 0.7	0.7	0.1 ~ 0.15	0.26	暗褐色
117	B区内整地土	土製小玉	0.55	0.6 ~ 0.7	0.15	0.22	黒褐色
118	B区内整地土	土製小玉	0.6	0.7	0.1	0.27	黒褐色
119	B区から南側の 整地土	土製小玉	0.5 ~ 0.55	0.65	0.1	0.23	暗褐色
120	B区から南側の 整地土	土製小玉	0.55	0.65 × 0.75	0.1 × 0.15	0.21	黒褐色
121	B区内整地土	土製小玉	0.5 ~ 0.55	0.6 × 0.65	0.15 ~ 0.2	0.21	黒褐色
122	B区内整地土	土製小玉	0.45	0.6 × 0.7	0.1 × 0.2	0.2	暗褐色
123	B区内整地土	土製小玉	0.5 ~ 0.55	0.6 ~ 0.65	0.1	0.28	黒褐色
124	B区内整地土	土製小玉	0.45 ~ 0.5	0.6 ~ 0.65	0.2	0.2	暗褐色
125	B区から南側の 整地土	土製小玉	0.55 ~ 0.7	0.65 × 0.7	0.15	0.32	暗褐色
126	B区から南側の 整地土	土製小玉	0.55	0.65	0.15	0.23	暗褐色
127	B区から南側の 整地土	土製小玉	0.4 ~ 0.45	0.6 × 0.65	0.1 × 0.15	0.18	暗褐色
128	B区から南側の 整地土	土製小玉	0.45 ~ 0.5	0.65 ~ 0.7	0.15	0.23	暗褐色
129	B区内整地土	土製小玉	0.4 ~ 0.45	0.65 × 0.7	0.15	0.19	暗褐色
130	B区内整地土	土製小玉	0.55 ~ 0.65	0.6 ~ 0.65	0.15 ~ 0.2	0.32	暗褐色
131	B区内整地土	土製小玉	0.5	0.65 × 0.7	0.15	0.24	暗褐色
132	B区内整地土	土製小玉	0.6	0.65 × 0.7	0.15	0.27	暗褐色

V まとめ

1. 殿平古墳

殿平古墳は箱式石棺を埋葬施設とした円墳で、埋葬施設・墳丘・溝・調査区内から一切遺物が出土していない。本古墳の特徴と他の古墳（吉舎町内だけでなく三次盆地を中心に県内も含めて）との特徴を比較しながら築造時期を考えて、まとめたい。

吉舎町の古墳の大部分は、直径10m前後の小型の円墳で、多くは古墳群を形成している。このような古墳の中にあつて本古墳の特徴は、単独で立地していることである。円弧状の溝を掘り込んで平面形がやや不整な円形の墓域を区画している。埋葬施設は1基である。箱式石棺の石材を横長に使用するなど、弥生時代の箱式石棺の様相がみられることの4点である。古墳の築造時期は、遺物が出土していないため明確に出来ないが、前述の特徴とこれまでの調査例とを比較して検討してみる。

①本古墳の特徴である尾根筋に立地し、溝を掘り込むことで墓域を区画していることについて、新井真吾氏は、「地域色なのかどうかを探してみたが、墳形や溝による特徴については、県南部に比較的多いものの県内各地に分布していることから、時期的・地形的な要因によるものであると思われる。」と述べている⁽¹⁾。これらを時期的にみると、古墳時代中期（4世紀末～5世紀）の中におさまる古墳が多い。

②三次盆地で埋葬施設が箱式石棺の調査が行われた円墳をみても、(第6表)本古墳のように、石棺の側壁の石材を横長に使用した古墳の築造時期は、箱山第4号古墳（5世紀代）・上四拾貳第10号古墳（6世紀前半）・後山大平古墳（6世紀後半～7世紀初頭）・花園第19号古墳（古墳時代後半期より古い）となる。また、墳丘頂部に箱式石棺による単独埋葬の古墳の築造時期をみると、宮の本第25号古墳（4世紀末～5世紀中葉の中で古い）・瀬戸越南古墳（5世紀前半中心～5世紀中葉）・駸ヶ谷北第3号古墳（5世紀～6世紀前半の中で新しい）・陣山第20号古墳（5世紀後半～6世紀前半）・後山大平古墳（6世紀後半～7世紀初頭）・花園第20号古墳（古墳後後半期より古い）・寺津第6号古墳（現状保存のため不明）などがある。以上の単独埋葬で石材を横長に使用した調査例の共通点を見ると、古墳時代前期（3世紀後半～4世紀）には溯っていない事が窺える⁽²⁾。

また、複数の埋葬施設がみられる古墳については、中田昭氏が「同一墳丘内に複数の主体部を持つ古墳の複数埋葬のあり方は、ほとんど同時に埋葬されたものと、さらに若干の時期を経て再度埋葬される場合があるようであるが、いずれも5世紀～6世紀前半頃にかけてのものである。複数埋葬可能な横穴式石室が構築される直前の時期に、集中して見られるのは、葬法的な流行がこの時期に支配的であったといえよう。」と述べている⁽³⁾。

③三次盆地に横穴式石室を持つ古墳が造られ始めるのは6世紀中頃で、その中で最も古いとされているのは若屋第9号古墳である。また、横穴式石室が普及し、大型化するのには6世紀後半とされている。

④宮の本第20～26・31・32号古墳をみても、最初に、竪穴式石室を中心埋葬施設に持つ大型円墳の第24号古墳が4世紀末に築造され、次いで箱式石棺を中心埋葬施設に持つ小型円墳が第25→23→21→22号古墳の順で5世紀中葉までに築造後、横穴式石室を中心埋葬施設に持つ古墳が6世紀末～8世紀初頭に第20→32→31古墳の順に築造され追葬が行われたとしている。

以上のことから、本古墳は横穴式石室がこの地域に導入される前の段階で、箱式石棺が6世紀前半頃まで採用されているものの、単独埋葬であることや単独で立地していることをふまえて、古墳時代中期(4世紀末～5世紀代)の範疇におさまると考えておきたい。

第6表 三次盆地で箱式石棺が埋葬施設の調査された古墳の一覧表

古墳の名称	築造時期	径(m)	所在地	主体部の種類と数		箱式石棺の墳丘での位置(1基の場合)	箱式石棺の御石の使い方	文献	
				箱式石棺	その他				
殿平古墳	—	7.5	吉倉町海田原	1	—	中央	横長	—	
寺津第6号古墳	現状保存のため不明	9	吉倉町知和	1	—	中央	—	1	
花園第19号古墳	古墳時代後半より古い	15	十日市南	2	土坑墓1	—	縦長	2	
花園第20号古墳		8.5	十日市南	1	—	やや南	縦長		
鞍ヶ谷北第1号古墳	5C～6C前半	古↓新	13	齊河町	1	木棺1	—	縦長	3
鞍ヶ谷北第2号古墳			8.5	齊河町	2	—	—	縦長	
鞍ヶ谷北第3号古墳			9	齊河町	1	—	中央	縦長	
上四拾貫第10号古墳	6C前半	13	廻拾貫町	2	—	—	横長	4	
権現第2号古墳	5C前半中心～5C中葉	20	向江田町	5	—	—	縦長	5	
権現第3号古墳	5C中葉中心	10	向江田町	2	—	—	縦長		
瀬戸越南古墳	5C前半中心～5C中葉	7	向江田町	1	—	やや北	縦長	6	
龍山第4号古墳	5C代	10	向江田町	2	石蓋土坑墓1	—	混合・横長	7	
下山手第4号古墳	5C前半～5C中葉	15	向江田町	1	複合式木棺1	—	縦長	8	
宮の本第24号古墳	4C末～5C初頭	古↓新	30	向江田町	2	竪穴式石室	—	縦長	9
宮の本第25号古墳			18	向江田町	1	—	中央	縦長	
宮の本第23号古墳	4C末～5C中葉		12	向江田町	3	—	—	混合・縦長2	
宮の本第21号古墳			11	向江田町	2	—	—	混合・縦長	
宮の本第22号古墳			8	向江田町	2	—	—	混合・不明	
陣山第20号古墳	5C後半～6C前半	15	向江田町	1	—	中央	小口積み	10	
野輪南第11号古墳	6C前半	10	向江田町	1	土坑墓1	—	不明	11	
宗祐池西第20号古墳	古墳時代初頭	7.5	南畑敷町	1	—	中央	混合	12	
照原下第7号古墳	5C末～6C初頭	10	南畑敷町	2	土坑墓1	—	縦長	13	
後山大平古墳	6C後半～7C初頭	不明	後山町	1	—	ほぼ中央	横長	14	
寺山第4号古墳	5C後半～6C前半	不明	三良坂町灰塚	1	—	—	混合	15	
杉谷第9号古墳	5C初頭	17	三良坂町灰塚	2	—	—	縦長	16	

2. 長畑山古墳

長畑山古墳は三次市吉舎町海田原に所在し、馬洗川の南側丘陵に立地する単独の古墳で横六式石室を埋葬施設としていた。ここでは、古墳の概要を整理し、本古墳から出土した遺物と出土状況から築造年代を検討して、若干の考察を行いたい。

古墳の概要

立地 長畑山古墳は、三次市吉舎町中央部を北西方向へ流れる馬洗川南岸の丘陵の一角に位置し、横六式石室を埋葬施設としている。古墳は馬洗川に向かって開けた狭長な谷部から西側の丘陵東側斜面に立地し、丘陵斜面の東西方向の小谷に並行する僅かな斜面変換点を利用してつくられている。調査前は、斜面地に僅かな平坦面が認められる程度で墳丘裾も不明瞭な状況であったことから、古墳として周知されていなかった。

墳丘・周溝 墳形は南北方向12m、東西方向10mの楕円形で、北側と東側の墳裾は不明瞭である。現状で墳丘の高さは、西側の周溝の底から約0.3mで、北側裾からは約2.5mである。溝の長さは、約11mで尾根に直交して掘削し、最大幅が2.5m、西側の上端から深さ0.5m程度である。

石室 無袖の横六式石室である。石室内の主軸はN-13°-Wで南側が開口部となる。規模は、現存長で西側壁が6.05m、東側壁が5.74m、幅は奥壁側が0.8m、開口部が1.24mで、開口部に向かって徐々に広がっている。高さは天井石が残っていないため不明であるが、東側側の遺存状況が良好な場所から推測すると床上面からの高さは1.2m程度であったと思われる。両側壁の奥壁から約1.8m付近に立石があり、玄室と羨道の区画を意識していると考えられる。玄室の規模は、奥壁から立石南端までの西壁側が2.05m、東側壁側が1.95mで、床面の長軸に対してやや西側へ振れている。羨道の規模は東西の立石の南端から側壁石の端までの長さが、西壁側で4.05m以上、東側壁側で3.7m以上である。

石積み状況は、奥壁は3段で幅80cm、高さ55cm、奥行き50cmの基底石の上に、やや小ぶりな石材を横長に2個積み上げている。玄室部は西側壁が立石を含め4個、東側が3個の基底石の上に、石材をもち送り気味に3～4段積んでいる。羨道部は、西側が幅40～80cm、高さ30～50cm、奥行き40～70cm程度の基底石を6個使用し、最大5段の石積みが見られる。東側は開口部から3個目の基底石から奥壁側に小型の石材を4個使用している以外は、西側と同規模の石材を使用し基底石としている。基底石から上部の石材は、西側の石材に対して板状の薄い石材も含まれるなど概して小さく、最大6段に積み上げられている。

床面 玄室・羨道ともにほぼ水平である。掘り下げ途中、奥壁側で人骨片が密集した状態で出土した。人骨は礎床の石材を奥壁側に集めた空地から出土し、同一面の開口部付近から出土している須恵器杯身2点と相伴していると考えられ、石室を再利用して埋葬したと思われる。

床面上では遺体を安置した箇所を3箇所確認し、それぞれA・B・C区とした。A区は玄室部で、床面に扁平な河原石を敷いた礎床である。B区は立石から西側で、甕片や杯身・杯蓋の底部や天井部を上に並べた土器床であったと考えられる。C区はB区南端の東側で棺台石を確認した。棺

台石はA区でも確認しているが、B区は存在していなかったか、C区での埋葬時に整理されたと考えられる。各区から鉄釘が出土していないことから、組合式の木棺を使用していた可能性が高い。

出土遺物の検討

遺物は、石室内(A・B・C区)、周溝内(土器群a)、墳丘盛土内(土器群b・c)、盛土内から出土している。これらの遺物の出土地点を以下の表で整理した。

須恵器蓋杯は、本文中で口径の違いから2つのグループ分け、杯身がⅠ類(11.0～11.6cm)とⅡ類(12～12.6cm)、杯蓋はⅠ類(12.1～13.1cm)とⅡ類(13.5～14.2cm)とした。出土地点は杯身Ⅰ類に該当する32はA区、7・30・31はB区、145～149は土器群cである。杯身Ⅱ類は、8・33・34がB区、35がC区、136が土器群b、160が盛土内である。杯蓋Ⅰ類は、25・26がA区、5がC区、138～141は土器群c、Ⅱ類は、1～4・24がA区、6・27・28がB区、142が土器群

第7表 長畑山古墳出土遺物の出土地点一覧表 * 番号は遺物番号を表す
** 鉄製の太字は錆状を図を表す

出土地点	土器										鉄器		装身具	
	杯蓋	杯身	高杯	壺	平底	碗	鉢	甗類	埴器	鉢	刀子	冴皿	玉類	
石室内A	1・2 3・4 24・25 26	32	9・10	—	—	—	15	16 17	22 23	長柄飯 44 50・51 53・54 55・61 方頭飯 58 長三角飯 62・63 66・67 68・69 茶 74・78	56 81 82 85 84 (敷地上)	89	—	
石室内B	6・27 28 36 (敷)	7・8 30・31 33・34	11・12 37 13 (土器群)	—	20 21	14 39 (土器群)	—	18 19	41	長柄飯 49 長三角 70	—	88 90 91	土製小玉 37	
石室内C	5 29 (敷地) 42・43 (土器)	35	—	—	—	38	40 (敷地上)	—	—	長柄飯 45 46・52 60・71 72・73 方頭飯 59 三角飯 83 47・64 長三角飯 85 65 茶 75・76・77 圓形鉄製品 48	57 83 86 87 (敷地上)	92 93	菅玉 94 ガラス小 玉 95	
土器群a	—	—	—	133	134 (埋)	—	—	—	—	—	—	—	—	
土器群b	—	136	—	135 (土器群)	137	—	—	—	—	—	—	—	—	
土器群c	138・139 140・141 142 増量 143・ 144	145・146 147・148 149	150	—	—	151	—	152 156	157	153 154 155	—	—	—	
盛土内	158・159	160	—	—	—	161	—	—	162	—	—	—	—	

c. 158・159が盛土内である。I・II類の差は時期差を表しているとも考えられるが、底部・天井部が未調整で成形痕が残る個体が多いこと、形態に大きな差がみられないことやI・II類が各出土地点で共存していることから、同一時期の範囲に収まると考えられる。また、土器群cから出土している杯蓋138・杯身146などにみられる手持ちによるヘラ削りの痕跡が残るものは、土器群c以外から出土していないことから、工人あるいは窯の違いである可能性が高い。

これらの須恵器の時期は蓋杯の形態や成形技法も含め、高杯が長脚で2段透かしであることや低脚化していること、提瓶の把手が円形浮文状・カギ状であること、壺の形態などからTK209型式⁽⁶⁾に該当すると思われる。

また、本古墳から出土している鉄鍔37点(茎を含む)の内、関の形状が棘状のものが21点と半数以上を占めている事が特徴的である。棘状関は6世紀後半になると長頸鍔の出現とともに棘状関が導入されている⁽⁷⁾といわれ、須恵器による年代と時期が一致している。

以上のことから本古墳は6世紀後半～7世紀初頭に築造され、2回の追葬が行われていた。床面のA～B区と土器群cの遺物が同型式内に収まることから、短期間に追葬が行われたと考えられる。大まかな築造作業と埋葬の順は、前後・同時進行もあると思われるが以下のように復元できる。埋葬場所の設定→整形と掘方の掘削→石材の搬入→石材の設置→祭祀(土器群b)→裏込めを入れながら石を積み上げる→天井石の設置→祭祀(土器群c)→溝掘削→土盛→床面の設営→遺体安置(A区での埋葬・敷石→B区での埋葬・土器床→C区での埋葬・B区内の遺物の片付け、一部は周溝へ廃棄)→A区の敷石を利用して埋葬(古代)⁽⁸⁾を行う(石室の再利用)。

古墳の特徴

調査成果の一つとして盛土内(土器群b・c)で確認した遺物の出土状況があげられる。これらは、石室掘方の東西両側から土器が配置された状態で出土している。

西側(土器群b)は、土師器甕(135)の北側に平瓶(137)・杯身(136)を並べていた。平瓶は甕の製作途中で平瓶に作り替えた痕跡が観察できる特殊なもので、さらに、底部を外して杯身の西側に置いている。土器群bは掘方の上端に近い場所で、盛土の除去後に確認したことから、石材を構築する前に配置したと考えられる。

東側(土器群c)の遺物は、石材を構築する際の裏込め作業が終了した段階で須恵器高杯(150)の杯部に椀(151)を載せ、蓋杯(138～149)を円形に配置していた。この後に最終段階の土盛を行ったと考えられる。また、土器群周辺で須恵器壺(152・153)、提瓶(159)、鉄鍔(153～155)が散在している。

このように、古墳の造営に伴い遺物を意図的に配置した例としては、曲第2号古墳⁽⁹⁾(庄原市口和町)や緑岩古墳⁽¹⁰⁾(三次市南島敷町)などがあるが、いずれも古墳時代中期あるいは後期初頭の時期で、周溝内からの出土である。本古墳と同時期の金田第2号古墳⁽¹¹⁾(庄原市口和町)は、閉塞石前の墓道から蓋杯が3組ごとに2列に並んだ状態で出土している。6組の内1組は蓋をした状態、他は口縁を上にして重ねた状態である。開口部の墳丘掘両側に石の台を設置し、その上に須恵器

大甕を1個据えた状態で出土している。このように、広島県内において墓前祭祀といわれるような状況を示す出土例は、金田第2号古墳の例を含めて数例確認され、いずれも後期後半から7世紀初頭の時期である。本古墳のように、石室の築造途中・最終的な土盛を行う前に意図的に土器を並べた例は現段階では少ないと思われ、築造時期による墓前祭祀の変化であるか、集団による祭祀の違いであるかは、調査例の増加を待って検討を行いたい。

次に石室構造の特徴として、奥壁の積み方が県北部で多くみられるものが大形の石材を一枚ないし2枚を立て奥壁としているのに対して、本古墳は石材を横にして3段積んでいることがあげられる。この石積みの状況は、梅本健治氏による石室基底石の石積み方法の分類⁽¹²⁾によるとA3'類ないしA4類に入り、県内で25基確認されている。しかし、石材を横積みに3段という形態は、石室の規模の違いはあるものの梅本平古墳⁽¹³⁾(三原市本郷町)や横大道第1号古墳⁽¹⁴⁾(竹原市新庄町)など畿内の影響を受けている石室と共通していると考えられる⁽¹⁵⁾。

次に両側の壁に立石が玄室と羨道との境界として存在していることがあげられる。県内では無袖式の横穴式石室で立石が認められる古墳は20基確認⁽¹⁶⁾されている。この内、本古墳と同様に壁の両側に内側へ突出しない立石が確認されている古墳は、池ノ奥古墳⁽¹⁷⁾(世羅郡世羅町)と久々原第10号古墳⁽¹⁸⁾(三次市西酒屋町)の計3基である。立石により玄室と羨道を区別していることは、片袖・両袖式の横穴式石室と同様な形態として、玄室と羨道を区別する認識が残されていたことを示していると考えられる。

出土した遺物の内、他の古墳と比較して鉄製品の出土量が多く、特に茎部の関の形状が棘状のものが、鉄鏃37点(茎を含む)の内、21点と半数以上である。先述のように、棘状関は須恵器の編年でTK209型式に並行している時期に出現している形態で、鉄生産と関連しているとも考えられている⁽¹⁹⁾。また、本古墳と同時期の古墳から出土している鉄鏃で棘状関の形態を確認できるものは少なく、本調査例を契機として今後の調査で増加すると思われる。

以上のように、長畑山古墳は6世紀後半~7世紀初頭頃に築造と埋葬が行われ、短期間に2回の追葬と石室の再利用による埋葬が行われていた。馬洗川中流域の北岸は三玉大塚古墳、本古墳の立地する南側丘陵には、海田原古墳群・長畑山古墳群・下矢井南古墳群など中期から後期後半までの多くの古墳が立地している。これらの古墳の被葬者・集団の生産基盤が馬洗川兩岸の平野部や谷あいの平野部だけとは考え難く、道ヶ曾根遺跡・見尾西・東遺跡・白ヶ迫製鉄遺跡⁽²¹⁾が同一の流域であることから、本古墳の被葬者は鉄の生産に関わりを持っていた可能性がある。

註

- (1) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(12)茶臼古墳』2011年
- (2) 三次盆地では、出現期(前期前半)の古墳と確認できるものはなく、前期後半にさかのぼる可能性のある古墳が数基推定されているだけである。
- (3) 広島県教育委員会「Ⅱ-9 峠ヶ谷北古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)』1979年

- (4) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(29) 宮の本第20～26・31・32号古墳』2013年
- (5) 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター『紫佐池古墳』2003年出土した板材から、組合式の木棺を復元している。P 215
- (6) 須惠器の年代については、田辺昭三『須惠器大成』角川書店を使用し、大阪府近つ飛鳥資料館『年代のさし-陶色の須惠器』を参考にした。
- (7) 杯42・43の時期は、43が貼付け高台であることや口縁部が外方へ開いていることから、概ね向田編年Ⅲ形式第3段階(7世紀末頃)に相当している。
向田裕始『芸備地方における須惠器生産(1)-古墳時代を中心にして-』『芸備古墳文化論考』芸備友の会 1985年
- (8) 水野敏典『古墳時代鉄剣の変遷にみる儀仗的武装の基礎研究』平成18年度～平成20年度科学研究費補助金 基礎研究(C) 2009年
- (9) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(16) 曲第2～5号古墳』2011年
曲第2号古墳は鉄剣が共存し、埋葬施設である粘土槨から三角板横短板併用版止短甲が出土するなどしている。周溝内から杯壺6点、杯身2点、有蓋高杯2点、高杯1点、土師器高杯6点、甕2点がまとめて出土し、土師器甕の1つに赤色顔料が入っていたと推定している。土器以外に鉄器(鉄剣2・鉄鏃1・鉄斧1・刀子1・鉄鉾1)も出土している。
- (10) 広島県教育委員会『緑岩古墳・三次地区工業団地第2期造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査』1983年
緑岩古墳は、周溝内に深さ10cmの小土坑内に蓋杯のセット12組が蓋をした状態で3段に重ねていた。1組のセットの身の中にカワナナが盛られ、墓前祭祀の意味合いを含んだ周溝内祭祀と考えている。
- (11) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『金田第2号古墳発掘調査報告書』1999年
- (12) 梅本健治『Vまとも一石室構造の検討-』『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3) 池ノ奥古墳』財団法人広島県教育事業団2007年
県内で発掘調査が行われ、石室の構造が判明する横穴式石室(156基)の集成を行い、奥壁基底石の配置状況を以下の4つに分類・細分している。長畑山古墳はA3'ないしA4類の範疇に収まる。
A類=1個の石材を基底石とする場合(95基・60.9%)
A1類=石材1個のみ、
A2類=石材1個の上方隅に小礫を詰めるもの
A3類=石材2個を上下に重ねるもの
A3'類=A3類の最上段に小型の石材を1段載せるもの
A4類=基底石1個の上に小型石材を2段以上積むもの
A5類=基底石の上に1段小型石材を複数個並べるもの
A5'類=基底石の上に横長の小型石材を1個載せるもの
B類=左右に大型の石材を2個広口積みする場合(51基・32.7%)
B1類=左右に大きな石材2個が並ぶもの
B2類=B1類の上に小型石材を2段以上積むもの
B3類=B1類の上に大きな石材1個を横長に積むもの
B3'類=B1類の上に比較的大きな石材を左右2個積むもの
C類=基底に3個以上の石材を左右に並べて広口積みする例(4基)
D類=基底にあまり大きな石材を用いず、石材を狭めた小口積み・横積みする例(2基)
(不明=4基)。
- (13) 福井万千『古墳の築造と変遷 原始古代』『三原市史第一巻 通史編一』三原市1977年 P 88-89
- (14) 藤田等・本村養章『竹原周辺の考古学的考察』『竹原市史第二巻 論説編』竹原市 1964年 P 62
- (15) 脇坂光彦氏に御教示を得た。
- (16) 註(12) 文献の第2表 発掘調査された広島県内の主要な横穴式石室による。P 28-31
- (17) 註(12) 文献

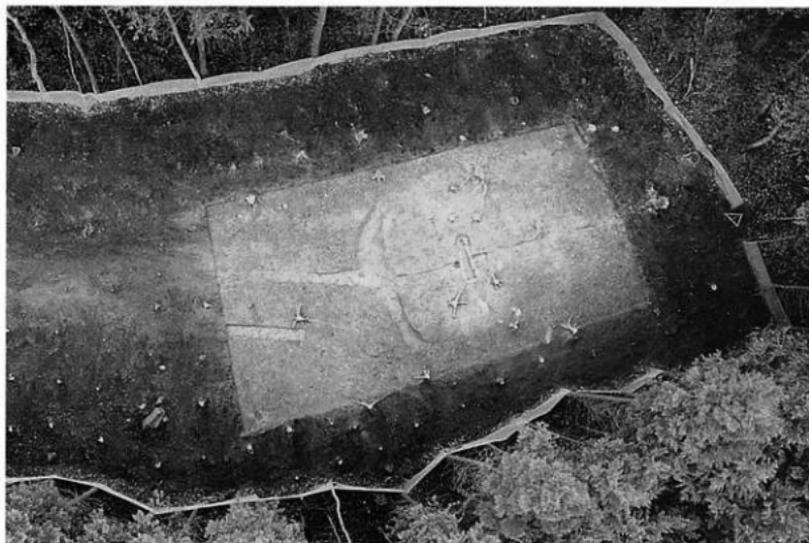
- (18) 広島県教育委員会「久々原第10号古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 1979年
- (19) 註(8)文献 P11
- (20) 資料をX線透過するなどの再精査を行えば、増加する可能性が高い。
- (21) 鉄生産に関わる遺跡として、6世紀後半から8世紀初頭頃に製錬を含めた鍛冶作業を行っていた道ヶ曾根遺跡(財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅱ)1998年』、見尾東・西遺跡(財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅱ)1998年』)、6世紀後半の操業と考えられる白ヶ迫製鉄遺跡(三良坂町教育委員会『白ヶ迫製鉄遺跡』1994年)の調査が行われている。

参考文献

- 桑原隆博「原始・古代編 IV古墳時代」『三次市史Ⅰ』三次市史編集委員会 2004年
- 桑原隆博「原始・古代編」『吉舎町史(上巻)』吉舎町史編集委員会 1988年

第6表の文献

- 1 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「Ⅲ-1. 寺津古墳群」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅰ)』1994
- 2 花園古墳群発掘調査団『花園古墳群—広島県三次市十日市町所在—』1976年
- 3 註(3)文献
- 4 広島県教育委員会「Ⅱ-14.上四拾貫古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅰ)』1978年
- 5 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(10)権現第1~3号古墳』2010年
- 6 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(13)瀬戸越南古墳』2011年
- 7 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(33)箱山第3~6号古墳』2014年
- 8 三次市教育委員会『下山手第4・5号古墳—三次市水道事業(第Ⅲ期拡張事業)に伴う埋蔵文化財の発掘調査—』1994年
- 9 註(4)文献
- 10 三次市教育委員会『陣山古墳群・日野目遺跡—市道山家線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—』2001年
- 11 三次市教育委員会『野稲南第8~11号古墳』2004年
- 12 三次市教育委員会『宗祐池西遺跡』2000年
- 13 三次市教育委員会『掛原下第7号古墳—三次市(Ⅲ期)地区工業団地造成事業に伴う発掘調査報告書—』2002年
- 14 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(7)札幌古墳 大平遺跡 後山大平古墳』2009年
- 15 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(V)—横谷第9号古墳、寺山1~4号古墳、萩原城跡、清誓皇古墓・清誓皇遺跡、宗像神社境内遺跡の調査—』2003年
- 16 三良坂町教育委員会『杉谷第9号古墳』1999年



a 調査区全景 垂直・やや東から



b 墳丘全景 南西から



a 調査前
北東から



b 墳丘土層
北東から



c 周溝土層
西から



a 蓋石検出状況 北西から



b 石棺内土層 北西から



c 石棺検出状況 北西から



d 掘方完掘状況 北西から



長畑山古墳

a 調査区全景
空中写真
東から



b 調査区遠景
北西から



c 調査前
北東から

a 調査前
北西から



b 調査前墳頂部
東から



c 墳丘土層
北から





a 周溝西側土層
北から



b 墳丘検出状況
北から



c 墳丘検出状況
南西から

a 開口部上層
遺物出土状況
北から



b 奥壁上層
人骨出土状況
南から



c 上面土層
南から





a 上面
遺物出土状況1
南から



b 上面
遺物出土状況2
南から

a A区上面
奥壁周辺
遺物出土状況
北から



b A区上面
遺物出土状況
南から



c B区上面
遺物出土状況
南から





a B区上面
遺物出土状況
東から



b 下面土層
南から



c 下面
遺物出土状況
南から

a A区下面
遺物出土状況
南から



b A区下面
遺物出土状況
東から



c B・C区下面
遺物出土状況
東から





a 棺台石
検出状況1
南から



b 棺台石
検出状況2
南から

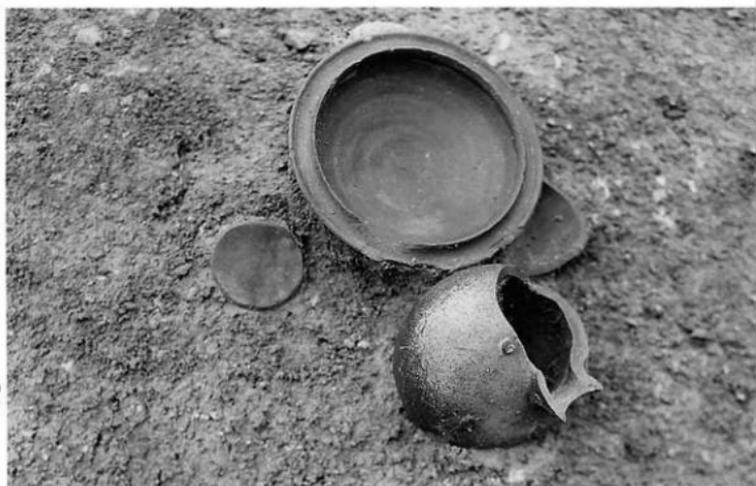


c 土器群 a (周溝内)
出土状況
北東から

a 土器群 b (盛土内)
出土状況 1
左 135 南西から
右 136・137 西から



b 土器群 b (盛土内)
出土状況 2 136・137
南東から



c 土器群 c (盛土内)
出土状況
南東から





a 盛土土層
南から



b 盛土土層北側
東から



c 盛土土層西側
南から

a 盛土土層東側
南から



b 床整地土土層
南から



c 基底石検出状況
南から





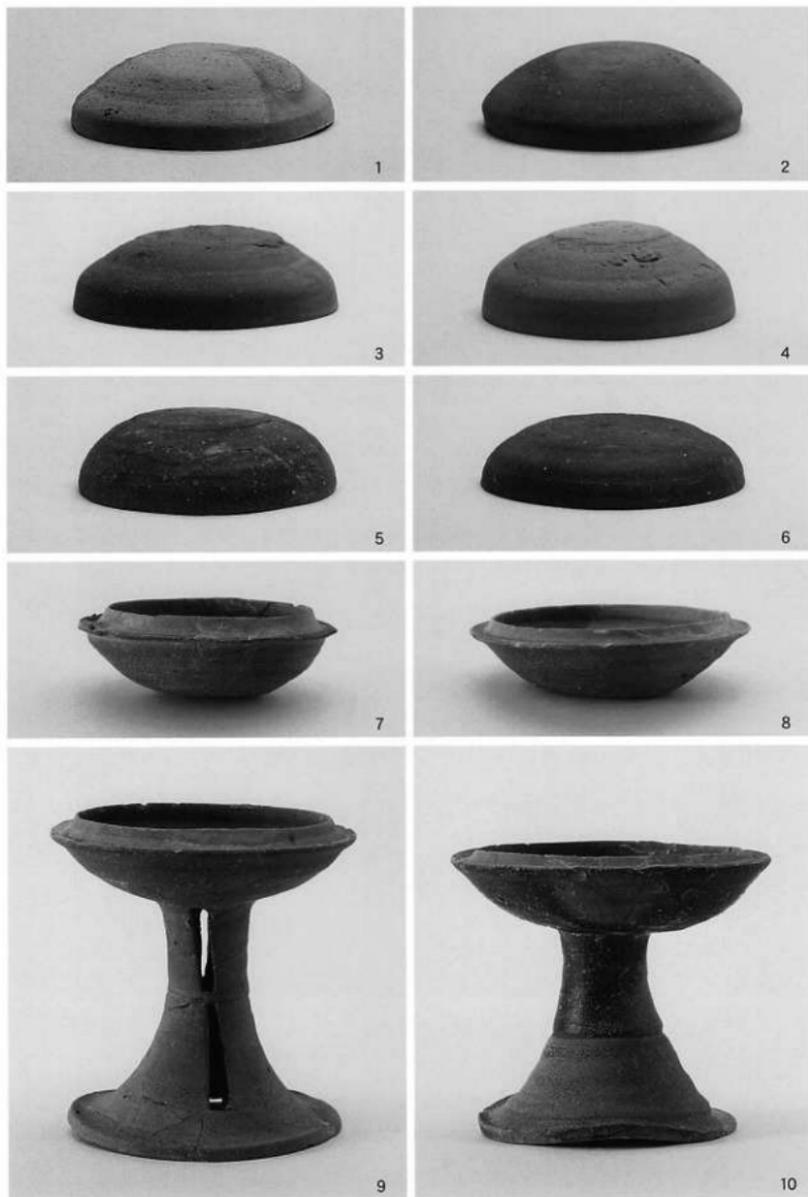
a 掘方
完掘状況
南から



b 完掘全景
西から



c 空中写真
西から



長畑山古墳出土遺物 1





19



20



21



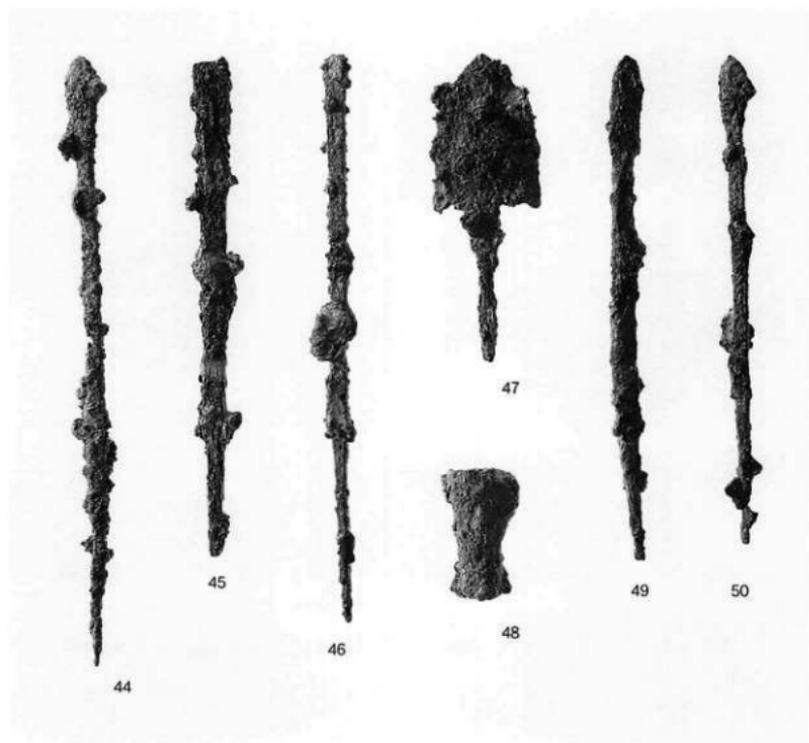
22

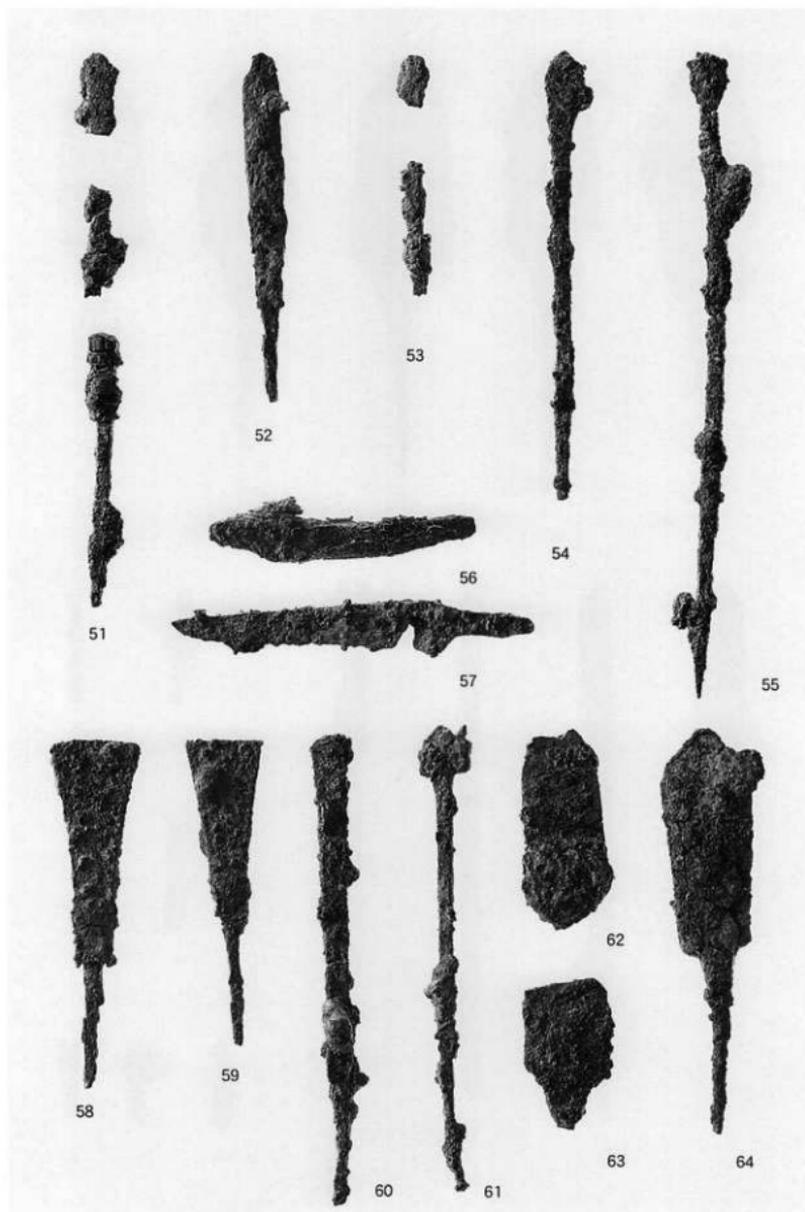


23

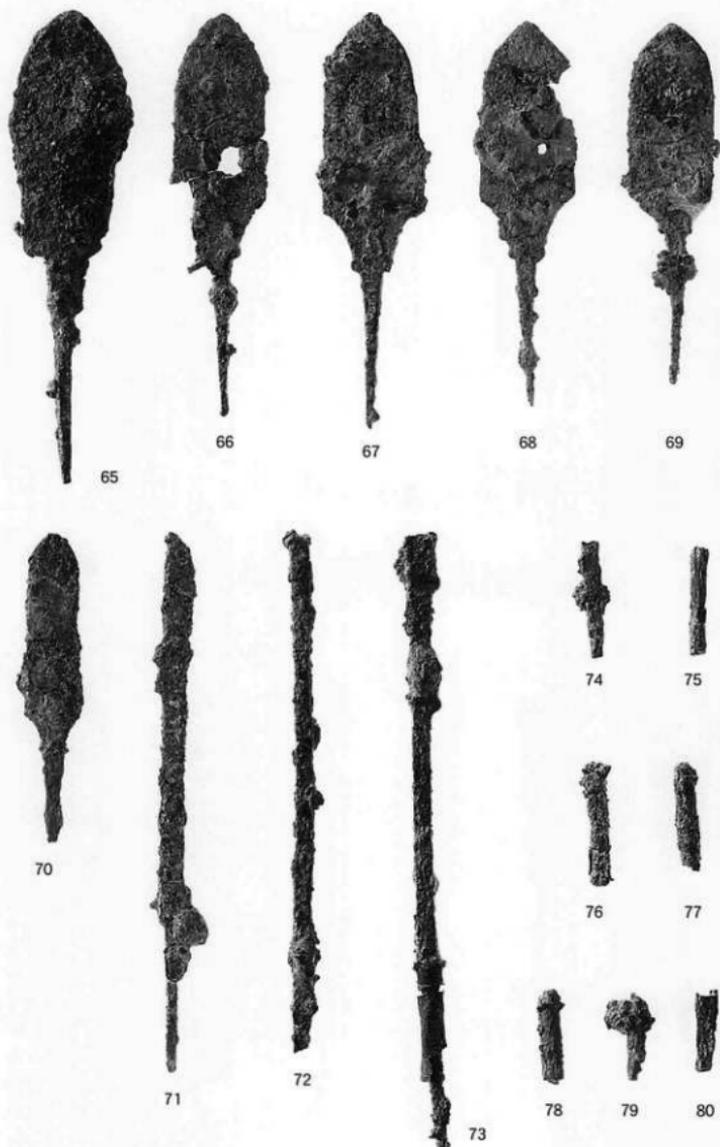


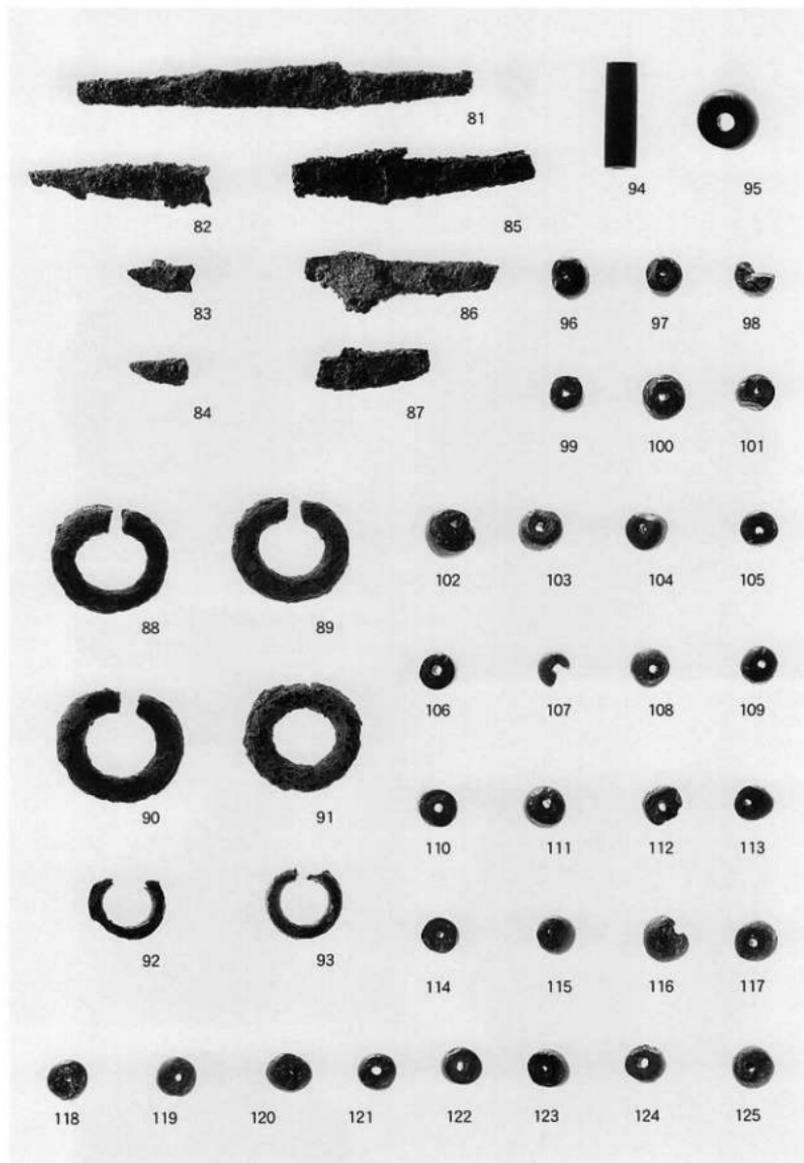






長畑山古墳出土遺物 7







126



127



128



129



130



131



132



133



134



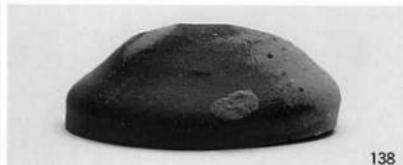
136



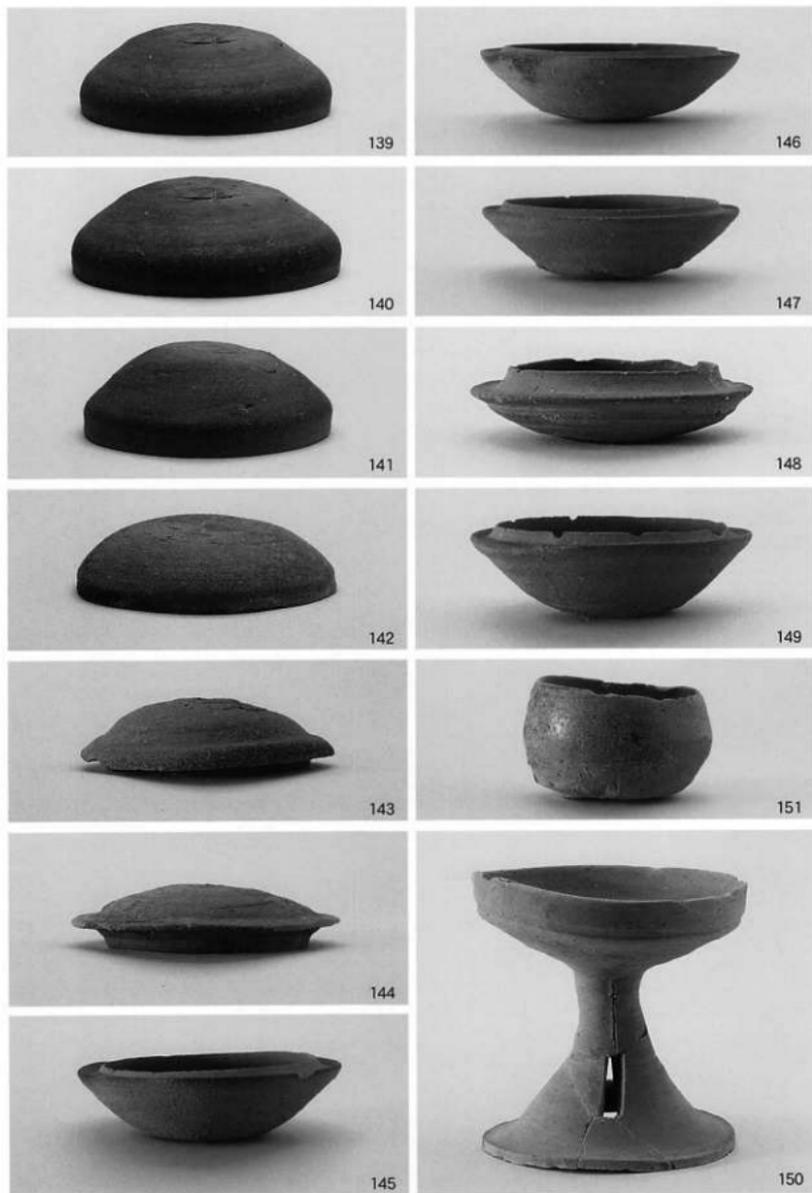
135

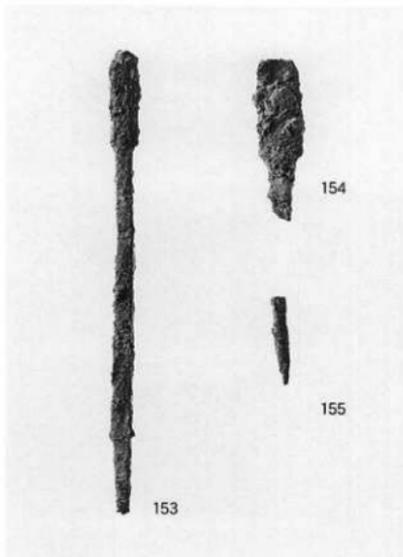


137



138





報 告 書 抄 録

ふりがな	ちゅうごくおうだんじどうしゃどうおのみちまつせんけんせつにともうまいぞうぶんかざいはつくつちょうさほうこく（よんじゅう）							
書名	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（40）							
副書名	殿平古墳・長畑山古墳							
シリーズ名	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第68集							
編著者名	川崎真二、曾根猛、山田繁樹							
編集機関	公益財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室							
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号 TEL082-295-5751							
発行年月日	西暦2015年1月16日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	道路番号					
とのひらこふん 殿平古墳	広島県三次市 吉吉町海田原	34209	34584-396	34°44'02"	132°59'01"	2008 0924	200 520	記録保存調査
ながはたやまこふん 長畑山古墳			34584-398	34°44'02"	132°58'57"	2008 1226		
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
殿平遺跡	古墳	古墳時代中期	箱式石棺	—		—		
長畑山古墳	古墳	古墳時代後期	横穴式石室	須恵器 杯身・杯蓋・高杯・椀・甕・長頸壺・短頸壺・提瓶、土師器高杯・椀、鉄鏃、刀子、耳環、管玉、ガラス玉、土製小玉		古墳時代後期の良好な一括資料		
要 約	殿平古墳	古墳は吉吉町の中心地を西に流れる馬洗川の南側の丘陵頂部に立地する円墳である。規模は直径7.5m程度で南側を円弧状の溝によって墓域を区切っている。埋葬施設は箱式石棺が1基で、石棺の組み方も石材を横長にするなど、近隣の石棺と比べると古い様相がみられる。遺物が出土していないが、築造年代は他の調査例と比較して古墳時代中期頃と考えられる。						
	長畑山古墳	長畑山古墳は横穴式石室を埋葬施設とする直径約11mの円墳で、殿平古墳とは谷を挟んだ西側の丘陵斜面に立地している。古墳は西から東へ傾斜する斜面に南側を開口部として築造されている。石室の規模は、現存長約6m、幅は奥壁側0.8m、開口部側が約1.2mの規模で、奥壁側から南側へ1.7m付近で縦長に使用した立石があり玄室と羨道との境と考えられる。 出土した遺物は須恵器が中心で石室内から杯身・杯蓋・高杯・椀・甕・長頸壺・短頸壺・提瓶、土師器の高杯・椀、鉄鏃、刀子、耳環、管玉、ガラス玉、土製小玉が出土している。出土量が多く、追葬による擾乱以外に後世の盗掘を受けていないと考えられる。埋葬回数は3回と推定でき、古代に再利用されている。築造時期は須恵器の形態からは時代的な大差はみられず、概ね6世紀後半から7世紀を中心に築造・追葬が行われたと考えられる。 鉄鏃は遺存状況が良好で、隅が棒状の形態を有する鏃が半数以上を占めており、この時期の特徴を示す貴重な調査例である。 墳丘盛土の除去中に石室の東・西から遺物が配置された状態で出土している。東側は須恵器高杯・蓋・杯・椀・提瓶などを円形に配置した状態。西側は土師器甕と須恵器の杯身・平瓶を並べた状態であった。特に平瓶は底の接合部を丁寧に取り外し、平瓶の横に置いた状態で出土している。いずれも土を盛る前の祭祀の形態を示していると思われる。						

公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書 68 集

中国横断自動車道尾道松江線建設に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (40)

殿平古墳・長畑山古墳

発行日 平成 27 (2015) 年 1 月 16 日

編 集 公益財団法人 広島県教育事業団事務局 埋蔵文化財調査室

〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目 8 番 49 号

TEL (082) 295-5751 FAX (082) 291-3951

発 行 公益財団法人 広島県教育事業団

印刷所 朝日精版印刷 株式会社